

来たる艱難期：黙示録の歴史

第 2 部 B：艱難期の天の前奏曲

黙示録 4 章 1 節～7 章 17 節

ロバート・D・ルギンビル博士著

内容

I. 天国の前奏曲 ヨハネの黙示録 4 章 1-11 節	2
II. 小羊と巻物 黙示録 5 章 1-14 節	51
III. 聖霊の抑制的な働き	60
IV. 七つの封印 ヨハネの黙示録 6 章 1-17 節	66
1. 白い馬：反キリストの征服(1-2 節)	69
2. 赤い馬 市民の不和(3-4 節)	71
3. 黒い馬：経済的制約(5-6 節)	72
4. 青白い馬：加速する死亡率(7-8 節前半)	74
4b. 四騎兵のまとめ(8 節後半)	75
5. 殺された者たち 大迫害(9-11 節)	81
6. 地震：神の裁きと再臨(12-17 節)	84
V. 144,000 人の封印 ヨハネの黙示録 7 章 1-8 節	86
VI. 天国の群衆 ヨハネの黙示録 7 章 9-17 節	107
VII. 来たる艱難期の兆し	109

はじめに：2 章と 3 章で、教会時代全体の出来事を神の視点からのパノラマ化を完了した後は、4 章から 7 章にかけて、ラオデキヤの時代の終わりと艱難期の始まりの天国から見た現実を鮮明に垣間見ることができます。七つの教会の説明で、神が二千年にわたる教会時代の歴史をどのように見ておられるかを見てきたように、宇宙の真の中心である全能の神の御座の間で出来事が明らかにされます。私たちの主イエス・キリストが、目に見える世界の支配権を得る前の、人類史の最終段階における神の介入が鮮やかに私たちの視界に入るようになるのです。そして、この艱難期への祝福された天の前奏曲、御父と御子が座する世界 (*kosmos*) の真の中心の啓示において、私たちの

目の前に展開する時間、歴史、そしてすべてを本当に支配するのは誰なのかという、見えない現実を説得力ある形で私たちに伝えているのです。なぜなら、4章から7章に書かれている出来事がなければ、艱難期の始まりも、神の子の輝かしい王国が歴史的な日の光の中に現れる前にこの世界が通らなければならない「産みの苦しみの」時期もあり得なかったのです。

1. 天国の前奏曲 ヨハネの黙示録4章1-11節

[ヨハネの黙示録4章1節](#)。

その後、わたしが見ていると、見よ、開いた門が天にあった。そして、さきにラッパのような声でわたしに呼びかけるのを聞いた初めの声が、「ここに上ってきなさい。そうしたら、これから後に起るべきことを、見せてあげよう」と言った。(黙示録4章1節)

その後： この最初の二つの言葉<その + 後>によって、ヨハネはキリストの幻と七つの教会へのメッセージの後に、艱難期の神聖な開幕の幻が直接続いていることを告げています。教会時代の七つの時代に関するキリストのメッセージは、地上で展開されているので地上で与えられ、艱難期の入り口での天国の光景の幻(すなわち、4章から7章の内容)は、天で展開されているので天で示されるくすなわち、ヨハネは、天に「上ってきなさい」と招かれた>ということは、十二分に興味深い点です。教会時代の動向は、過去二千年にわたる地上の信者の集団的な決定によるところが大きいですが、サタンの地上支配における最後の期間が解き放たれるのは、神の意志により、神の時刻表に従って天で始められるのです。

ラッパのような声： [黙示録1章10節](#)で行われたように、キリストの声をラッパの音に例えることは無意味なことではありません(つまり、キリストの声が「大水のとどろき」に例えられる[黙示録1章15節](#)のように、このたとえ<ラッパのようだとたとえられること>だけではないのです)。文字通りのラッパが警告のしるしとして使われ、戦いの準備をするために警報を鳴らすように([民数記10章9節](#); [ヨシュア6章4-9節](#); [エレミヤ4章19節](#); [第一コリント14章8節](#); [黙示録8章2-13節](#), [9章1節](#), [9章13-14節](#), [10章7節](#), [11章15節](#) 参照)、この例えは、この後の艱難についての記述の警告に、心を留める必要があると教えてくれています。1章では、教会の7つの時代の傾向(内的、外的の別なく、それぞれに特徴的な危険性)をキリストの声で宣言し、警鐘を鳴らしていました。しかし、その警告は地上から発せられていました。なぜなら、教会時代の戦いが現在も

行われているのは地上であり、天の支援を受けて地上で行われているからです([マタイ 16章 18節](#), [マタイ 11章 12節](#); [第二コリント 10章 4節](#); [エペソ 6章 10-18節](#)参照)。この文脈で、来たる艱難期の出来事をヨハネに伝えると約束した声も、私たちの主イエス・キリストのものですが(この黙示録自体が主イエスからです:[黙示録 1章 1節](#))、これは天から発せられています(参照:「ここに上がってきなさい!」-[黙示録 4章 1節](#))。なぜなら、王国の誕生に先立つ産みの苦しみである艱難期の出来事は、天から解き放たれ(「封印が解かれること」と聖霊の抑制の働きが取り除かれることについては後述します)、天から積極的に指示されなければならないからです(たとえば、二人の証人、悪魔の天からの追放、七つのラッパの審判、七つの最後の災いなど)、そして、主の栄光の再臨によって天から最終的な勝利の結末をもたらし、世界の正当な支配を引き受けるのです([黙示録 19章 11-21節](#); [詩篇 110篇 1節](#)参照)。私たちの主イエス・キリストの声が、再びラッパのようなと描写されているのは、[黙示録 1章 10節](#)と本質的に同じ意味を持ちます。つまり、このメッセージは警告であり、耳を傾けるすべての人に、その先にある激しい試練のために身を備えるようにとの警鐘を鳴らす意味が強調されているのです。

門: 神の幻の中で、ヨハネは天が開かれるのを見、([エゼキエル 1章 1節](#); [マタイ 3章 16節](#); [使徒行伝 7章 56節](#); [10章 11節](#); [第二コリント 12章 1-5節](#); [黙示録 19章 11節](#)参照) 霊的に「第三の天」に導かれ、見えない神の座の間に入ります¹。この扉は天上の海(これについては、以下を参照)を通して、第三の天へ開かれるのです。今、罪深い人間が天のベールを越えて侵入することができるのと考えるのは例外的なことで、そのようなことは、どんな意味でも、どんな時でも、神と罪深い人間の間のこの障壁を死によって私たちのために打ち壊した主イエス・キリストの働きと勝利によってのみ可能なことです([エペソ 2章 14-18節](#), [4章 7-10節](#); [コロサイ 2章 13-15節](#); [ヘブル 9章 24節](#))。イエスは天国への唯一の真の扉です([マタイ 7章 13-14節](#); [ルカ 13章 24-25節](#); [ヨハネ 10章 7-9節](#), [14章 6節](#); cf. [詩篇 118篇 19-27節](#))、彼はその血によって神ご自身の前に私たちのために入り口を開いた方ですから([マタイ 27章 51節](#); [ヘブル 10章 19-20節](#))。彼を通して、彼にあつて、彼が行ったところに従うことによるのみ([ヘブル 6章 19-20節](#); [ヘブル 2章 10節](#)[ギリシャ語]; [ヘブル 12章 2節](#)参照)、私たちも聖なる場所に入り、永遠に父、子、御霊と交わりができるのです([ルカ 23章 43節](#); [黙示録 3章 21節](#))。

これらのことの後に: この句の唯一の先行詞は、直前の2章と3章の内容、つまりキリ

¹「悪魔の反乱」参照: 患難の背景: 第1部「サタンへの反逆と墮落」、II.3節「三つの天」。

ストの七つの教会へのメッセージです。ですから、この言葉はラオデキヤへの最後のメッセージの終了後、つまりその 144 年の歴史の終わりに起こる出来事を指しているのことになります。ですから、「これらのことの後」とは、私たちの現在の時点から何年も先ではなく、ラオデキヤの最後の教会時代の終わりに起こることになる艱難期の出来事に、注意を向けることになります。逆に、この単純な表現は、七つの教会を歴史的な時代と解釈することもできます。なぜなら、＜七つの教会の記述は、＞七つの封印が解かれてヨハネが目撃する艱難期の出来事の前にあるものだからです²。教会時代と艱難時代の間のこの二つの区分は、この預言の中で、キリストが最初にヨハネに明らかにしたのものにも当てはまります。「現在起こっていること(すなわち、教会時代全体)と、その後起ころうとすること(すなわち艱難期とそれに続く出来事)」([黙示録 1 章 19 節](#))³です。

先に述べたように、ヨハネは地上から教会時代の流れを見る必要がありましたが、艱難期は「天からの」イエス・キリストの啓示の始まりですから([第二テサロニケ 1 章 7 節](#)参照)、まさに神の御座から始まって終結するこの一連の出来事を見るのにふさわしい場所は、天であると言えるでしょう。ですから、この艱難の出来事の預言を受け取るために、第三の天に上がってくるようにとヨハネに命じているのです。

[黙示録 4 章 2-11 節](#)

(2)すると、たちまち、わたしは御霊に感じた。見よ、御座が[第三の]天に設けられており、その御座にいますかたがあった。(3)その座[の上]にいますかたは、碧玉や赤めのうのように見え、また、御座のまわりには、緑玉<エメラルド>のように見えるにじが現れていた。(4)また、御座のまわりには二十四の[他の]座があって、二十四人の長老が白い衣を身にまとい、頭に金の冠をかぶって、それらの座についていた。(5) [神の]御座からは、いなくも、もろもろの声と、[神の]雷鳴とが、発していた。また、七つのともし火が、御座の前で燃えていた。これらは、神の七つの霊である。(6)御座の前は、水晶に似たガラスの海のようにであった。御座のそば近くそのまわりには、四つの生き物がいたが、その前にも後にも、一面に目がついていた。(7)第一の生き物はししのようであり、第二の生き物は雄牛のようであ

² また、ラオデキヤに先立つ最後から二番目の教会時代であるヒラデルヒヤは、時系列的に「大いなる試練の時から守られていて」、現在のラオデキヤの教会時代が艱難期に突入することになることを学んできました。

³ [黙示録 1 章 19 節](#)の「(今)起こっていること」を教会時代全体の概要としての解釈を排除すると、教会時代全体が何らかの理由で主の将来の出来事の展望から除外されることになります(しかし、それだと当時でさえ教会のごく一部であった七つの地方教会だけは例外ということになります)。

り、第三の生き物は人のような顔をしており、第四の生き物は飛ぶわしのようであった。(8)この四つの生き物には、それぞれ六つの翼があり、その翼のまわりも内側も目で満ちていた。そして、昼も夜も、絶え間なくこう叫びつづけていた、「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、全能者にして主なる神。昔いまし、今いまし、やがてきたるべき者」。(9)これらの生き物が、御座にいまし、かつ、世々限りなく生きておられるかたに、栄光とほまれとを帰し、また、感謝をささげている時、(10)二十四人の長老は、御座にいますかたのみまえにひれ伏し、世々限りなく生きておられるかたを拝み、彼らの冠を御座のまえに、投げ出して言った、(11)「われらの主なる神よ、あなたこそは、栄光とほまれと力とを受けるにふさわしいかた。あなたは万物を造られました。御旨によって、万物は存在し、また造られたのであります」。

御霊に感じた：これは、[黙示録 1 章 10 節](#)で見たのと全く同じギリシャ語の表現です。「わたしは御霊の中にいるようになった<口語:わたしは御霊に感じた>」とは、ヨハネが預言的な「恍惚状態」(文字通りには「自分の外に立つ」)を表現したもので、他の聖書の靈感作家にも見られる、神によって引き起こされた預言的状态です([民数記 12 章 6 節](#); [エゼキエル 1 章 1 節](#); [1 章 3 節](#), [2 章 1 節](#), [8 章 3 節](#), [40 章 2 節](#); [ダニエル 10 章 1-7 節](#); [ミカ 1 章 1 節](#); [ゼカリヤ 1 章 8 節](#), [4 章 1 節](#); [使徒行伝 10 章 10 節](#), [11 章 5 節](#), [22 章 17 節](#); [第二コリント 12 章 1-4 節](#); [第二ペテロ 1 章 20-21 節](#); [黙示録 4 章 2 節](#), [17 章 3 節](#), [21 章 10 節](#); 以下も参照: [イザヤ 6 章 1 節](#)~; [エレミヤ 1 章 4-19 節](#); [ホセア 1 章 1-2 節](#); [アモス 8 章 1 節](#), [9 章 1 節](#)) さて、ヨハネは「書きなさい」というイエスの声を聞いて以来、この同じ預言的状态にいます([黙示録 1 章 10-11 節](#))。この句の繰り返しは、ヨハネの状態の変化や変更を意味するものではありません。むしろ、この言葉は、「神の幻」の中で、地上から天上へとヨハネの居場所が急速に変わったこと、つまり、聖霊によって完全に霊的に実現したことを説明するために与えられています([エゼキエル 8 章 3 節](#); [40 章 2 節](#); [第二コリント 12 章 1-4 節](#)を参照のこと)。

天の神殿：ここでは特に言及されていませんが、黙示録の他の箇所から(また聖書の他の箇所から)、ヨハネがここで神の天の神殿に連れて来られたことは明らかです([黙示録 7 章 15 節](#), [11 章 19 節](#) [2 回]; [14 章 15 節](#), [14 章 17 節](#), [15 章 5 節](#), [15 章 6 節](#), [15 章 8 節](#) [2 回]; [16 章 1 節](#), [16 章 17 節](#); [サムエル記下 22 章 7-10 節](#); [イザヤ 6 章 1-4 節](#); その他を参照のこと)。ここと黙示録を通して、神の神殿(地上ではユダヤ人の神殿と幕屋によって象徴的に表現されています:特に[ヘブル 9 章 1-28 節](#)参照)の本当の目的を見ることができます。その目的とは、すなわち、神ご自身の住まいとして、いわば神の一時的な「戦闘本部」として機能し、そこから、人類の歴史の終わりに完全な勝利を収めて新しくされた地上に戻るまで、地上の出来事を監視し指示し続けること

です(黙示録 20 章,21 章,22 章)。今、ヨハネがいる「神殿」は、神の天の「宮殿」とも言える「玉座の間」です。ここで使われているギリシャ語 (ナウス *naos, ναός*)は「神殿」を意味しますが、その訳語であるヘブル語 (七十人訳と新約聖書の両方)は「神殿」と「宮殿」(ヘサル *heychal, הֵיחַל*)の両方を意味します(訳者註:「神殿」は神を礼拝する場所、「宮殿」は王やその家族が住む場所)。この天の家が私たちの神の神殿であり宮殿であることは、御座の描写、御父の威厳ある姿、そして御父に侍る王宮、天宮の運営から明らかでしょう。いずれにせよ、この場合の神殿と宮殿の区別は、「王としての神」や「神の宮殿としての神殿」というモチーフがほとんど当然であった多くの古代文化において(神殿と宮殿の)区別はできなかったことでしょう。(ヘブル語では両方の概念を表す単語が一つであることを参照ください)。さらに、私たちの神は宇宙の支配者であられるので、永住されようが、一時的であろうが、どんな場所でも事実上、そこは偉大で全能なる王の住まわれる「宮殿の中の宮殿」となるのです。(詩篇 5 篇 2 節, 9 篇 7 節, 10 篇 16 節, 24 篇 9-10 節, 29 篇 10 節, 47 篇 7 節, 84 篇 3 節, 145 篇 1 節; イザヤ 6 章 5 節, 43 章 15 節; エレミヤ 10 章 10 節; エゼキエル 43 章 7 節; ダニエル 4 章 34-35 節; アモス 9 章 6 節; マラキ 1 章 14 節; 第一テモテ 1 章 17 節; 黙示録 15 章 3 節)

主はその聖なる宮(英語ではtemple=神殿)[または宮:ヘサル、הֵיחַל]に
いまし、主のみくらは天にあり、(詩篇11篇4節前半)

ヨハネはこれらの節で言及されているものを幻の形で見っていますが、第三の天にある神の玉座の間の御座とすべての物は真の天の現実であり、当時存在していたように、また現在も確実に存在しているように、ここでは描写されています。神が霊であり、目に見える地上であれ、目に見えない第三の天であれ、物質的な宇宙において、このような局所的な居住を必要とされません(列王記上 8 章 27 節;使徒行伝 17 章 24-25 節)が、しかしこのこと(上記に述べられたこと)は真実です。被造物である人間と天使のために、この識別可能な「本部」が設置され、天使と人間の両方が、主が宇宙を全体的に支配していること(列王記上 22 章 19-21 節; ヨブ記 1 章、2 章を参照)、特にここでの目的では、御子という方において、地上に対する直接的かつ目に見える支配が、再び確立されたことを目撃できるようにされているのです。なぜなら、キリストの再臨に先立つ「産みの苦しみの」時代である「艱難期」を神が解き放とうとしているのは、まさに地上に対する直接的で目に見える神の支配を再確立するためだからです。ヨハネが天に招かれたのは、まさに神の王国を、御子を通して地上に再確立するための前段階を見るためなのです。

主はわが主に言われる、「わたしがあなたのもろもろの敵をあなたの足
台とするまで、わたしの右に座せよ」と。(詩篇110篇1節)

「わたしはわが王を聖なる山シオンに立てた」と。(詩篇2篇6節)

シオンの娘よ、大いに喜べ、エルサレムの娘よ、呼ばわれ。見よ、あなたの王はあなたの所に来る。(ゼカリヤ9章9節前半)

異教徒の文化では、天に神がいて、地上に人間がいるという考えが自然であるかもしれませんが、聖書の観点からは、神が天で「天幕」を張っているのは一時的な状態であり、人間が神から分離しているのも一時的な状態であり、両方の状態は被造物の反逆(前者はサタン、後者はアダム)の結果であることをここで再度強調することは重要です。異教徒の文化では、神々というのは、人が「自分の用事を済ます」ことができるように、しばしば宥めておかなければならない存在のようなものですが、聖書の真のものの見方では、問題なのは人間であり、私たちの主イエス・キリストという賜物を通して、神の介入によって問題から救って頂いているだけなのです。この個人的、霊的な解放は、現在、世界的、物質的な解放へと開花しようとしています。私たちの神は、来たる艱難期の過程で、地球とすべての不義の敵に決定的な裁きを下し、メシアによって地球に対する神の直接的、主権的支配を再確立しようとしているのです。この勝利の完結の時、すべての敵がメシアの勝利の足下に置かれ(第一コリント 15 章 25 節)、父なる神も再び「人の間に」住まれ、「新しい天と新しい地」(第二ペテロ 3 章 10 節; 黙示録 21 章 1 節)において完成と正義と完全な調和がついに回復し、すべての悪と悪事を働く者が、天と地から永遠に取り除かれます(黙示録 21 章 2-23 節, 22 章 1-4 節)⁴。

また、御座から大きな声が叫ぶのを聞いた、「見よ、神の幕屋が人と共にあり、神が[今]人と共に住み、人は神の民となり、神自ら人と共にいます、(黙示録21章3節)

使徒ヨハネがここで説明した天のしつらえは、地上の幕屋の構造と調度品が「その型に倣って」作られた原型です(ヘブル 8 章 5 節; 詩篇 80 篇 1 節, 99 篇 1 節; コロサイ 2 章 17 節; ヘブル 10 章 1 節 を参照)。地上の幕屋は、真の天の神殿に関する重要な情報を神の民に伝えるために、神の命令で建てられました(ヘブル 8 章 5 節)。後に黙示録で言及される天の対応物の記述に備えるために、ここで取り上げられるユダヤの幕屋とその調度品の象徴的な意味を考慮しなければなりません。

⁴ 将来のこのプロセスの概要については、『悪魔の反乱』のパート 5 をご覧ください: 艱難時代の背景「裁き、回復、置き換え」の第 IV 部「来るべき事柄: 裁き、回復、置き換えの第二段階と第三段階」をご覧ください。

天の神殿の型としての地上の幕屋と神殿:

1. 庭(出エジプト記 25 章-40 章参照)。

a. 中庭: ヘロデの神殿では、「祭司の中庭」とも呼ばれました。この囲いは、幕屋と後の神殿の両方において、門(すなわち、イエス・キリスト: 私たちの主を「扉」と見なし、上記参照)から入ってきた地上の信者の聖なる共同体を表し、入り口のところで十字架の型である厚板の祭壇に直面する主の犠牲を受け入れるものです。神によって聖別された人と救われていない人を隔てる庭の囲いや「壁」は、罪に対する神の「敵意」を表しています。それは、地上にいながら神との交わりの場に入る唯一の門または扉であるイエス・キリストにおいてのみ取り除かれます([エペソ 2 章 11-22 節](#))。私たちの地上での経験(キリストを受け入れて地上の神との交わりの宮に入るか、キリストを拒絶してこの宮から排除されるか)を語る型としての宮とその物理的囲いは、天上の神殿を象徴しているわけではありません<罪に対する敵対ということは天の神殿ではない>。

b. 青銅の祭壇: 天の神殿には、祭壇に相当する物がありません。それは、この祭壇が十字架([第一コリント 5 章 7 節](#); [ヘブル 9 章 11-14 節](#); [第一ペテロ 1 章 19 節](#))を象徴しているからで、キリストが私たちのために犠牲になった場所であり、地上での犠牲が達成された場所です。この祭壇は「香の祭壇」と区別されます。香の祭壇は、後述の黙示録 4 章に登場する祭壇と同じものです(下記参照)。

c. 洗盤: これはソロモンの宮の中庭にある「海」とも呼ばれています([列王記上 7 章 23-26 節](#); [列王記下 16 章 17 節](#); [歴代誌下 4 章 2-5 節](#); [エレミヤ 27 章 19 節](#))。洗盤は、地上の宮にある物品の中で、天上の神殿において同じ向きで置かれている唯一のもので、宮が地上を表している以上、神の天の神殿にある類似した「ガラスの海」と洗盤の海との関係について、ここで簡単に説明する必要があります。

[黙示録 4 章 6 節](#)にある「水晶に似たガラスの海」とは、実は天の上層の水のことで、それは空と宇宙の二つの天と、神の神殿の場所である第三の天との間にある天の円形の「丸天井」を形成する「上の水」です([創世記 1 章 6-7 節](#); [イザヤ 40 章 22 節](#))。したがって、天の海では、いわば天の「上の水」を見ているのです。この天の海を象徴する地上の洗盤が凹型(真鍮の容器)と平型(水の上面)であることも重要で、この二つの部分はそれぞれ、真の天の姿の重要な部分を表しています。青銅は天の大空を表し、水はその上の天の海を表しているからです(参照:[イザヤ 40 章 22 節](#))。天の神殿であ

る第三の天から見れば、天の海の平らな面はすぐに目に入るものです。しかし、地上にいる私たちから見ると、天は凹んだ形をしており(空を見上げるとわかる)、幕屋の青銅でできた水の入った半球もその凹んだ形を表しています。

彼[が]地の円(地上から見た天の「円形の天蓋」)の上に[座して]おり、その住民は[彼の目には]バツタのようである。彼は(詩篇 104 篇 2 節参照)天を幕のように張り巡らし、天幕のように広げて住まわれる方です(つまり、第三の天から見下ろす天の海と大空を合わせた「平らな」姿のこと)。(イザヤ 40 章 22 節 英文直訳)

どちらから見ても異なる外観を示す二つのものの複合体として捉えたものであり、天と海が、幕屋と神殿の組織において、このように二重に表現されるのは驚くべきことではありません、つまり、幕屋の幕が第三の天からの眺めを表し、洗盤の海が地上からの眺めを表しているのです。さらに重要なことは、この二重の表現が、人間と神との関係の二つの異なる側面を強調していることです。一方では、「天の水」と「天<複数 heavens>の大空」は、第三の天にある神の「住まい」と地上にある人間の住まいを地理的に分離する役割を明確に果たしています。<幕屋の中は厚い垂れ幕により、手前の聖所と奥の至聖所に仕切られていましたが>祭司だけが行ける幕屋の垂れ幕の外側<聖所>と大祭司(昇天したキリストの予型)だけが行ける垂れ幕の内側<至聖所>は、聖なる神と罪深い人間との分離という原理を効果的に伝えています。一方、天は神の栄光を映し出し、全人類はその証しによって神を認識しています(ローマ 1 章 18-20 節; ヨブ記 38 章 1-38 節; 詩篇 8 篇 1-4 節; 19 篇 1-6 節, 97 篇 6 節; 使徒行伝 17 章 24-31 節参照)。青銅で作られ、水で満たされた海は、鏡のように反射する性質がありました(実際、元々は鏡で作られていました: 出エジプト記 38 章 8 節)。洗盤の海を見つめる者は、自分自身と天空を映さずにいられませんでした。このように洗盤の海は、その独特の反射性によって、罪深い人類が、神と私たちの間に立つ神の素晴らしい天を背景に、自分自身を見つめるという象徴を効果的に伝えています。ちなみに青銅は裁きを象徴しており(例: 火炉の祭壇)、この比較の悲惨さを際立たせています。ですから、洗盤の海を見下ろして天の反射を見るにせよ、天を見上げるにせよ(天は分離幕で表現されています)、人は自分の欠点のある性格と神の完全な性格を理解することを余儀なくされ、その結果、神の恵み深い助け、すなわち御子である私たちの主イエス・キリストの御姿にある永遠の命を受けるための適切な心構えを持つようになるのです。このように、私たちがこれらのことを正しく「熟考」するとき、正しい反応は、救いと赦しを求めて信仰をもって神に立ち返ることです(洗盤での清めの水による洗いで表され

ます：[エペソ 5 章 26 節](#)参照）。⁵ この洗盤の海に見られる反射の象徴は、天の特質としてよく証明されているもので、天は神ご自身の証しを常に世に「注いで」います（したがって、私たちが所有する神の最高の「反射鏡」である神の御言葉はその代理なので；[詩編 8 篇 1-4 節](#)、[97 篇 6 節](#)；[ローマ 1 章 18-20 節](#)を参照）。

- (1) もろもろの天は神の栄光をあらわし、大空はみ手のわざをしめす。
- (2) この日は言葉をかの日につたえ、この夜は知識をかの夜につげる。(3) 話すことなく、語ることなく、その声も聞えないのに(=天・大空)、(4) その響きは全地にあまねく、その言葉は世界のはてにまで及ぶ。神は日のために幕屋を天に設けられた(すなわち夜空の天/おおぞらの中に隠された)。
- (5) 日は花婿がその[結婚の]祝のへやから[輝き]出てくるように、また勇士が競い走るように、その道を喜び走る。(6) それは天のはてからのぼって、天のはてにまで、めぐって行く。その暖まりをこうむらないものはない。[\(詩篇19篇1-6節\)](#)

あなたは[金属を]鑄た鏡のように堅い大空を、彼のように張ることができるか。[\(ヨブ37章18節\)](#)

- (22) そして、御言を行う人になりなさい。おのれを欺いて、ただ聞くだけの者となってはいけない。(23) おおよそ御言を聞くだけで行わない人は、ちょうど、自分の生れつきの顔を鏡に映して見る人のようである。(24) 彼は自分を映して見てそこから立ち去ると、そのとたんに、自分の姿がどんなであったかを忘れてしまう。(25) これに反して、完全な自由の律法(すなわち、心の完全な鏡である聖書)を一心に見つめてたゆまない人は、[みことばを]聞いて忘れてしまう人ではなくて、実際に[みことばに靈感されて]行う人である。こういう人は、その行いによって祝福される。[\(ヤコブ 1 章 22-25 節\)](#)

わたしたちは、今は、(天国のことを)鏡に映して見るようにおぼろげに見ている。しかし(主に会う)その時には、顔と顔を合わせて、(主を)見るであろう。わたしの知るところは、今は一部分にすぎない。しかしその時には、わたしが完全に知られているように、完全に知るであろう。[\(第一コリン](#)

⁵ この原則は救いにも当てはまり、告白による罪のきよめにも当てはまり、洗盤は確かに象徴的なきよめのために用いられました(出エジプト 30 章 19-21 節とヨハネ 13 章 1-20 節を比較してください。)

[ト13章12節](#))

d. 幕屋と最初の〈一番外側の覆いの〉幕: 幕屋の幕が空とその向こうの宇宙を表していることは、人間の努力では人間と神の間には、遠い隔たりがあり人の届くところには神はおられないことをうまく示していることはすでに説明しました(内側の幕については、以下を参照してください)。なぜなら、「キリストを引き降ろすために天に上る」([ローマ 10 章 5-10 節](#): [申命記 30 章 12-14 節](#)も参照)ことができるのは誰でしょうか。明らかに、天の幕屋(地上のアクセスは神を代表する者以外には不可能)に入る方法は、神の恵み深い御配慮(ディスペンセーション)以外にはあり得ません。レビ人の儀式が明らかにしたように、天を表すヴェールの向こう側には、罪深い礼拝者のために屠られた完全な犠牲者の血(私たちに代わって救い主が犠牲となられた死の明確な象徴)を通して(つまり、永遠の幕を突き破る唯一の方法による)しか、入れないからです。幕屋は四枚の層の〈覆う〉幕で構成されていました:

1) 暗い色の一番外側の覆う幕。天空の大空を象徴する、なめした黒い皮のような「じゅごんの皮」の外幕は、青黒い水のような外観で、きらきらと輝いており、見透かすことはできません。

2) 赤く染めた雄羊の皮の幕〈外側から二番目の覆いの幕〉は、隔ての障壁を取り除いて神と和解させるために血を流された、人と神の間の唯一の仲介者、私たちの主イエス・キリスト、メシア、汚れも傷もない小羊を象徴しています。その犠牲なしでは入ることは不可能でした ...

3) 山羊の毛でできた「天幕」は、第三の天におられる父の聖なる住まいと私たちを隔てる広大な空間であり、小羊の血によってのみ貫通できる裂け目を表しています(参照:[ヘブル 1 章 3 節](#), [6 章 19-20 節](#), [9 章 11-14 節](#), [9 章 24-25 節](#), [10 章 20 節](#))。

4) 一番内側の亜麻布の幕は、青(私たちにアクセスを与えてくださる唯一の方の天の起源を反映)、紫(私たちにアクセスを与えてくださる唯一の方が王族であることを反映)、緋(私たちにアクセスを与えてくださる唯一の方の犠牲を反映)色の糸で織られていました。この層にはケルビムの刺繍が施されていますが、これは神の聖なる住まい、すなわち空と宇宙の大空の上に横たわる第三の天(キリストなしには到達し得ない)を象徴しています⁶。

⁶ 色の象徴は、M.F. Unger, Commentary on the Old Testament (Chicago 1981) v.1, p.135 によります。これらの特徴は内側の幕([出エジプト 26 章 31 節](#))にも当てはまります。

…そして[私たちの]罪のきよめのわざをなし終えてから、いと高き所にいます大能者の右に、座につかれたのである。(ヘブル1章3節後半)

さて、わたしたちには、もろもろの天をとおって行かれた大祭司なる神の子イエスがいますのであるから、わたしたちの告白する信仰をかたく守ろうではないか。(ヘブル4章14節)

この望みは、わたしたちにとって、いわば、たましいを安全にし不動にする錨であり、かつ「幕(=天)の内」にはいり行かせるものである。その幕の内に、イエスは、永遠にメルキゼデクに等しい大祭司として、わたしたちのためにさきがけとなって、はいられたのである。(ヘブル 6章19-20節)

(1)以上述べたことの要点は、このような[素晴らしい]大祭司がわたしたちのためにおられ、天にあって大能者の御座の右に座し、(2)人間によらず主によって設けられた真の幕屋なる聖所で仕えておられる、ということである。(3)おおよそ、大祭司が立てられるのは、供え物やいけにえをささげるためにほかならない。したがって、この大祭司もまた、何かささぐべき物を持っておられねばならない。(4)そこで、もし彼が地上におられたなら、[モーセの]律法にしたがって供え物をささげる祭司たちが、現にいるのだから、彼は祭司ではあり得なかったであろう。(5)彼らは、[実際に]天にある聖所のひな型と影とに仕えている者にすぎない。それについては、モーセが幕屋を建てようとしたとき、御告げを受け、「山(すなわち、シナイ山)で示された型どおりに、注意してそのいっさいを作りなさい」と言われたのである。(ヘブル8章1-5節)

しかしキリストがすでに現れた祝福の[真の]大祭司としてこられたとき、手で造られず、この世界に属さない、さらに大きく、完全な幕屋[のペール]をとおり(すなわち、天を通過して第三の天へ)、かつ、やぎと子牛との血によらず、ご自身の血(すなわち、死)によって、一度だけ聖所にはいられ、それによって永遠のあがないを全うされたのである。(ヘブル9章11-12節)

2. 聖所(出エジプト記第 25 章～第 40 章参照)。

幕屋<移動式天幕>と後の神殿<イスラエルが定住した後に建立された建物>に

は二つの空間があり、一般的にそれぞれ聖所、至聖所と呼ばれています。聖所は外側の空間で、二つの部屋のうち大きいほうで、供えのパンの机、香の祭壇、金の燭台があり、楽園での神と聖徒との交わりを代表するものでした。人間創造の前から、エデン、地上の楽園、現在の第三の天、永遠の新エルサレムまで、「楽園<パラダイス>」の場所は様々でしたが、その最も基本的な側面は常に同じで、被造物が神との制限のない交わりを楽しむ場所です。⁷ 現在、主の十字架、復活、昇天、天の至聖所への「<複数の>天を通過して」以来、「楽園<パラダイス>」は第三の天、天の神殿、父なる神の住まいを意味するようになったのです。キリストの昇天は天の「幕を裂き」、人と神を隔てる障壁をキリストの血によって裂き、御子を信じて従うすべての者に父への「アクセス」の道を開きました(エペソ2章18節, 3章12節参照)、彼は唯一の入り口であり、天国への唯一の道だからです(マタイ7章13-14節; ルカ13章24-25節; ヨハネ10章7-9節, 14章6節; 黙示録3章7-8節, 19章11節参照)。彼はまさに文字通りに天の聖所への我々の「導き手」(我々のアルケゴス<archegos: 君/導き手>: 使徒行伝3章15節, 5章31節; ヘブル2章10節, 12章2節)です。ですから、イエスの死、すなわち、イエスがその勝利の人生と犠牲をあらゆる点で完璧に完成された瞬間、御父は実際の神殿の幕を裂かせ、それを見るのを拒まないすべての人に、救いを象徴的に表されたのです。まさにその神殿において、イエスのわざのすべてがわかりやすく示されたのです: 十字架が完成され、人は今まさに神の前に出ることができるようになりました—ただし、主の犠牲の死に基づいてです(マタイ27章51節とヘブル10章19-20節を参照)。キリストの働きは(人間が最初の親の罪によって築いてしまった)敵意と疎外感の幕を取り除き、父との和解を可能にし、私たちがキリストの血によって神の前に立つことができるようにくださったのです(ローマ5章1-21節; 第二コリント5章17-21節; エペソ2章14-18節; コロサイ1章19-22節; 第一ペテロ3章18節を参照)。

私たちの主の犠牲(それはあらゆる点で御父に受け入れられるものでした)をあらかじめ見込んでおられた御父は、御自身に信仰を置く人々のために、すべての罪の代償となる手段として御子をお与えになるまで、罪に対する裁きを憐れみ深く遅らせておられたのです。(ローマ3章25-26節; 第二コリント5章19節; 使徒行伝14章16節, 17章30節を参照)。この救い—罪の赦しと永遠のいのちの提供—は、十字架後にイエスを信じたすべての人たちだけでなく、十字架以前に旧約聖書全体を通してなされた神の約束と、幕屋とそのすべての儀式にはっきりと描かれた、来たるべきお方を信じて、神に赦しと永遠のいのちを求めたすべての人たちにも及ぶのです。(例えば、詩篇22篇; イザヤ52~53章; ルカ24章25~27節)。父への道はイエスの犠牲と昇天

⁷ 参照:「悪魔の反乱」艱難期の背景: 第1部「サタンの反逆と墮落」、II.6項「七つのエデン」。

の時になるまで開かれなかったので、「時代の結合期」([ヘブル 9 章 26 節](#); [マルコ 1 章 15 節](#); [ローマ 5 章 6 節](#); [ガラテヤ 4 章 4 節](#); [エペソ 1 章 10 節](#); [第一テモテ 2 章 6 節](#)) の出来事の前に死んだ義人は、死後、地底にある暫定的な「楽園」に連れて行かれました。そこは確かに祝福の場所ですが、メシアの使命の成就を待っている場所、天の幕によって御父の前から切り離された場所です。これは、主が十字架上の死の後、復活する前に下ったいわゆる「地獄」と呼ばれたりもする所ですが、そこは苦役の場所ではなく(ハデスの一部はそのために確保されていましたが)、むしろ、アベルからイエスの復活まで主において死んだすべての人が、キリストの血によって天の中庭への道が開かれるのを待つ安息と休息の場所であったのです。イエスが十字架上で信じることになった盗人に「今日、あなたは私と一緒にパラダイスにいる」([ルカ 23 章 43 節](#), [ルカ 16 章 19-31 節](#)参照)と言われたのは、この中間パラダイスを指しています⁸。

主が死人の中から復活され、第三の天に昇られ、父の右の座に就かれたので、今は亡き信者が、イエスが私たちのために作られた「新しく開かれた生きた道」に沿って、父の御前に入ることを妨げるものは何ともありません([ヨハネ 14 章 2-3 節](#), [17 章 24 節](#); [ヘブル 1 章 3 節](#), [4 章 14 節](#), [6 章 19-20 節](#), [8 章 1-5 節](#), [9 章 11-12 節](#))。

(19) 兄弟たちよ。こういうわけで、わたしたちはイエスの血によって、はばかりことなく[天の<至>]聖所にはいることができ、(20)彼の肉体なる幕[の犠牲]([ヘブル10章10節](#),[ヘブル10章18節](#))をとおり、わたしたちのために開いて下さった新しい⁹生きた道をとおって、[祈るための恵の御座に([ヘブル4章16節](#)参照)]はいつて行くことができるのであり、(21)さらに、神の家を治める大いなる祭司があるのだから、(22)心はすすがれて[どんな]良心のとがめを去り、からだは清い[御言葉の([エペソ5章26節](#))]水で洗われ、まごころをもって信仰の確信に満たされつつ、みまえに近づこうではないか。([ヘブル10章19-22節](#))

信者たちが一時的な住まい(地下のパラダイス、シェオール)から解放され、死後は、天国で神とともに暮らすというこの具体的な現実は、私たちの主によって約束されました([ヨハネ 14 章 1-6 節](#); [ヨハネ 12 章 26 節](#), [17 章 24 節](#)参照)。現在父と小羊の前にいる信者についての聖書の記述にはっきりと現れています([第二コリント 5 章 8 節](#), [12 章 1-6 節](#); [ピリピ 1 章 23 節](#); [ヘブル 12 章 22-23 節](#); [黙示録 6 章 9 節](#), [7 章 9-17 節](#))

⁸ 「悪魔の反乱」参照：艱難期の背景：第 1 部「サタンの反逆と墮落」II.5.b「幕屋の図解」参照。

⁹ 文字通りには、「新しく殺された」

を参照)。さらに、私たちの主が天を通り、父の御臨在の中へと、実際に、そして非常に象徴的に旅された時、「とりこ」([エペソ 4 章 8 節](#); [詩篇 68 篇](#)参照)を連れて行かれたことも多くの箇所でも明らかです。「アブラハムの懐」と呼ばれる地下の楽園から、それまで死んでいたすべての信仰者を解放しました([詩篇 146 篇 7 節](#)後半; [イザヤ 14 章 17 節](#)後半, [42 章 7 節](#), [49 章 9 節](#), [61 章 1 節](#); [ルカ 23 章 43 節](#); [ルカ 16 章 19-31 節](#)も参照)。そして、彼らをご自分の胸に抱いて、第三の天まで連れて行かれたのです([ヨハネ 14 章 2-3 節](#); 以下の聖句も参照:[詩篇 68 篇 24-27 節](#); [ヨハネ 17 章 24 節](#); [コロサイ 2 章 15 節](#); [第一ペテロ 3 章 18-22 節](#); [黙示録 1 章 18 節](#))。天の神の神殿(すなわち、「第三の天」、地上の幕屋の至聖所によって表される「対型」または真の場所)の幕がキリストの勝利によって裂けたので、天には、聖所(以前の地下の区画であるシェオルを表す、「アブラハムの懐」と至聖所との区別がなくなり、救われてこの世を去った人達は今や小羊と御父の御前に住んでいるのです。なぜなら、キリストは、主になって死んだ人達と、そして下のパラダイスでこの重大な出来事を待っていたすべての人々と一緒に、上の天にあるこの本物の「至聖所」に入られたからです。

ところが、キリストは、ほんとうのものの模型にすぎない、手で造った聖所にはいないで、上なる天にはいり、今やわたしたちのために神[御父]のみまえに出て下さったのである。([ヘブル 9 章 24 節](#))

現在、天の神殿では、(キリストによって隔ての幕が取り除かれたため)聖所と至聖所との間に区別が無いので、(昇天後の)黙示録の天の神殿の描写の中のこの真の聖所<天の至聖所>の中に、地上の幕屋神殿の聖所に留保されていたものが、配置されているのを見ても驚くべきではありません。ですから、ここでは「聖所」という小見出しの下に、香の祭壇、ランプ、供えのパンの机を取り上げますが、読者は、黙示録の次の記述では、これらの品々は天の神殿(すなわち、真の至聖所)の中にあることを心に留めておいてください。

地上の幕屋の聖なる場所には、三つのものが存在していました。1) 金の机、2) 金の燭台、3) 金の香壇です。これらの調度品はすべてイエス・キリストを象徴しており、金は神性(希少、貴重、栄光)を、机と祭壇の下のアカシア材は人間性(壊れやすいが完全)を象徴し、それぞれの調度品はイエスが犠牲として受肉した特定の側面を象徴しています。

a. 金の机: 供えのパン(すなわち、キリストの御姿において私たちと共におられる神: 「インマヌエル」([イザヤ 7 章 14 節](#); [マタイ 1 章 23 節](#)))を置く金の机。「命のパン」であるキリストというお方に与るすべての人に、命を与える性質を表します([ヨハネ 6 章 32-](#)

[58 節](#); [第一コリント 11 章 23-26 節](#))¹⁰。

b. 金の燭台: 聖霊を象徴する力づけの油 ([イザヤ 11 章 2 節](#); [黙示録 1 章 4 節](#); [ルカ 4 章 18 節](#)参照) で満たされた金の燭台は、「世の光」であるキリストとキリストの **メッセ** **ージ** を受け入れ、それを受け取るすべての人のために、命を与える性質を表しています ([ヨハネ 8 章 12 節](#), [ヨハネ 1 章 4-9 節](#), [3 章 19-21 節](#), [9 章 5 節](#), [12 章 46 節](#); [エペソ 5 章 8-15 節](#); [第一ヨハネ 1 章 5-7 節](#), [2 章 8-10 節](#))¹¹。

c. 金の香壇: 金の香壇は、甘い香りを出して聖なる場所に立ち昇るもので、あらゆる点で父に受け入れられ、復活と昇天によって御前に立ち昇るキリストの **業** の命を与える性質を表しています ([エペソ 5 章 2 節](#); [創世記 8 章 21 節](#); [ヘブル 1 章 3 節](#) 参照)。彼に従うすべての人にとっての「道」である、彼のうちにある天国への道を指し示します ([ヨハネ 14 章 2-3 節](#), [14 章 6 節](#); [詩篇 118 篇 19-27 節](#); [マタイ 7 章 13-14 節](#); [ルカ 13 章 24-25 節](#); [ヨハネ 10 章 7-9 節](#), [17 章 24 節](#) 参照)。

この三つのうち、祭壇と燭台は天の神の神殿にあるものとして、特に言及されています ([黙示録 4 章 5 節](#), [6 章 9 節](#))。しかし、机が実際にはないわけではありません。4 章では、「命のパン」であられる方ご自身が父の前におられます (関連した象徴として、神の子羊の象徴があり、これは神の体と血を受けることによる神との交わりを語っています。[ヨハネ 5 章 25-58 節](#); [第一コリント 5 章 7 節](#))。また、「キリストの体」としての教会を表し、机には完全な数の 12 のパンがあったことから、「祭壇の下」に現れた信者、つまり主の教会であり、主の体、主の花嫁の中に、「命のパン」であられる方の象徴を見ることができます (参照:[黙示録 6 章 9 節](#))。¹² 新しいエデンの園のように、第三の天、神の中庭、天の神殿は、主にあって死ぬことにより祝福された私たちが、入る特権を今与えられている場所なのです。その神の幕屋-楽園<パラダイス>で、私たちは神と主イエ

¹⁰ 十二のパンは、主がすべての人に十分な方であることを示しています。イスラエルの各部族に一個のパンが与えられ、イスラエルそのものが将来のキリストの体全体を表しているのです (『悪魔の反乱』第 5 部参照: 「裁き、回復、置き換え」、セクション II.8.b.i、「イスラエルの独自性」を参照)。

¹¹ みことばがあらゆる点で非物質的で神的であるように、キリストの御姿における福音の光を表す燭台には、地上の要素は含まれていません (すなわち、すべて金でアカシアの木は使われていません)。これと同じ理由で、燭台には祭壇と食卓が持っている黄金の「冠」(zer)がありません。

¹² 重要なのは、幕屋の机も祭壇の「下」、つまり垂れ幕から離れた場所に置かれていたことです。[黙示録 6 章 9 節](#)における「下」の意味は、ヨハネの視点からは、これらの信者が祭壇よりも彼に近くにあります。(出エジプト 40 章 22-28 節参照)。

ス・キリストとの「対面」の交わりを始め、その時点から永遠にそれを楽しむことになるのです。また、この三つの品物は、来たる樂園で私たちに与えられる神の永遠の備えを語っています。1) パンの机は肉体の糧と命、永遠の命を、2) 光の燭台は霊的な光と真理、神の真理を、3) 甘い香りの香の祭壇は肉体と霊の喜び、永遠の喜びを表しています。イエスが天の聖所の垂れ幕を裂かれたので、この地上を去った私たちの「聖所」は、まさに神ご自身の臨在の中にあるのです。

3. 至聖所 (出エジプト記 25 章-40 章参照): 幕屋神殿の至聖所は、聖所を隔てる幕がメシアであるイエス・キリストによって取り除かれるまで、死後の救われた人間でさえも立ち入ることのできない天上の神の神殿を表していました (マタイ 27 章 51 節; マルコ 15 章 38 節参照)。地上の幕屋-神殿の至聖所は、贖罪の日が大祭司だけが入る場所であり、(ヘブル 9 章 7 節; レビ 16 章 1-34 節も参照)、その形状は完全な立方体でした (出エジプト 26 章 16 節, 36 章 21 節参照)。これはソロモンの神殿でもそうでしたし (列王記上 6 章 20 節)、千年王国時代の神殿でもそうでしょう (エゼキエル 41 章 4 節)。

¹³ 重要なことは、新しいエルサレムも完全な立方体になる (黙示録 21 章 16 節) ことで、事実上、最後の「神殿」になることから理解できる特徴を持っています。この最後の樂園で、神は地上に戻って、救われた人類と永遠に「天幕」を張り、新地にご自分の「幕屋」である新しいエルサレムを建設するからです (黙示録 21 章 3-4 節; 黙示録 21 章 1 節も参照)。「全能者にして主なる神と小羊とがその神殿である」ので、新しいエルサレムには「神殿がない」のです (黙示録 21 章 22 節)。新しいエルサレム全体が、その祝福された未来の時に、最終的で究極的な聖所、完全な立方体の空間 (縦、横、広さにおいて三位一体の完全性を表す: エペソ 3 章 18 節参照) として機能し、そこに救われたすべての人類が収容されて、永遠に神の臨在に住まうのです (黙示録 21 章 3-4 節)。

a. 慈悲の座: 金の「慈悲の座 < 新改訳 IV: 宥めの蓋 / 新改訳 III: 贖いの蓋 / 新共同訳: 贖いの座 / 口語訳: 贖罪所 >」または贖罪の蓋とも呼ばれ、神の御座 (天の御座につ

¹³ 同じことが、後にヘロデによって「再建」されたゼルバベルの第二神殿 (エズラ 6 章 3 節参照) にも言えます。この神殿については、再建される前のキュロスの手紙 (上記引用箇所) の記述しか残っていませんが、この手紙の重要なフレーズは「(第一神殿の) 土台を修理しなさい」です (NASB、ケーラー・バウムガルトナーのレキシコン、C.F.ケイルの注解、omn. in loc.)。これによって、元の幅と高さが保たれたこととなります (高さも保たれ、同じ立方体の形になったと考えるべきです)。ソロモンの神殿が全体として「高さ 30 キュビト」であったのに、聖所の高さは 20 キュビトしかなかったように、幕屋の聖所の立方体の形が維持されたのは、意図的であったとしか解釈できません。ヨセフスの言葉を信じるなら、ヘロデの改造は、内陣の「屋根を 30 キュビトまで高くする」という結果をもたらし、立方体を汚しました (真理と真の象徴を無意味な、さらには汚辱的な装飾に置き換えるというのは、神を信じない「礼拝」の典型的なやり方です)。

いては下記参照)を象徴しています。(神の神性にふさわしく)完全に金で作られた慈悲の座は、二つの金のケルビム(天の御座が実際のケルビムによって守られているのと同じ)に挟まれていました。主がモーセに「そこでわたしはあなたと会う」([出エジプト記 25章22節](#))と言われたのは、この二つの金のケルブの間でした。このように、神の天の御座の慈悲の座が与えるイメージは、象徴的なものを超えて、幕屋と神殿の中で、神の栄光、御臨在、あるいはシェキナの栄光<神がおられるゆえに実際に光を発する輝き>が実際に宿る場であったと言えるでしょう。この慈悲の座上、金のケルビムの間に、シェキナ(*Shechinah*)の栄光は、天の至聖所における御父の主権による集会を象徴する御子のクリストファニー<キリストの降臨/顕現>であり、実際に世の光として輝いていたのです。「御子(イエス)は神(父)の栄光の輝きであり、神(父)の本質の真の姿」([ヘブル1章3節前半](#))です。参照:[ヨハネ8章12節](#); [黙示録21章1節](#)。¹⁴ 大祭司が年に一度だけ贖罪の日に犠牲の血を振りかけたのも、この慈悲の座や贖いの蓋の上でした([ヘブル9章7節](#); [レビ記16章34節](#)参照)。私たちの罪のためのイエス・キリストの「ただ一度」([ローマ6章10節](#); [ヘブル7章27節](#), [9章12節](#), [9章26節](#), [9章28節](#), [10章10節](#); [第一ペテロ3章18節](#))の犠牲を明らかに象徴しており、御父は御子の「流した血」を完全に受け入れながら見下ろしておられるのです([ヘブル1章3節後半](#), [9章12節](#), [10章12節](#))¹⁵

b. 神の箱 :「契約の箱」は、私たちの主イエス・キリストの幕屋の中で最も重要なシンボルです。幕屋全体とその儀式や犠牲が私たちの主とその救いの業を語っている一方で(香の祭壇、供えのパンの机、金の燭台は、上に見たように、特に主の明確な型を表しています)、神の箱には、復活したキリスト、父のもとに昇天し、父と親しく座っている(十字架の犠牲は既成の事実としての)キリストが描かれているのです。この合体は、箱と慈悲の座(蓋)が密接に関連し、後者が御父の御座を表し、前者がその御座と一つに繋がっている御子を表していることから明らかです(文字通りと比喩:[詩編 2 篇](#))

¹⁴ このイメージの中で、モーセと地上のキリストとの関係は、イエスと天上の父との関係に類似しています:[出エジプト 25 章 22 節](#)参照:「そこで、わたし(父を表すイエス)は、あなたに会うであろう(モーセはキリストの型);[出エジプト 18 章 18 節](#); [ヘブル 3 章 1-6 節](#)参照)。

¹⁵ もちろん、イエスはご自分の命を捧げられたのであって、文字通り血を捧げられたものではありません。ヘブル書では、このような誤解を招くような印象を与えないように細心の注意が払われています([ヘブル 8 章 3 節](#)参照:「捧げるもの」)。「キリストの血」は、「神の子羊」がイエスの犠牲を象徴する称号であるように、イエスの犠牲を象徴するものだからです。例えて言うなら、犠牲の動物はイエスの型であり、動物の血はイエスの十字架上の死の型なのです。私たちは、イエスを文字通りの「子羊」とは考えないのと同じように、この図におけるイエスの「血」を文字通りのものと考えてはなりません。(つまり、動物はキリストを表し、動物の血は私たちのためのキリストの霊的な死を表します。[ヨハネ 1 章 29 節](#); [第一コリント 11 章 23-26 節](#))。このような異端を避けることが、ヨハネがイエスは血を流して死なれたのではなく、血がまだイエスの体の中にある間に「霊をゆだねられた」ことを示すのに非常に苦労した理由の一つです([ヨハネ 19 章 33-35 節](#); [マタイ 27 章 50 節](#); [マルコ 15 章 37 節](#); [ルカ 23 章 46 節](#); [ヨハネ 19 章 30 節](#); [第一ヨハネ 5 章 6-8 節](#) 参照)。ペテロの手紙シリーズ#9 章「信仰による救いとキリストの血」も参照。

[6-12 節](#), [110 篇 1-6 節](#); 千年王国では主の御座が神の箱に取って代わります)。さらに、箱と慈悲の座<贖いの蓋>は常に一緒に現れ、しばしば「<神の>箱」と総称されます(例えば、[サムエル記上 3 章 3 節-7 章 2 節](#))。このように、箱と慈悲の座は、それらが象徴するイエスと父が「一つ」([ヨハネ 10 章 30 節](#))であるように、非常に現実的な意味で「一つ」なのです。最終的に、箱と慈悲の座<贖いの蓋>が示す特別なイメージは、復活したキリストと父、メシア、人間、神との一体性です。人間であり神であるメシアが(すなわち、箱は金で覆われたアカシアの木で作られており、初臨とは対照的にメシアの神性が完全に見えるようになっていきます)、現在勝利して父の右に勝利して座しておられることが描き出されています([詩篇 110 篇 1 節](#); [ローマ 8 章 34 節](#); [エペソ 1 章 20-22 節](#); [ピリピ 2 章 9 節](#); [ヘブル 1 章 3 節](#), [12 章 2 節](#); [第一ペテロ 3 章 22 節](#))。

[ヘブル 9 章 1-5 節](#)にあるように、神の箱にはもともと、1) マナのつぼ([出エジプト 16 章 33-34 節](#))、2) 芽を出したアロンの杖([民数記 17 章 10 節](#))、3) 律法の石板([申命記 31 章 24-26 節](#); [列王記上 8 章 21 節](#))などが入っていました。これらの項目はそれぞれ、(アダムを初めとし、その後、人類全般の典型としてイスラエルの行動で示されるように) 神の備えとその備えを拒否する人間のことを語っているのです。神は人間のために完全な肉体的糧(アダムにはエデンの木、イスラエル人にはマナ)を提供しましたが、人間はこの恵み深い提供を拒否しました(アダムは善悪を知る木の実を食べ、イスラエル人は「不平」[マナのつぼ]を口にしました: [創世記 3 章 6 節](#); [出エジプト記 16 章 11-12 節](#); [詩編 78 篇 17-22 節](#)参照)。神はこの世での保護を人に提供しました(アダムには園、イスラエル人にはモーセとアロンの指導を)。しかし、人間はこの恵みを拒否しました(アダムは神の警告に耳を貸さず、イスラエル人はモーセとアロンの指導権に対して挑戦しました[芽生えた杖]。 [創世記 2 章 17 節](#); [民数記 16 章 41 節](#))。神は人間に完全な霊的供給をされましたが(アダムには命の木、イスラエル人には律法)、人間はこの恵み深い供給を拒否しました(アダムは神の言葉による警告に、イスラエル人は神の書いた律法[石板]に違反しました。 [創世記 3 章 11 節](#); [出エジプト記 32 章](#))。人間の神への拒絶の三つの本質的な分野(肉体的、時間的(選択の自由)、霊的)のそれぞれの象徴<[マナのつぼ] [芽生えた杖] [石板]>が<神の>箱に直接含まれることは、イエスが「私たちの罪をその身に負って」いることを非常に意味深く表しています([第一ペテロ 2 章 24 節](#); [マタイ 26 章 26 節](#); [ローマ 7 章 4 節](#); [第一コリント 11 章 24 節](#); [ヘブル 10 章 10 節](#)を参照)。

このため、箱が「契約の箱」と表現されるのは驚くべきことではありません。なぜなら、イエス・キリストの死は、神の先見の明のある契約を成就し(死がなければ、そのような契約/遺言は有効ではないからです: [ヘブル 9 章 15-18 節](#))、同時に、救い主である小羊の尊い血を振りかけることによって赦しの新しい契約を開始させたのです([マタイ](#)

[26章28節](#); [第一コリント11章25節](#); 参照:[イザヤ42章6節](#))。キリストが最初の契約の呪いを負われたのは([ガラテヤ3章13節](#))、罪の障壁を廃し、私たちに代わって犠牲となられたキリストの体を通して、私たちが神と和解させるためです([コロサイ1章22節](#))。そして、この象徴は契約の箱の中身に反映され、それを覆う慈悲の座にこぼれた血は、罪のための主の犠牲を図式的かつ効果的に表しています。人間が拒絶し、反抗したにもかかわらず、神は救いを与え、この証の箱が効果的に示す神の比類なき、計り知れない恵みの証となったのです([出エジプト記25章16節](#), [40章20-21節](#)参照)。さらに、イエスはその犠牲を通して、人間が最初に拒絶したにもかかわらず、これらすべてを新たに供給されました。なぜなら、イエスは命のパン(マナと同じ)であり、私たちは二度と飢えることがなく([ヨハネ6章25-58節](#); [黙示録2章17節](#))、イエスは枝(芽吹く杖と同じ)であり、私たちが永遠に住むことができるその完全な王国は終わることがなく、([イザヤ4章2-6節](#); [黙示録3章21節](#))、そして律法と神の言葉の成就者(参照:神の言葉が刻まれた律法の板)であり、私たちが永遠に甘い交わりを楽しむことができるようにされたからです([ローマ10章4節](#); [黙示録3章12節](#))。イエスはこれらの罪と全人類の罪のために御自身を犠牲にされましたが、それは全人類がイエスへの信仰によってこの永遠の命で祝福されるためです。これはすべての約束の中で最も祝福されたものであり、神の箱の象徴によって明確に教えられているものです。

この神の箱の象徴は、天の神殿に神の箱と対になるものが存在しない理由を説明するのに役立ちます。慈悲の座と対になるものは父の御座に存在し、父ご自身の栄光の存在が幕屋のシェキナの輝きに対応しています。しかし、神の箱は御子を表し、御子もすでに御父の右手「御座の中央」に座っておられます(まさに私たちが神の箱があると期待する場所は、「慈悲の座」、すなわち御座とつながっているのです。[黙示録5章6節](#))。ですから、シェキナの栄光の真の対型が、ただ御父ご自身の中にのみ見出されるように、御子の最も重要な象徴である契約の箱の真の対型は御子ご自身の中にのみ見出されるのです(その象徴を見逃さないために:[エレミヤ3章16-17節](#)を参照)。なぜなら、主はその犠牲によって、「巻物を開く」権利を獲得し、主の王国の設立につながる最後の出来事を引き起こされるからです([黙示録5章9-10節](#)参照)¹⁶。

地上の幕屋とその品々についての考察を終えたところで、ヨハネの黙示録4章の釈義に戻り、上記の考察を念頭に置きながら、天上の神殿についての考察に移りたいと思います。

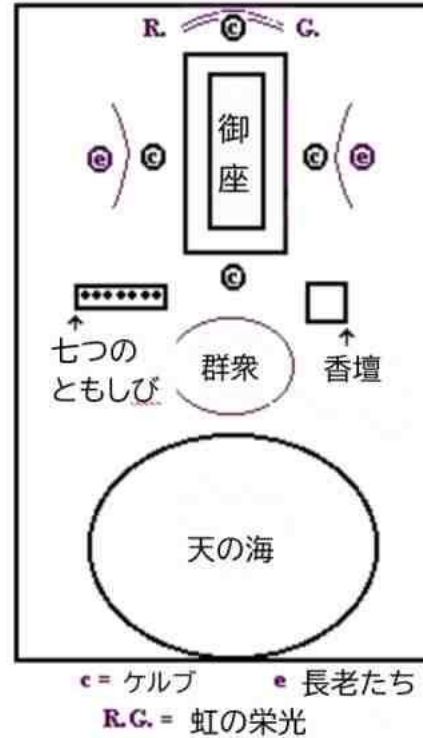
¹⁶ 箱そのものは、後に黙示録11章19節で天の神殿に現れますが、真の神殿と神礼拝の象徴として、また、獣が地上の神殿(箱の正当な場所)に座す、反-神宗教に対して下される裁きとして現れます。

幕屋と神殿



地上の幕屋

(尺度なし)



天の神殿

御座：

見よ、御座が[第三の]天に設けられてあり、その御座[の上]にいますかたがあつた[座っておられた]。(黙示録 4 章 2 節後半)

神が宇宙の王である以上、聖書の中で神の王権の象徴としての御座がしばしば言及されたり、暗示されたりすることは驚くことではありません(列王記上 22 章 19 節; 詩篇 2 篇 4 節, 9 篇 7 節, 29 篇 10 節, 47 篇 8 節, 113 篇 5 節, 123 篇 1 節; イザヤ 6 章 1 節; 66 章 1 節; マタイ 23 章 22 節)。さらに、御座は父の究極的な権威を強調する象徴として、黙示録に特に多く見られます(黙示録 5 章 1 節, 5 章 7 節, 5 章 13 節, 6 章 16 節, 7 章 10 節, 7 章 15 節, 19 章 4 節, 21 章 5 節)。今見てきたように、神の天の御座はユダヤの幕屋と神殿では、契約の箱の上の「慈悲の座」とそれに付随する金のケルビムで表現され、神がそのしもべと「会う」場所、神のシェキナの栄光が宿る場所で

す([出エジプト 25 章 10-22 節](#); [レビ 16 章 2 節](#); [民数記 7 章 89 節](#); [へブル 9 章 1-3 節](#), [4-5 節](#))。契約の箱の上に置かれた地上の「金の御座」は、ヨハネがここで見たように、ケルブを従えた本物の神の御座を表しています([サムエル記上 4 章 4 節](#); [詩編 80 篇 1 節](#), [99 篇 1 節](#); [ダニエル 7 章 9-10 節](#); [黙示録 4 章 6-9 節](#) 参照)¹⁷

御父の天の御座のいくつかの重要な特徴を(そのほとんどは黙示録の学びで明らかになります)、御座が最初に言及されたこの時点では、読者に必ずしも明らかではありませんので)ここで指摘する必要があります。

1. 御座は人間の枠を超えた凄みを持ち、印象的である: 神の御座は高くそびえ立ち([イザヤ 6 章 1 節](#))、サファイアのように見え([エゼキエル 1 章 26 節](#), [10 章 1 節](#); [出エジプト 24 章 10 節](#)も参照)、炎のようなケルビムの王室護衛が付き([エゼキエル 1 章 4-28 節](#); [イザヤ 6 章 1-4 節](#); [エゼキエル 8 章 2 節](#)参照)、裁きの火を放ち([ダニエル 7 章 9-10 節](#))、雷と稲妻を放ち([黙示録 4 章 5 節](#))、声を上げます([黙示録 4 章 5 節](#), [16 章 1 節](#), [16 章 17 節](#))。ですから、神の御座は、そこにおられる偉大な全能の神にふさわしく、凄まじく恐ろしいものです([イザヤ 63 章 15 節](#))。

2. 御座は戦車の形をしている: [歴代誌上 28 章 18 節](#)には、契約の箱(金のケルビムはその一部)を覆う金の「慈悲の座」が「戦車」と描写されていますが、これは聖書中の天の御座の描写と一致しています。例えば、[ダニエル 7 章 9 節](#)では、火のような御座には「車輪」があり、エゼキエル書での御座の描写はそれ以外に解釈できません(特に[エゼキエル 1 章 4-28 節](#), [10 章 9-22 節](#); [詩篇 132 篇 7 節](#) 参照)。エゼキエルの描写では、御座は明らかに神が地上を訪れるための、特に神の裁きを下すための移動式の戦機です([ハバクク 3 章 3-15 節](#)参照)。

3. この御座は今、主イエス・キリストによって占有されている: 古代の戦車は通常二人の戦闘員を乗せており([列王記上 22 章 34 節](#)参照)、すぐには明らかになりませんが、5 章では神の全ての敵が低くされる時([黙示録 3 章 21 節](#))を待って、私たちの主イエス・キリストが、昇天以来勝利して父と共に座っているこの御座を、実際に共有していることを明らかにされます。21 節:「勝利を得る者には、わたしと共にわたしの座につかせよう。それはちょうど、わたしが勝利を得てわたしの父と共にその御座についたのと同様である。」; [詩篇 110 篇 1 節](#); [ローマ 8 章 34 節](#); [エペソ 1 章 20-22 節](#); [ピリピ 2 章 9 節](#); [へ](#)

¹⁷ 『悪魔の反乱』の II.5.b 節の「幕屋の図解」を参照: 艱難の背景: 第 1 部「サタンの反乱と墮落」。ケルビムについてのより詳細な議論は、『悪魔の反乱』シリーズの第 1 部(III.1 節)、第 4 部(III.3.b.1 節)、第 5 部(II.4 節)にもあります。

[ブル1章3節](#), [12章2節](#); [第一ペテロ3章22節](#) 参照)。キリストの王としての就任後、御父と御子の密接な関係は、まもなく小羊が「御座の真ん中に立つ」([黙示録5章6節](#))ことになるときに明らかになります¹⁸。

4. ケルブは御座に寄り添い、御座はケルブと親密な関係にある：天使の最高位であるケルビムは、神の「儀仗兵、監視者、護衛者」です（「悪魔の反乱」シリーズで詳しく説明されている）。¹⁹ そのため、ケルビムが神の天の御座と密接に関連しているのは理解できます。実際、御座に非常に近く、後に御座と一体化していると表現されるほどです。小羊が「御座の真ん中に」([黙示録 5 章 6 節](#))いるように、四つのケルビムは「御座の中央に」([黙示録 4 章 6 節](#))と同じように描写されているからです。確かに、先ほど引用した聖句では、「四つの生き物」(すなわちケルビム：前脚注参照)は「御座の周り」にいと同時に「御座の真ん中」にいと描写されていますが、これは御座の周りに均等に配置された護衛者としての位置をうまく表現しています(その翼は車輪と密接に結びついており、この位置から「戦車の御座」に移動力を提供しています：[エゼキエル 1 章 4-26 節](#); [10 章 6-17 節](#); 参照：[イザヤ 6 章 1-6 節](#), [黙示録 4 章 6 節](#), [4 章 8 節](#), [4 章 9 節](#), [5 章 6 節](#), [5 章 8 節](#), [5 章 11 節](#), [5 章 14 節](#), [6 章 1 節](#), [6 章 6 節](#), [7 章 11 節](#), [14 章 3 節](#), [15 章 7 節](#), [19 章 4 節](#); また前の脚注にあった以前の研究を参照< 前回のひとしづくの脚注のこと >)

主は王となられた。もろもろの民はおののけ。主はケルビムの上に座せられる。地は震えよ。(詩篇99篇1節)([詩篇80篇1節](#); [イザヤ37章16節](#)参照)

¹⁸ メシアが御父の御座を物理的に共有するというこの密接な関係は、ソロモンの特別な王座の構造にも表れていた可能性があります。[歴代誌下 9 章 17-19 節](#)には、この王座には(階段と一緒に)金の「足台」またはチェベシュ *chebhash* が取り付けられていたとありますが、この言葉の意味は明確ではありません。そして、チェベシュは足台ではなく、玉座の中にある第二の座を表している可能性があります。この可能性は、1)チェベシュはヘブル語では「足台」を意味する通常の単語ではないこと、2)チェベシュという単語はヘブル語ではこの節にしか出てこないため、この文脈がその意味を知る唯一の明確な手がかりとなること、3)少なくとも一つの写本や版では、チェベシュ *chebhash* の代わりにチェベス *chebhes* と読まれていることを考慮すると、より強くなります。この別の読み方は、御座に「小羊」(スペルの変更でできた単語)と呼ばれる副座が含まれていたことを意味するかもしれません。この名称は、間違いなくその座の形から来ているのでしよう(王座の背もたれが「エゲル」、つまり「子牛」であることを考えると、子牛の頭の丸い形からきています：[列王記上 10 章 19 節](#))。「小羊」が間もなく天の御座の真ん中に現れることを考えると([黙示録 5 章 6 節](#))、[歴代誌下 9 章 17-19 節](#)のこの読みは少なくとも考慮に値します。

¹⁹ 特に第 1 部「サタンへの反逆と墮落」の第 III.1 節「サタンの本来の地位」、第 4 部「サタンの世界システム、過去・現在・未来」の第 III.3.b.1 節「位階の称号：ケルブ」を参照；第 4 部「サタンの世界システム、過去、現在、未来」、第 III.3.b.1 節「位階の称号」；そして、第 5 部「審判、回復、置き換え」の II.4 節「人類史の四つの時代(ケルビムで表される)」である。

(6)私は苦しみの中で【主】を呼び求めわが神に叫び求めた。主はその宮で私の声を聞かれ御前への叫びは御耳に届いた。(7)地は揺るぎ動いた。山々の基も震え揺れた。主がお怒りになったからだ。(8)煙は鼻から立ち上りその口から出る火は貪り食い炭火は主から燃え上がった。(9)主は天を押し曲げて降りて来られた。黒雲をその足の下にして。(10)主はケルビムに乗って飛び風の翼で天翔(あまがけ)られた。(11)主は闇を隠れ家とし水の暗闇(くらやみ)濃い雲をご自分の周りで仮庵とされた。(12)御前の輝きから密雲を突き抜けて来たもの。それは雹と燃える炭。(13)【主】は天に雷鳴を響かせいと高さ方は御声を発せられた。雹そして燃える炭。(14)主はご自分の矢を放って彼らを散らしすさまじい稲妻を放ってかき乱された。(詩篇18篇6-14節 新改訳IV)

これは非常に詩的な一節ですが、この詩的表現の根底にあるものが、今までの話から汲み取れると思います。神は霊であり、理解できる言葉で表現しようとしても、宇宙の境界を無限に超えています。しかし、(黙示録 4 章にあるように)神は目に見える形で御自身を現されることがあり、その時の描写された内容はダビデがこの詩篇で描いた絵像と完全に一致しています。神の戦車を動かす役割を果たすケルブは実在しています。(エゼキエル 1 章 4-28 節, 10 章 9-22 節)。また、ケルブには翼があり(イザヤ 6 章 1-6 節; 黙示録 4 章 8 節)、風と密接に関連した描写があります(詩篇 104 篇 4 節; ヘブル 1 章 14 節; ゼカリヤ 5 章 9 節; 黙示録 7 章 1 節 参照)。

5. 御座は天(heavens 複数形)の上に置かれている: 詩篇 18 篇のケルビムについて言えることは、天についても言えることです。つまり、詩的に表現されたからといって、神学的に不正確なものにはなりません(詩篇 68 篇 4 節, 77 篇 16-18 節, 104 篇 1-4 節; ハバクク 3 章 3-15 節を参照)。ダビデの言葉は比喩的というより、文字通りに近い表現で、神の宇宙操作の描写をしています。天を「圧縮」して(「主は天を押し曲げて降りて来られた」)、天の海の分離した水だけが神の視界から遮り続ける(「主は…水の暗闇濃い雲をご自分の周り<の住まいとされた>」)ことによって神が地を訪問したことを明確に描写しているからです。同じことは、聖書で詳しく説明されている二つの神の地上への訪問(シナイでのユダヤ人の長老たちへの出現とケバル川でのエゼキエルへの出現: 出エジプト 24 章 10 節; エゼキエル 1 章 22-28 節, 10 章 1 節)からも見ることができます。天の「上」の水は、出エジプト記では神の足の下「敷石」として、エゼキエル書ではケルビムの頭の上「おおぞら」として描写されています。さて、おおぞらは上の水と地上の海の水とを分けるのですが、「上の水」は、厳密には天のおおぞらとは別のものです。(創世記 1 章 6-7 節)。しかし、この二つの説明は、空と宇宙のおお

ぞらの「最上層」に相当するものとしてまったく適切な表現です。したがって、これらの記述のいずれにおいても、通常は遠く離れている上層の海が、二層の天<空と宇宙>の隔壁が大きく圧縮され、あるいは「押し曲げられた」後に、見えるようになりました。しかし、これらの描写のいずれにおいても、<二つの>天を完全に「貫通」して実際に世界と地上に**来られた**わけではなく—そうしたら、罪深く墮落した世界は即座に完全に破壊されてしまいます—神は水の壁によって地と世界から厳密には**分離された**ままでした。神は神であられると同時に人間となられることによってのみ、つまり、人と神の仲介者であられるイエス・キリストを通して私たちを滅ぼさず救うためにこの世に来られたのです。(ヨハネ 1 章 1-18 節; [第一テモテ 2 章 5 節](#))²⁰。このように、上記の三つの事例では、神の戦車の御座が天の海の上から(すなわち第三の天から)天を押し下げているという本質的に同じ描写があり、三つの事例すべてが、神の御座がおおぞらとその上の天の海の組み合わせの上に「停泊」しておられるという天上の現実を率直に描写していると結論づけることができます。

第二に、第三の天は、その名前からもわかるように、私達がしばしば総称して「天(-heavens 複数)」と呼ぶ大気圏と宇宙の「二つの天」の上に位置するものです²¹。神の御座(その御座は父なる神ご自身によって占められる)が天の神殿(第三の天はそれ自体本質的に同義語です)の中心的機能である以上、神の御座が、(二つの)天をまたがって座っていて、下の地からそれらの天とその上層の天の海によって隔てられているという同じ絵像が黙示録においても描写されていることは驚くべきことではありません。おおぞらとその上にある神の御座とは、非常に密接な関係があり、それ自体が「神の御座」の一部であると言えるのです。

主はこう言われる、「天はわが位<新改訳IV:王座; KJV:throne 御座>、地はわが足台である。あなたがたはわたしのためにどんな家を建てようとするのか。またどんな所がわが休み所となるのか」。(イザヤ66章1節)

²⁰ 聖なる神と墮落した地上との間の不相応なこの「問題」を、悪魔は気づいていたようで、自分たちの神への反乱に対処するために神がすべての被造物を破壊してしまうことはないだろうと、悪魔は仲間を納得させました。しかし、サタンは「問題」を予期していたとはいえ、イエス・キリストという神の祝福された比類のない解決策には完全に驚かされることになりました。「サタンのクーデター」、『サタンの反乱』第1部 III.3.1 節参照: 艱難時代の背景」の第1部「サタンの反乱と墮落」の III.3.1 節「サタンのクーデター」を参照。

²¹ 「二つの天」は、旧約聖書のほとんどの版で「天」と訳されている一般的な単語のヘブル語の複数形の二つを意味する文字通りの言葉です。『サタンの反乱』の第1部 II.3 項の「三つの天」を参照: サタンの反逆と墮落」を参照。

(34)しかし、わたしはあなたがたに言う。いっさい誓ってはならない。天をさして誓うな。そこは神の御座であるから。(35)また地をさして誓うな。そこは神の足台であるから。またエルサレムをさして誓うな。それは『大王の都』であるから。(マタイ5章34,35節)

最後になりますが、神の戦車の御座と天空との密接な関係については、エゼキエル書([エゼキエル 1 章 26 節](#); [10 章 1 節](#))に「サファイアの石のよう」と記述されていることでもわかるでしょう。これは[出エジプト記 24 章 10 節](#)にある天の「敷石」の性質そのものであり、サファイアの半透明の青は、天の輝きと天の水の海(御座はこれと密接に関連している)を完全に表しているのです。

このように天空と神の御座の関連から考えると、詩篇 18 篇の引用で述べたように、神の地上への訪問と気象現象が聖書に一貫して描かれていることが、より一層理解できます。神の御座の戦車は「天を翔(かけ)る」ものであり、その上空には水もあるのですから、雷、稲妻、嵐、雲、ひょうなどが、全能者の地上を支配する大きな力を象徴していても不思議ではありません(例えば、次のようなものです)。[出エジプト記 19 章 16-18 節](#); [レビ記 16 章 2 節](#); [申命記 33 章 26 節](#); [詩編 50 篇 3 節](#), [68 篇 4 節](#), [68 篇 33 節](#), [104 篇 1-4 節](#); [イザヤ 19 章 1 節](#); [ナホム 1 章 3 節](#))。なぜなら、神は第三の天から、この空と水の「ベール」を通してご自身を現されるからです([使徒行伝 9 章 3 節](#), [26 章 13 節](#); [ローマ 1 章 18 節](#); [ヘブル 12 章 26 節](#); [第二ペテロ 1 章 18 節](#))。目に見える御姿を人類の目から隠し、御子という人格を持つ神への賛否の選択が、圧倒的で驚かされる神の御臨在に過度に影響されない、自分の本心からのものであるようにされるのです([出エジプト 33 章 20 節](#); [ヨハネ 1 章 18 節](#), [6 章 46 節](#); [第一テモテ 6 章 16 節](#); [第一ヨハネ 4 章 12 節](#))。

6. 御座は神の裁きの炎をほとばしらせる: 上記のような天の力の表現は、黙示録で特に顕著ですが、これは偶然ではありません。聖書では、雷、稲妻、黒い嵐雲、つむじ風などは神の裁きを示すものであり(上記の詩篇 18 篇のように)、黙示録は、おもに歴史上、地球とその住民に下される最大かつ最も厳しい神の裁きの時である艱難期に関するものだからです([ダニエル 12 章 1 節](#); [マタイ 24 章 21 節](#); [マルコ 13 章 19 節](#); [黙示録 16 章 18 節](#); 本シリーズ第 1 部を参照のこと)。火は神の裁きの第一の象徴なので(ソドムとゴモラに降った火と硫黄、地獄の火、火の池、十字架上のキリストの死を表す犠牲が焼かれた祭壇の火など)、神の裁きの火の源が、父の天上の御座であっても全くおかしくありません([ダニエル 7 章 9-10 節](#); [詩篇 97 篇 2-3 節](#); [マタイ 3 章 11 節](#)を参照)。実際、神の御座の戦車から出る火の流れは「火の池」の起源であり、神に反逆することを選んだすべての人に対する、最終的な裁きの神の道具です([ダニエル 7 章 11](#)

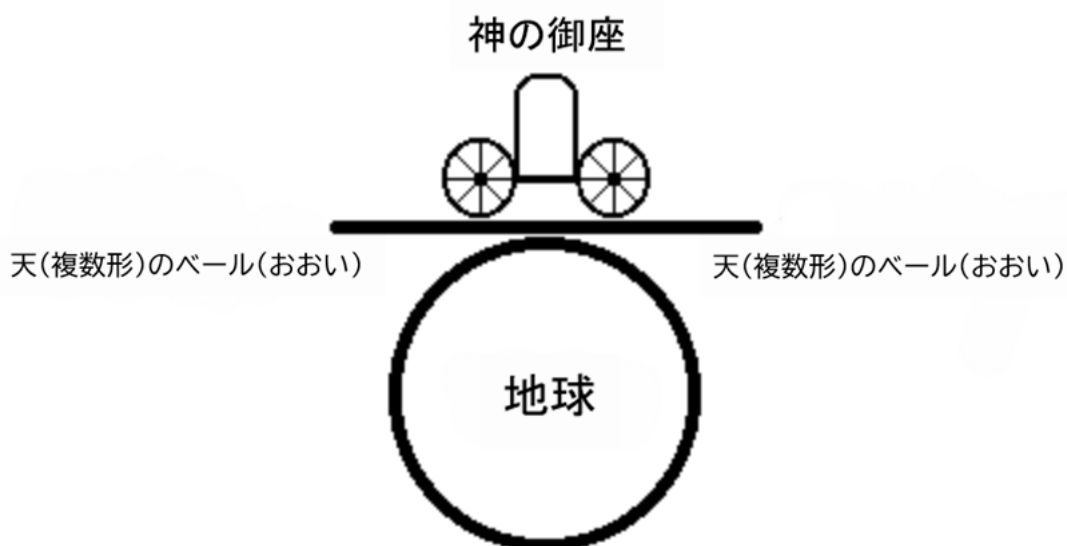
[節とマタイ 25 章 41 節](#)と[黙示録 20 章 11-15 節](#)を参照)。これは明らかに元々の、また必要とされていた御父の御座の戦車の性質ではなかったことでしょう。聖書には、被造物が罪と反逆を犯したために、神の光の強さと炎のような輝きが問題となったことが示されています([エゼキエル 28 章 16 節](#)の「火の石」が、悪魔の反逆の結果として、「あなた(サタン)から出る火」([エゼキエル 28 章 18 節](#))となったことを参照)。神は「焼き尽くす火」であり([申命記 4 章 24 節](#); [イザヤ 33 章 14 節](#); [へブル 12 章 29 節](#))、今は「近づきがたい」光の中に住んでいます([第一テモテ 6 章 16 節](#); [詩篇 104 篇 2 節](#); [第一ヨハネ 1 章 5-7 節](#) 参照)、一度この現世は火で焼き尽くされ([第二ペテロ 3 章 10-13 節](#); [黙示録 21 章 1 節](#))、私たちのこの死すべき体が不死のものとなり([第一コリント 15 章 53-54 節](#))、父なる神と永遠に私たちの光となる小羊の輝かしい御臨在を楽しむようになるのです([黙示録 22 章 4 節](#); [ヨハネ 1 章 4-9 節](#), [3 章 19-21 節](#); [第一ヨハネ 1 章 5-7 節](#); [黙示録 1 章 15-16 節](#) 参照)。

7. 御座は、ただ一時的に第三の天に位置している： 神様の御座が現在の位置にあるのも、被造物の反逆の結果です。イザヤ書 14 章とエゼキエル書 28 章から、神の御座、神の住まいはもともと地上にあったことが分かります²²。被造物の反逆、特にサタンの反乱は、神と被造物の間に溝を作り、被造物を直ちに焼却するか、神の条件、すなわち御子の犠牲に基づいて再創造するまでの間に、神のおられる所と世界の間を(憐みによって)分離しなければなりませんでした([第二コリント 5 章 17-19 節](#); [コロサイ 1 章 20 節](#); [黙示録 21 章 5 節](#) 参照)。神のすべての敵が神の足下に置かれた時、死と腐敗した世界も根絶され([第一コリント 15 章 24-26 節](#))、その将来、歴史の終わりに、新しいエルサレムが地上にやって来るのです。このことについては、[黙示録 4 章 2 節](#)で使われている「[第三の]天に御座が置かれた」という非常に正確な言葉で説明しています。もし、この場所が通常の、自然な、そして永遠の御座の場所であれば、ここで「ある」という単純な動詞が使われるはずでした。しかし、第三の天は、神が悪魔の反乱を制圧する戦いの本拠地であり(私たちのために地上につかわされた方の使命の成功によって勝利は確実となっていますが)、神の御座は地上から一時的に離れただけの戦車なのです。地上の神の箱が四人のレビ人によって運ばれ、イスラエル軍が敵との戦いに同行したように、天の御座は四人のケルブによって「運ばれ」、サタンとその天使という地上を支配する反逆の被造物に対する神の戦闘態勢を表しているのです。天の御座は、罪と死が宇宙から完全に根絶され、すべての敵が征服され、裁かれ、処分された時の終わりに戻ってくるように定められています。その祝福された時に、私たちは裁きの火が祝福された光に変わり([黙示録 20 章 14-15 節](#)と[黙示録 21 章 23-25 節](#)、[22 章 4 節](#)を比べてみて下さい)、裁きの水が祝福された活力に変わるのを見ることでしょう

²² 「サタンの反乱」参照： 艱難期の背景： 第 1 部「サタンの反逆と墮落」、II.6 項「七つのエデン」。

(黙示録 21 章 1 節と 22 章 1 節を比較)、もはや被造物と神との分離も必要ありません(黙示録 21 章 5 節, 21 章 27 節, 22 章 15 節)。もはや、御子(初臨: 第 1 期降臨: [ヨハネ 3 章 13 節](#), [3 章 31 節](#), [6 章 33 節](#), [6 章 38 節](#), [6 章 42 節](#), [6 章 50 節](#); 再臨: [第一テサロニケ 1 章 10 節](#), [4 章 16 節](#); [第二テサロニケ 1 章 7 節](#); [第一ペテロ 1 章 11 節](#); [黙示録 19 章 11-21 節](#))、御霊([ヨハネ 14 章 15-17 節](#); [15 章 26-27 節](#), [16 章 13-14 節](#); [使徒 2 章](#))、父([黙示録 21 章 2-3 節](#); [第一コリント 15 章 24 節](#)参照)のいずれも、隔てる天を貫通する、特定の降臨を必要としないでしよう。なぜなら、その日、神は本当に三つの位格すべてにおいて、あらゆる方法で([第一コリント 15 章 28 節](#))、これから先もずっと本当に「私たちと共に」(「インマヌエル」: [イザヤ 7 章 14 節](#))、私たちも彼と共にいるからです([第一テサロニケ 4 章 17 節](#))! このように、神は私たちのために、私たちと共にいてくださいます。

ですから、神の御座は宇宙の片隅にあるわけではありませんし、天があまりに遠いので地上で起こっていることにあまり関心がないわけでもありません。そうではありません。第三の天は、神学的に言えば、イエスがすでに貫かれた天のベール(天、大気、水)の隔壁のすぐ向こう側にあるのです([ヘブル 4 章 14 節](#), [7 章 26 節](#), [9 章 11-12 節](#); [エペソ 4 章 7-10 節](#); [コロサイ 2 章 15 節](#)参照)。この隔たりの完全で最後の消滅は、これまで以上に近く、差し迫った現実なのです。このことは、[黙示録 4 章 2 節](#)において、ベールの奥に入ったヨハネが最初に目にするもの、すなわち神の御座の存在によって明らかにされているのです。



父なる神の出現：

その[御]座にいますかたは、碧玉や赤めのうのように見え…(黙示録4章3節)

前述の御座が、この<黙示録4章3節の>文脈ではヨハネがもっと説明できたであろう詳細な描写を欠いているのは、その御座がいかに印象的であっても、その上に座しておられる方を表現することは難しいからであることは疑いありません。父なる神には人間の肉体はありませんが(キリストの場合は処女懐胎以来持つておられます)、「座にいます方」という最初の記述から、ここでの父の出現が「神の顕現」、つまり被造物との交わりのために、人間の姿に似せて神の御姿を現すという性質を持っていることは明らかです。²³ このように被造物に御自身を現わされ、近づけようとする神の御意志は、私たちに対する神の大きな愛の一部です(それは私たちの主イエス・キリストの受肉に最も明確に表れており、第一回目の御降臨の際には、真の人間として苦難と奉仕を与えられ、第二回目の御降臨の際には、至高の栄光を現される運命にあります)。

この箇所ではヨハネは、この時、御父はその最も顕著な特徴である「碧玉か赤めのう(サルディウス)の宝石のように見える」と述べています。この表現が意味するところをよりよく理解するためには、まず、御父が栄光の御座に顕現されて座しておられるときの姿について、同じように語っている他の聖句を検討する必要があります。

1. [出エジプト 24 章 10-17 節](#)には、「主の栄光は焼き尽くす火のようだった」と書かれています(出エジプト 19 章 18 節も参照)、これは[出エジプト記 3 章 1-15 節](#)の燃える柴や[出エジプト 13 章 21-22 節](#)の雲と火の柱のように、他の聖句にも反映されている主の栄光ある御臨在の印を与えます。[黙示録 1 章 14 節](#)のキリストの目についての描写も比べてみてください:「目は燃える炎のようであった」。

2. [イザヤ書 6 章 1-5 節](#)で、キリストの服装は、「その衣の裾が神殿を満ちていた」ので、素晴らしく、印象的であると描写されています。[黙示録 1 章 13 節](#)のキリストの印象的な服装の描写と比較してください。「足までたれた上着を着、胸に金の帯をしめている」。

3. [エゼキエル 1 章 27 節](#)(参照:[エゼキエル 1 章 4 節](#); [8 章 2 節](#))では、主の体は「輝く

²³ 『聖書の基本』第1部のII.C.3.a項「神の顕現とキリストの降臨の定義」を参照:「神学:神についての研究」を参照してください。

金属」のようであると言われています。この句の曖昧なヘブル語の単語、チャシュマル(חשמל)は、金(W.J. Schroeder による)、真鍮(C.F. Keil による)、琥珀(KJV による)、または金と銀の合金であるエレクトラム(七十人訳による)を指しています。この四つの可能性に共通するのは、素材の輝きで、火のオレンジ色を想起させ、御父の姿に具体的で実体的な様相を与えていることです。[黙示録 1 章 15 節](#)にあるキリストの足の描写と比べてみてください:「[炉で精錬されて光り輝くしんちゅうのよう](#)」。

4. [エゼキエル 10 章 4 節](#)で、御父の栄光は「輝き」または「輝いた」([エゼキエル 43 章 2 節](#)参照)とあり、神殿を満たす雲を引き起こすほど強烈でした(参照:[黙示録 15 章 8 節](#)、煙の源は神の栄光です;[イザヤ 6 章 4 節](#)も参照下さい)。光である神([第一ヨハネ 1 章 5 節](#))は、人が神を見て生きることができないほど「[近づきがたい](#)」光の中に住んでおられます([第一テモテ 6 章 16 節](#)と[出エジプト 33 章 20 節](#))、地上で人間の能力や生存能力が及ばないこと、つまり神の輝きによって消滅されずに非常に輝かしい神の姿を見ることを第三の天でできるように、ヨハネのために明らかにされたのです。[黙示録 1 章 16 節](#)のキリストの描写を比べてみてください。「[顔は、強く照り輝く太陽のようであった](#)」。

5. [ダニエル 7 章 9-10 節](#)では、御父の衣は「[雪のように白く](#)」、御髪は「[羊の毛のよう](#)」と描写されています。[黙示録 1 章 14 節](#)のキリストの描写を比べてみてください。「[そのかしらと髪の毛とは、雪のように白い羊毛に似て真白であり…](#)」。

6. [エゼキエル 43 章 2 節](#)では、その声は「[大水の響きのよう](#)」でした([詩篇 29 章 3-9 節](#)、[46 章 6 節](#); [エゼキエル 1 章 24 節](#)を参照)。[黙示録 1 章 15 節](#)にあるキリストの描写を比較してください:「[声は大水のとどろきのようであった](#)」。

ここで指摘されている御父の姿と、ヨハネの黙示録 1 章に現れた栄光の主イエス・キリストの姿が、ほとんどすべての点で似ていることは偶然とは思えません。なぜなら、御子はまさに「(父の)栄光の輝き」であり、「(父の)本質の正確な姿」([ヘブル 1 章 3 節前半](#); [ヨハネ 1 章 14 節](#); [第二コリント 4 章 4 節](#); [ピリピ 2 章 6 節](#); [コロサイ 1 章 15 節](#) 参照)であるからです。イエス御自身は、彼を見た者は誰でも本当に父を見たのだと教えています([ヨハネ 14 章 9 節](#)、[ヨハネ 1 章 18 節](#)、[12 章 45 節](#)を参照)。結局、父のユニークな代表として([第一テモテ 2 章 5-6 節](#); [ヘブル 8 章 6 節](#)、[9 章 15 節](#)、[12 章 24 節](#))、世界と神、神と世界を和解させるために油を注がれた方([第二コリント 5 章 17-20 節](#); [コロサイ 1 章 19-20 節](#); [ヘブル 10 章 7 節](#))、世の真の光として世に送られる方([ヨハネ 1](#)

[章 4-9 節](#))、本当にこの世で語られたすべての神話に見られたのはイエスです²⁴。

[黙示録 4 章 3 節](#)の父なる神の描写は、「碧玉か赤めのう(サルディウス)」の宝石のようであり、キリストの足が「白く輝くしんちゆう」のようであるとの描写(また、[エゼキエル 1 章 27 節](#)の「光る金属」の描写)を彷彿させます。ここで言及されている碧玉<ジャスパー>は暗い色の石(黒から赤、紫)であり、サルディウスも燃えるような地色(オレンジから赤)が特徴です。さらに後者のヘブル語に相当するのは「オデム」(אֲדָמָה)で、「アダム」の名(אָדָם, `adham)との類似は偶然ではありません²⁵。「アダム」の名は「赤み」の意味で、大地から直接身体を採取した最初の人間の土色を指しているからです。その「体」が同じような色合いを示す人間の形で御自身を表すことを選択することで、御父はこの預言の言葉を読むすべての人に、地上に神の支配と人間との居住を再び確立する明確な意図と目的を知らせています(復活の主を除いて、人がかつて持つことのなかった輝かしい栄光を伴ってではあります)。父なる神は、この預言の言葉を読むすべての人に、神の支配と人間との居住を地上に再確立するという、明確な意図と目的を告げておられます。

虹：

また、御座のまわりには、緑玉<エメラルド>のように見えるにじが現れていた。(黙示録4章3節後半)

私たちが空に見る虹は、神の栄光が目に見える形で反映されたものです([エゼキエル 1 章 26-28 節](#)と[創世記 9 章 9-17 節](#)を比較、下記を参照)。しかし、[黙示録 4 章 3 節](#)では、ヨハネは本物を見えています。つまり、虹色の輝きで父とその御座を取り囲んでいる神の栄光を実際に見ているのです。通常、この神の栄光の輝きは圧倒的で、人間

²⁴ それゆえ、上に述べた出現のほとんどは、父に代わって行動する主イエス・キリストの姿なので、[イザヤ 6 章 1-6 節](#)と[ヨハネ 12 章 41 節](#)を比較してください。キリストが御父のために、また御父として(すなわち、御父の親しい代理人として、聖典の指針なしに区別することは困難なほど親しい代理人として)行動しておられることを考えると、これらの聖句で述べられている記述は、御父の神示にも適用可能であると考えられます(この点は、上述の両者の外観がよく似ていることから示されています:「旧約聖書におけるキリストの出現」を参照)。

²⁵ ヨハネは、[黙示録 21 章 18-21 節](#)の新エルサレムの門の記述においても、ヘブル語の宝石とギリシア語の等価物の対応関係を維持しています。[出エジプト記 28 章 17-20 節](#)、[39 章 10-13 節](#)、[エゼキエル 28 章 13 節](#)を比較し、「サタン」シリーズ第 4 部 III.3.b.2 項、第 5 部 II.8.b.i.7 項、「来たる艱難期」第 6 部 VII.7 項を参照してください。

には直接見ることも、ましてや正しく描写することもできません(そのため、地上の表現では、単に「明るさ」と表現されることが多い)。しかし、前述したように、ヨハネはここで、普通なら人間には見るできないこの天の光景を見ることができるようになったのです。虹の描写は、エゼキエルの描写と似ています(C.F.Keil 訳、強調と解説を加えています)。

(26) 広がり(すなわち、大空または天の「圧縮された」障壁: 上記参照)の上には、その頭上(すなわち、四つのケルブの頭上)には、サファイアの石のような玉座のかたちが見え、その玉座のかたちの上には、人に似た姿があった。それは、輝く真鍮(またはエレクトラム、琥珀: 上記参照)のように見え、その中(すなわち、人の姿の中)に火のように見えるものがあり、(27) その腰から上と、その腰から下が、火のようで、輝く光がその周囲にあったのを見た。(28) 雨の日に雲の中にある(雨の)弓のような様子で、輝く光がその周囲にあった。これはエホバの栄光の似姿であった。(エゼキエル 1 章 26 節-28 節前半) [C.F.ケイル]。

この箇所は、虹と主の栄光が同義であることを明白にしています。ですから、[黙示録 4 章 3 節](#)の「御座のまわりのにじ」は、それを見ることができるとして、その栄光の現れとしか理解できません。その輝き、明るさ、虹色の輝きは、私たちが時々見ることができる地上の虹の栄光の反射を桁違いに超えていると想像してもよいのではないのでしょうか。

ヨハネは、虹の色を「エメラルドのように見える」と表現しています。しかし、虹の色が全体的に、あるいは主に(この特別な宝石の通常の色である)緑色であると想像してはいけません。しかし、(ダイヤモンドやルビーは珍しく、比較的知られていない)古代世界でエメラルドは、広く流通していた宝石の中で最も価値のあるものでした。それに加えて、ヨハネが神の栄光の虹色のオーラを、エメラルドのきらきらした輝きのゆえに、「エメラルドのようだ」と表現したことは間違いありません。また、虹の比較対象として宝石を用いたことは、虹が私たちの目に映る反射像ではなく、もっと具体的で触覚的な現象であることを示唆しています。最後に、虹が最も貴重な宝石であること、またその輝きに加えて、虹の触感を表すのに適切と思われる「エメラルドの**ような**」という形容詞をヨハネが選んだのは、もう一つの要因があると思われます。つまり、〈エメラルドに〉対応する言葉のヘブル語の「ベアケス」(ברקת)は「閃光」や「きらめき」を意味し、この虹の輝きや鮮烈さを最もよく表しています。

この虹の圧倒的な輝きは、今見てきたように、主の栄光の輝きであり、その栄光は地

上の遮蔽物なしに輝いているのですから、心に留めておく必要があります。なぜなら、神が地上でご自分の栄光を「現された」時というのは、常に遮蔽された形であったからです(そうでなければ、肉体が栄光を見ることに耐えられないからです)。モーセが主の栄光を見ようとしたとき、主は「あなたはわたしの顔を見ることはできない。わたしを見て、なお生きている人はないからである」([出エジプト記33章19-20節](#))と答えられました。その直後、神はモーセにご自身の栄光を現されましたが、それは、ヨハネがここで受けている「直接の御姿」ではなく、「部分的な御姿」であることも明らかにしています。([出エジプト33章21-23節](#))。また、地上で主の栄光が部分的に現わされた場合でも、その強さと炎のような性質は圧倒的です([出エジプト40章34-38節](#); [レビ9章23-24節](#); [歴代誌下7章1-3節](#); [イザヤ6章5節](#); [エゼキエル1章28節](#); [マタイ17章5-6節](#); [ルカ2章9節](#))。上に説明したように、世界は現在、天の障壁によって神の完全な栄光から分離されています。歴史の終わりに神の栄光がついに地上に戻ってくるとき、その障壁とその下の腐敗した世界(光に耐えられない)は火によって滅ぼされて、「義の宿る」祝福の新天新地と置き換えられるでしょう([イザヤ65章17節](#), [66章22節](#); [第二ペテロ3章10-13節](#); [黙示録21章1節](#), [21章5節](#); [イザヤ34章4節](#); [黙示録6章14節](#)も参照: 私たち信者は地位的にはすでにその一部となっている祝福された新世界: [第二コリント5章17節](#) 参照)に取って代わられます。

このように、虹は、迫り来る艱難期の裁きの後の神の平和、繁栄、回復の重要な象徴であり、神の栄光がもはや「天」だけではなく、地上にも見られるようになる神の地上への最後の帰還を予見しています([黙示録 21 章 23 節](#)「神の栄光が…照らす」、[黙示録 22 章 5 節](#)「神が彼らを照らし…」参照)。虹は神のしるしであり、大洪水の後に地上に与えられた神の慈悲の約束として、聖書を読むすべての人によく知られています([創世記 9 章 9-17 節](#))。このように、神の栄光が虹の形で現れることは、来たる艱難期の嵐の後の祝福された神の平穏を予期しているのです。この「祝福の余波」のような虹の形で神の栄光をヨハネに見させることによって、神は、来たる艱難期の荒廃にもかかわらず、地球が完全に破壊されるのではなく、悪人の手から解放されて、来るべき御子の王国でこれまでは知られなかった最も祝福された平和と繁栄が回復されることをヨハネと私達に保証しておられるのです。²⁶そして、その千年が過ぎると、神が私たちと共に永遠に生きるために新しい地に戻ってこられる時、この世のすべての墮落と悪が、神の栄光によって焼き払われる日が来るのです([黙示録 21 章 1-8 節](#))。その日には、神の栄光の燃える火の裁きは二度と見られることなく、必要とされることもなく、代わりに神の栄光は、人の目のまだ見たことのないどんな虹よりも、最も優美で燦然と輝く光、

²⁶ 同じように、キリストの型であるヨハネの黙示録 10 章 1 節に登場する虹を持つ強い天使も、戻って来られるメシヤの御姿における神の地上の再征服と回復を象徴しています。

恵みに満ち、より美しいものとして見られるようになるのです。

長老たち:

また、御座のまわりには二十四の[他の]座があって、[これらの]二十四人の長老が白い衣を身にまとい、頭に金の冠をかぶって、それらの座についていた。(黙示録4章4節)

24人の長老は高位の天使であり、時として思い込まれているような人間ではありません。この時点では、艱難期はまだ始まっていませんし、信者の復活もありません。また、キリストの裁きの座はまだ先のことです(それに伴う個々の信者の報いも同様に先のことです)。天において人間の長老が位に就くには、これらすべての出来事が先に起こる必要があります。さらに、キリストが昇天するまで、天には人間がいなかったことも知られています(つまり、キリストが「とりこを捕らえて引き行き」、十字架前の信者を地下の樂園から天を通り、第三の天にある神の神殿に連れて行くまで<天には人間はいなかったのです>: 上記の「聖所」での議論を参照してください)。また、現在も地上に多くの信者がいること(千年王国には、まだ数え切れないほどの無数の人々が信者となります)も知っています。そして、(この長老が人間であると仮定した場合)これらに「長老の代表」がないのは、とても奇妙なことです。つまり、この時点ですでに完成し、裁かれ、報いを受け、復活した人間の長老団は、神の家族のためにこれらの条件がまだ満たされていないため、あり得ないのです。したがって、この長老たちは天使であると考えなければなりません(この結論は、彼らの外見や振る舞いが、ヨハネが黙示録で描いている他の天使の被造物とあらゆる点で似ており、一致していることによってさらに確証されます)。

確かに、前に見たように、この長老たちはケルビムに次ぐ非常に高い位の天使です²⁷。このことは、ケルビムの次に神に近いところに位置し、神の御座の周りの座に座っていることからわかります(黙示録4章4節)。これらの座とともに、王冠も彼らの高貴な地位を示しています(参照:[イザヤ24章22-23節](#); [黙示録4章4節](#), [4章10節](#), [5章5-6節](#), [5章8節](#), [5章11節](#), [5章14節](#), [7章11節](#), [7章13節](#), [11章16節](#), [14章3節](#), [19章4節](#))。コロサイ1章16節で言及されている「位<王座-新改訳IV>」は、悪魔が長老レベルの位階を模倣して作り出した墮天使の位階であることは、以前にも述べたとおりです。この長老たちは、主の「護衛」として神の御座に直接関係しない最高位の天使(ケルブ)として、サタンの反乱の時に神に忠実であった六つの天使氏族の

²⁷ 『悪魔の反乱』第4部「サタンの世界システム、過去、現在、未来」III.3.b.2項「長老」を参照。

(各氏族は4人の長老のチームをつくり)最高幹部であるようです。この24人の長老の存在、姿、礼拝は、この天国の光景を考えるすべての人に、主に忠実であり続けることの大きな価値と、私たちが現在従事している闘いに秀でた者に約束された特別な恩恵を思い起こさせるものです²⁸。

稲妻、音、雷:

[神の]御座からは、いなずまと、もろもろの声と、雷鳴とが、発していた。
(黙示録4章5節前半)

これらはすべて差し迫った裁きの前兆です(参照:[イザヤ 29 章 6 節](#))。1)大艱難期の最終段階である開始前の最後の警告である第7のラッパの音の後に、同じ三つの要素が複合的に起こることからわかるように([黙示録 11 章 19 節](#); [創世記 19 章 24 節](#); [出エジプト 9 章 23-34 節](#), [19 章 16-19 節](#), [20 章 18 節](#); [第一サムエル 7 章 10 節](#); [ヨブ 37 章 1-5 節](#), [40 章 9 節](#); [詩篇 18 篇 7-15 節](#), [29 篇 3-9 節](#), [77 篇 17-18 節](#) 参照)、2)ハルマゲドンの戦いに先立つ最後の試練の審判である第7の鉢([黙示録 16 章 18 節](#))の後にも、雷、音、光が同時に出現している事実も挙げられます。ここで、これらの初期の裁きの徴候が、神の御座から現れることは前例がないというわけではない([イザヤ 6 章 4 節](#); [エゼキエル 1 章 4 節](#), [1 章 14 節](#), [1 章 24-25 節](#); [黙示録 8 章 5 節](#), [11 章 19 節](#), [16 章 18 節](#) 参照)、また完全に予想外というわけでもないでしょう。神の存在と栄光は「全うされた」すべての人に祝福を与えますが([ヘブル 12 章 23 節](#))、神の輝かしい聖さと正義は、神に反対し続けるすべての人に差し迫った破滅を告げるからです。敵にとって、栄光の御座はまさに戦車なのです。天と地をきよめ、終わりのない新しい世界に、永遠の平和を回復するために必要な正しい裁きを、腐敗し反抗する世界に解き放つ用意があるのです。私たちは、これらの警告の印が持つ偉大さと恐ろしさから、慰めと励ましを得ることができます。なぜなら、神が警告を与えるとき、それが個人に対するものであれ、世界全体に対するものであれ、神の警告に従わなかった場合の結果を、はっきり明確に示されるからです。(参照:[ヘブル 12 章 18-21 節](#))-これ以上の神の優しさはありません。

七つのともし火

また、七つのともし火が、御座の前で燃えていた。これらは、神の七つの

²⁸ ペテロの手紙シリーズ#18「永遠の報い」、「来たる艱難期」第6部I.7項「教会の裁きと報い」参照。

霊である。(黙示録4章5節後半)

三位一体の各位が天の神殿にいます。御父(その姿については前述しました)と、御子(父と共に御座におられる:[黙示録 5 章 6 節](#))、そして、この「七つのともし火」で象徴されている御霊です。この「神の七つの霊である」七つのともし火が聖霊を表していることは、ヨハネの御父と御子の言及において、その間に同じ「七つの霊」について述べていること([黙示録 1 章 4-5 節](#))から明らかです。

(4節後半)今いまし、昔いまし、やがてきたるべきかたから、また、その御座の前にある七つの霊から(すなわち聖霊)、(5節前半)また、忠実な証人、死人の中から最初に生れた者、地上の諸王の支配者であるイエス・キリストから、恵みと平安とが、あなたがたにあるように。

この「ともし火」を表すギリシャ語「ランパス」($\lambda \alpha \mu \pi \acute{\alpha} \varsigma$:英語の「ランプ」の語源)は、1 章と 2 章の「燭台」(lychnia, $\lambda \upsilon \chi \nu \iota \alpha$: [黙示録 1 章 12-13 節](#), [1 章 20 節](#), [2 章 1 節](#), [2 章 5 節](#), [11 章 4 節](#))と混同しないように注意しなければなりません。[黙示録 4 章 5 節](#)にあるような「ともし火」は、実際の光源です。古代世界では、ランプは横ながの小さな陶器の盆で、細い喉の部分に芯があり、その芯でランプの器からオリーブ油を引いて燃やしました。一方、「燭台」は、ランプを支えるための台です。聖霊の器として([第一コリント 6 章 19-20 節](#); [ローマ 6 章 13-19 節](#), [12 章 2 節](#); [第一ペテロ 2 章 5 節](#))、私たち信者は、個人的にも、七つの教会のように集団としても、「燭台」、つまり、この暗い世界で神の言葉と証が輝くように神によって用いられる神の道具です([マタイ 5 章 15-16 節](#); [エペソ 5 章 8 節](#); [ピリピ 2 章 15 節](#); [第一テサロニケ 5 章 5 節](#))。しかし、光の源は、私たちが高く掲げ、表示し、光を発する「ともし火」は、聖霊である神です([第二コリント 3 章 17-18 節](#); [ガラテヤ 5 章 16-25 節](#)を参照)。

「ともし火」として象徴されている聖霊の出現は、啓蒙、力づけ、世界への証しという神の計画における聖霊の役割を表しているだけでなく([ヨハネ 16 章 5-15 節](#)参照)、その御計画の見えないけれども強力な「エネルギー源」として、常に「感じるけれども見えない」立場を保っています。風のように(ギリシャ語では風と霊は同じ言葉です: $\pi \nu \epsilon \tilde{\upsilon} \mu \alpha$)、人の目には見えませんが、どこにでもいて、強力です([ヨハネ 3 章 8 節](#); [創世記 6 章 3 節](#); [ゼカリヤ 4 章 6 節](#); [ヨハネ 14 章 16-17 節](#); [第一コリント 12 章 3 節](#); [ガラテヤ 5 章 16-26 節](#)を参照)。²⁹ 御霊が七つのともし火で表されるという事実は、

²⁹ 『聖書の基本』第 1 部の II.B.3.b.3 節の「聖霊(三位一体の第三位格)」を参照してください: 「神

御霊が提供する力、啓発、証の完全で完璧な性質を強調しています([イザヤ 11 章 1-3 節](#); [ゼカリヤ 3 章 8-9 節](#), [4 章 2 節](#), [4 章 6 節](#), [4 章 10 節](#); [黙示録 3 章 1 節](#), [5 章 6 節](#); [イザヤ 42 章 1 節](#); [マタイ 3 章 16-17 節](#); [ヨハネ 3 章 34 節](#), [16 章 12-15 節](#) 参照)。

さらに、これらのともし火は「火のともし火」であり、さらに「御座の前で燃えている」とも言われています。御霊はしばしば火や熱で表現されます([使徒行伝 2 章 3 節](#), [18 章 25 節](#); [ローマ 12 章 11 節](#); [第一テサロニケ 5 章 19 節](#); [ヤコブ 4 章 5 節](#) [ギリシャ語]; [サムエル記上 11 章 6 節](#); [詩篇 69 篇 9 節](#); [ヨハネ 2 章 17 節](#) 参照)これは神の民を暖め、活性化し、鼓舞し、ラオデキヤの人々([黙示録 3 章 15-16 節](#))のような生ぬるいものではなく、私たちの主に熱心であるようにという意味であり([マタイ 22 章 37-40 節](#); [テトス 2 章 14 節](#) [NIV ではありません]; [第二ペテロ 3 章 12 節](#); [第一コリント 9 章 24 節](#) と [第一テモテ 4 章 10 節](#), [6 章 12 節](#) も参照)、御霊の火のような影響を「消さない」で([第一テサロニケ 5 章 19 節](#))、イエスキリストのために自ら火を燃え立たせるように([ローマ 12 章 2 節](#); [第二テモテ 1 章 6-7 節](#); [第一テモテ 4 章 14 節](#) を参照)と言われているのです。このように、御霊が照らし、清め、温め、力を与え、奮い立たせる働きは、艱難期の入り口にいる世代にとって慰めとなり、これからどんなに暗い日が続いても、御霊の内在本を通して、すべての信者に神が完全に継続した導き、保護、供給、慰めを与えてくださることを思い起こさせるはずで

(15) あなたがたは再び恐れをいだかせる奴隷の霊を受けたのではなく、子たる身分を授ける霊を受けたのである。その霊によって、わたしたちは「アバ、父よ」と呼ぶのである。(16) 御霊みずから、[このように]、わたしたちの霊と共に、わたしたちが神の子であることをあかしして下さる。(17) もし子であれば、相続人でもある。神の相続人であって、キリストと栄光を共にするために苦難をも共にしている以上、キリストと共同の相続人なのである。(ローマ8章15-17節)

海：

御座の前は、水晶に似たガラスの海のようにであった。(黙示録 4章前半)

ヨハネは玉座の前に「水晶に似たガラスの海」のようなものを見えています。この「海」(ギリシャ語ではタラサ: θάλασσα)は、代表的な型<予型>に過ぎなかった幕

学:神についての研究」をご覧ください。

屋や神殿における洗盤の海の原型(または対型<実体>)です。この海は多くの点で地上の海と似ていますが(ギリシャ語ではどちらも同じ単語で表されています)、ヨハネはここで「似ている」という単語(ギリシャ語ではホス、ὄς)を用いて、大きな違いがあることを表しています。この海は「ガラスのような」「水晶のような」外観をしています。これは出エジプト記やエゼキエル書で、この同じ現象に際して記された描写と本質的に同じものです。

そして、彼ら(=イスラエルの長老たち)がイスラエルの神を見ると、その足の下にはサファイアの敷石のごとき物があり、澄み渡るおおぞらのようであった。(出エジプト記 24 章 10 節)

生きものの頭の上に水晶のように輝く大空の形があつて、彼らの頭の上に広がっている。(エゼキエル書 1 章 22 節)

氷、ガラス、水晶という名詞や、サファイアブルー、きらめき、半透明という形容詞は、いずれも固体状態の印象的な水塊のことを指しているであろうという解釈は、上の聖句の「おおぞら」「敷石」などから生じたものです。さらに、洗盤の外観も同じような印象を与えます。洗盤は液体で満たされていましたが、青銅製の器の反射面によって、その水はきらめき、半透明で、(空の反射を受けると)青っぽく見ええました(ヨブ記 37 章 18 節を参照)。先に地上の洗盤の海について述べたように、ヨハネがここで見ている天上の海は、創世記の地球の回復に関する記述にある「天上の水」に他なりません³⁰。

(6)神はまた言われた、「水の間におおぞらがあつて、水と水とを分けよ」。(7) そのようになった。神はおおぞらを造つて、おおぞらの下の水とおおぞらの上の水とを分けられた。(8) 神はそのおおぞらを天と名づけられた。(創世記1章6-8節前半)

この「上の水」は、事実上、おおぞら(または天)の「上」にある最後の固い層であり、天と共に、聖なる神と墮落した世界を隔てる機能を果たしています。この事実は、なぜ天の障壁と同様の言葉で表現できるかを説明するのに役立ちます(すなわち、出エジプト記とエゼキエル書ではそれぞれ「敷石」と「おおぞら」と表現)³¹。また、聖書の中

³⁰ 詳細は「悪魔の反乱」を参照：艱難時代の背景：第2部「創世記のギャップ」を参照。

³¹ しかし、空間的に見れば、地球と宇宙の反対側にあるこの「上の水域」との間の距離は計り知れない(そしておそらくは知ることさえできない)が、神学的に見れば、私たちとこの最後の障壁の背後にある第三の天との間の「距離」は、目に見えないとしても限りなく小さいことを忘れてはならない。神は遍在しているが、神が与えてくださる明確な証人を通して信仰の目で見えるだけだからで

には主に詩的な文脈の中で、あたかも地球の大気と大気中に含まれる水分が、共に二つの天と「上の水」を構成しているかのように描写されている例が時折見られます。(つまり、本当は地球が回転しているのに、太陽が「沈む」と表現するような、現象的「見た目の言語」の詩的表現の場合、この二つが混同されるのです: [詩篇 104 編 13 節](#))。しかし、[黙示録 4 章 6 節](#)にあるこの天の海の存在は、[創世記 1 章 6-8 節](#)が(地球の大気を超えた宇宙の存在を認識していない)「詩的」あるいは「混乱した」記述ではなく、逆に、そこで述べられている「おおぞら」は、神がそれを二層の「天<複数形>」と名付けられたように、二つの天(空と宇宙)の両方として理解すべきものであり([創世記 1 章 7 節](#))³²、また、太陽、月、星がある場所であることがはっきりわかります([創世記 1 章 14-19 節](#))。創世記の天の復元に関する記述を額面通りに受け入れると、つまり、地と第三の天の間のすべてを構成する「おおぞら」が、二つの巨大な水の集まりを両側に分けていると考え、[黙示録 4 章 6 節](#)における天の海の存在が明らかになるだけでなく、他の聖句にも同様に、「上の水」は大気中の水分ではなく、既知の宇宙のはるか上空にある原初の水の分けられた部分として描写する箇所をつじつまが合うようになります。(例えば、[詩篇 104 篇 3 節](#); [イザヤ 40 章 22 節](#)参照)。

それはノアの六百歳の二月十七日であって、その日に大いなる淵の源は、ことごとく破れ、天の窓が開けて、(創世記 7章11節)

天の天よ、天の上の水よ、主をほめたたえよ。(詩篇 148 篇 4 節)

(5) すなわち、彼らは(神の裁きは決して来ないと主張して)このことを認めようとはしない。古い昔に天が存在し、地は神の言によって、水がもとになり(すなわち、「下の水」が海へと集められ)、また、水によって(再び)成ったのであるが、(6) その(ノアの)時の世界は、御言により[再び][二つの源の]水でおおわれて滅んでしまった。(第二ペテロ 3 章 5-6 節)

上記の最初の聖句では、(祝福と裁きの源である:[詩篇 78 篇 23 節](#); [イザヤ 24 章 18 節](#); [マラキ 3 章 10 節](#) 参照) 地の下と天の上から来る多量の水によって、地球は氾濫しています。この二つの水の両方とも、地球を氾濫させた水の量において同等の強調が置かれています。この二つの水の組み合わせ(どちらも人間の目には見えません)は、

ある。上の図 2 参照。

³² この二層の形態(ほとんどの世俗的学問の見解)については、『悪魔の叛乱』の第 1 部 II.3 節の「三つの天」を参照: 『艱難期の序章』の第 1 部、「サタン」の反逆と墮落」の II.3 節、特に脚注#12 を参照。

このような大量の水の発生をあり得ないとする大洪水の懐疑的な評価を覆します(水は地球の最も高い山々を6メートル以上も上回ったので、現在の海の水だけが大洪水の源であるとするなら、それはあり得ないことです)。[創世記 7 章 20 節](#))。

上記の二番目の聖句にある、「天の天」という表現は、しばしば「最高の天」とも訳されますが、空と宇宙の二層の天の上に位置する第三の天を指しています(同じ詩篇の[1-3 節](#)と詩編 [115 篇 15-16 節](#)を参照)。[詩篇 148 篇 4 節](#)の後半では、この第三の天と(他の)二つの天の間の水の層が扱われているので、この「上の水」は単なる大気中の水分ではなく、[創世記 1 章 6-7 節](#)の大空によって分けられた第二の水の集まりで、宇宙のまさに「端」の領域よりはるかに上にあるはずだということが十分に理解できます。

上記の三番目の聖句についてですが、[創世記 1 章 6-7 節](#)の天がこれと同じ分離機能を持っています。ペテロは、天、地、二つの水を並べることで、「大昔に存在した天」が地球を再興する最初的手段(つまり、二つの水を分割すること)であることを明確に示しています。地球は「水の中から」出てきたのであり、(水が地球の海に落ちていくことで、地は水の上に現れ)、「水の中を通過して」出てきたのです(すなわち、天のおおぞらは、下の地の水を上の水から分け、下の水は海に集まるようになった)³³。

この「二層」の天とその上にある「上の水」は、実際には別のものですが、それでも両者は地球のはるか「上」にあるため、一体のものとして表現されることがあります(まさに、[エゼキエル 1 章 22~28 節](#)と [10 章 1 節](#)で見た、この水の層を「おおぞら」として表現するのと同じです)。実際、ヘブル語の「天」(shamayim, שמים)は、正確な語源は議論の余地がありますが、おそらく「水の場所」(つまり、「そこに(水が)ある」= sham-mayim, שמים) という意味の言葉)を意味します。この意味は、第一の天(大気圏)の中の水と第二の天の境界の「上の水」の両方を暗示するものです(ただし、これらの「上の水」は、これまで見てきたように、厳密には天<複数形>とは異なるものです)³⁴。最後に、この「上の水」と天<複数形>のおおぞらとの混同は、上で見たように、洗盤の海の作りにも明確に表されています。この天の海の地上での表現において、天の海を表しているのは水であり、一方、青銅の器は厳密には天のおおぞらを含み、抑制していることを表しています。

³³ (「～によって」ではなく「間に入る」という意味の前置詞 dia が同じような使い方がされている[第 1 ペテロ 3 章 20 節](#)を参照してください)。

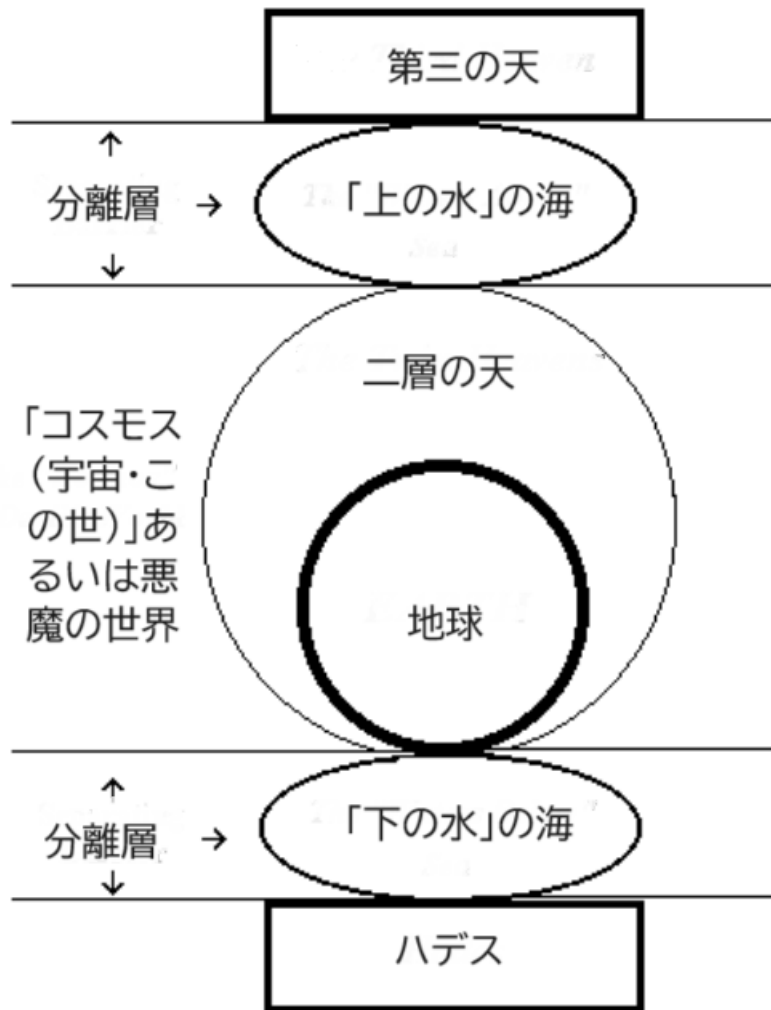
³⁴ Bauer-Leander の文法書と Koehler-Baumgartner の辞書の両方で可能性として言及されています。Jenni and Westermann's Theologisches Handwoerterbuch zum Alten Testament v.2 (Munich 1979) s.v. שמיםの文献を参照。

あなたは[青銅を]鑄た鏡のように堅い大空を、彼のように張ることができるか。(ヨブ 37章18節)

この「上の水」もまた、重要な分離の目的を果たします。おおぞらが二つに水を分け、抑制するために神によって再構築されたように(創世記 1 章 6-7 節)、「上の水」は神の聖なる神殿である第三の天を、腐敗した下界から分離する役割があります。この分離機能は、地とその下にある黄泉の国の地下室の中間にある上と下を分ける「下の水」(出エジプト記 20 章 4 節参照)の場合にもはっきりと見えます(ヨブ記 26 章 5-6 節)。そのため、たとえば黄泉の国も「深淵」と呼ばれることがあります³⁵。エゼキエル書 1 章と 10 章にある「大空の上の水」とすべきところに「大空」が使われているのと同じように、厳密には異なる領域が混同されているのです。- なぜなら、黄泉の国はこれらの「下の水域」のはるか下にあり、そこを通過してしか行くことができないからです。(同じように、第三の天に到達するためには、天と「上の水」の両方を通らなければならないので、洗盤とその水が一体であるように、厳密には異なる二つの領域は、多くの理由のために一体であるかのように考えることができるのと同じです)。この「下の水」の分離機能で、黙示録 20 章 13 節で「海」が「死人を出す」ということについても説明がつきます。これは、海の中に亡くなった霊がいるからではなく、海が分離層となって、いわば、ハデスにいる救われていない死者を「閉じ込めている」からです(ヨブ 26 章 5-6 節, 38 章 16-17 節)³⁶。「上の水」も同様に分離する機能を果たし、その上にある第三の天の神聖な境内とその下に横たわる悪魔のコスモス、つまりサタンの腐敗した世界との間に重要な隔壁を形成しています。したがって、この二組の水は、図式的に見ると、次のように表されます:

³⁵ 「深淵(アビス)」は正しくは海の名前: 「艱難期の序章」参照: 第 2 部「創世記の空白期」II.3.b 項「神の裁きのしるしとしての海」を参照。

³⁶ 「悪魔の反乱: 艱難期の序章」第 2 部「創世記の空白期」の II.3 項「海」を参照。



つまり、どちらの水も神学的に言えば「隔ての海」であり、「下の水」の場合は「死と黄泉」を生者の(墮落した)世界から、「上の水」の場合は生者の(墮落した)世界を神の聖なる住まいから隔てるのです。この天の分離と遮蔽の機能(黙示録4章6節の凍海<ガラスのような海>は上部の「凍結氷面」)がなければ、現在の腐敗した天と地は、全能の聖なる主神の素晴らしい栄光の前に「逃げ去る」でしょう(黙示録20章11節; cf. 詩篇97篇5節, 102篇25-27節; イザヤ13章13節, 24章19-20節, 34章4節, 51章6節; ハガイ2章6-7節; マタイ5章18節, 24章35節; ルカ21章33節; 第一コリント7章31節; ヘブル12章25-29節; 第二ペテロ3章10-13節; 第一ヨハネ2章17節; 黙示録6章14節, 21章1節)。しかし、現在、上の聖と下の腐敗が分離しているにもかかわらず(この分離がなければ、この世界の存続は不可能です)、神は決してご自身を世界から孤立させてはいないことに注目することが重要です。それどころか、被造物の本質を通して、人間と天使の働きによって、そして最後に最も重要なこととし

て、ご自分の愛する御子の派遣と犠牲を通して、この世界に対して常に強力で包括的な証を維持してこられました(ヘブル 1 章 1 節とヨハネ 3 章 16 節を比較してください)。そして、この水の障壁がもはや私たちを神から分離しない日が来ます。神ご自身が私たちの知っているこの世界を火で清められたとき(第二ペテロ 3 章 10-12 節; イザヤ 26 章 21 節参照)、腐敗したコスモス<宇宙・世界>の代わりに新しい天と新しい地が「義の住むところ」(第二ペテロ 3 章 13 節; イザヤ 65 章 17 節, 66 章 22 節参照)となるのです。神ご自身がその新地にて私たちの間に住まわれる時(黙示録 21 章 3 節; イザヤ 25 章 6-9 節; エゼキエル 37 章 27 節, ゼカリヤ 2 章 10 節参照)、神の存在の輝かしい栄光は、もはや世界の継続的存在と相容れないということではなく、代わりに私たちが歩むための光となるでしょう(黙示録 21 章 23-24 節, 22 章 5 節)。その祝福と栄光の日には、もはや永遠に「海がなくなる」(黙示録 21 章 1 節)のです。その祝福と栄光の日には、下の水に似ているものは、主の前から流れ出る命の水だけであり(黙示録 22 章 1-2 節; イザヤ 55 章 1 節; エゼキエル 47 章 1-12 節; ヨエル 3 章 18 節; ゼカリヤ 14 章 8 節; 黙示録 22 章 17 節参照)、上の凍った水に似ているものは、新しいエルサレムを築く結晶だけです(黙示録 21 章 18-21 節)。命の水はハデスと生ける者の世界との間の(救われない死者が必ず通らなければならない)一時的な液体の障壁ではなく、自由に流れて、永遠の祝福と主との交わりをもたらすようになるのです。そして、(現在の上空の水のように)私たちを聖なるものから隔てる凍りついた障壁ではなく、新しいエルサレムの鮮やかな結晶の壁と道は、前例のない祝福を永遠に与える、永続する堅固な住まいとなるのです。

最後に、神の住まいと下界の間の最後の障壁として、この天の海を通らなければなりません。このような天とその上の水を通して神の御前に入る「通路」は、聖書の中でさまざまに描写されています:

1. 天の「水門」(創世記 7 章 11 節, 8 章 2 節; 列王記下 7 章 19 節; イザヤ 24 章 18 節; マラキ 3 章 10 節参照):

(1) エリシャは言った、「主の言葉を聞きなさい。主はこう仰せられる、『あすの今ごろサマリヤの門で、麦粉一セアを一シケルで売り、大麦二セアを一シケルで売られるようになるであろう』。(2)時にひとりの副官すなわち王がその人の手によりかかっていた者が神の人に答えて言った、「たとい主が天に窓<צַנְיָהּ; アルバー:「窓、格子...」「水門」の意もある>を開かれても、そんな事がありえましょうか」。エリシャは言った、「あなたは自分の目をもってそれを見るであろう。しかしそれを食べることはなかろう」。(第二列王記 7 章 1-2 節)

2. 天の「扉」として(参照:[詩篇 78 篇 23-25 節](#)):

その後、わたしが見ていると、見よ、**開いた門が天にあった**。そして、さきにラッパのような声でわたしに呼びかけるのを聞いた初めの声が、「ここに(すなわち、戸を通過して)上ってきなさい。そうしたら、これから後に起るべきことを、見せてあげよう」と言った。(黙示録 4章1節)

3. 天の「開口部」として([エゼキエル 1 章 1 節](#); [マタイ 3 章 16 節](#); [ヨハネ 1 章 51 節](#); [使徒行伝 10 章 11 節](#); [黙示録 19 章 11 節](#)を参照):

しかし、彼は聖霊に満たされて、天を見つめていると、神の栄光が現れ、イエスが神の右に立っておられるのが見えた。そこで、彼は「ああ、**天が開けて、人の子が神の右に立っておいでになるのが見える**」と言った。(使徒行伝 7章55-56節)

4. 天<複数形>を「はしご」「スロープ」「階段」で横切るように([アモス 9 章 6 節](#)[ヘブル語]参照):

時に彼は夢をみた。一つのはしごが地の上に立っていて、その頂は天に達し、神の使たちがそれを上り下りしているのを見た。(創世記 28:12)

これらの聖句はすべて同じことを指しています。つまり、聖なる神と腐敗した下界との間の分離を維持するために、厳密に管理された手段によってのみ第三の天にアクセスできることです。このアクセスは、神の使者である天使が地上で神の意志を達成し、神の御前に戻るために、天と上の水の障壁を貫く一時的な開口部が神によって提供されることによります。霊的な存在であると同時に、この腐敗してしまった地上の被造物である人間は、「道」である主イエス・キリストの勝利によって、私たちのためのこのアクセスを獲得し([エペソ 2 章 18 節](#), [3 章 12 節](#))、彼に属する者としてこの同じバリアを通過する希望を与えていただき([ヘブル 6 章 19-20 節](#), [9 章 24-25 節](#), [10 章 20 節](#); [マタイ 27 章 51 節](#)参照)、この方によって私たちはこのバリアを通り抜けられるようになったのです。この方の勝利がなければ、私たちは天と「上の水」の障壁を通り抜けるアクセスを享受することはできなかつたでしょう([ヨハネ 14 章 6 節](#); [マタイ 7 章 13-14 節](#); [ルカ 13 章 24-25 節](#); [ヨハネ 10 章 7-9 節](#)参照)。

また言われた、「よくよくあなたがたに言うておく。天が開けて、神の御

使たちが人の子の上に上り下りするのを、あなたがたは見るであろう」。
(ヨハネ 1 章 51 節)

第三の天の話に戻ると、上層の水の海は、神の天の神殿と下界を隔てる障壁であるだけでなく、アクセスポイントにもなっています。この機能は、艱難期の信者が火のような大迫害に耐えて、「海の上」に現れることを説明するのに役立ちます([黙示録 15 章 2 節](#))。この点で、天の海である「上の水」は、地上の出来事を目撃する天の群衆のための「観測所」のような役割も果たしていると思われます。聖書には、このような天の地上観測の詳細はほとんど書かれていませんが、天使たちが地上で起こっていることをよく知っていることは明らかです(ヨブ記 1~2 章、[列王記上 22 章 19~22 節](#); [ルカ 15 章 10 節](#); [第一コリント 4 章 9 節](#), [11 章 10 節](#); [第一ペテロ 1 章 12 節](#))。また、今は第三の天にいる亡くなった信者たちも、このようにして地上で起こることを見ることもできません([ヨハネ 8 章 56 節](#); [ヘブル 12 章 1 節](#); [黙示録 6 章 10 節](#))。もしそうなら、この海はそのような観察のための「のぞきレンズ」になりそうです。しかし、神はそのお姿において圧倒的な栄光とすばらしさをお持ちなので、このような地上の出来事は、神の栄光とご計画の進展を反映する限りにおいて、天の視点からしか関心をもたれないことは間違いないでしょう。

四つの生きもの：

御座の前は、水晶に似た、ガラスの海のようにであった。そして、御座のあたり、その周りに、前もうしろも目で満ちた四つの生き物がいた。(黙示録 4 章 6 節後半-新改訳IV)

この四つの生き物はケルブ(ヘブル語の複数形ではケルビム)です。ケルブは天使の中でも最高位にあり、過去に何度か詳しく説明したことがあります³⁷。ヘブル語の「ケルブ」(cherubh, כְּרֻב)はアッカド語と同じ語源を持つ言葉で、賛美や崇拜を意味します。これは確かに、神の御座に参じ、絶えず神を賛美するケルビムの主要な職務を描写しています([イザヤ 6 章 1-7 節](#); [黙示録 4 章 8 節](#), [5 章 8 節](#), [5 章 14 節](#), [7 章 11-12 節](#), [19 章 4 節](#))³⁸。これらの天使はイザヤ書第六章で「セラフ」とも呼ばれていますが、これ

³⁷ 特に「悪魔の反逆」を参照：イザヤ書、エゼキエル書、黙示録のケルブの描写の違いと思われる部分が調整され、説明されています。同じシリーズで、第 1 部「サタンへの反逆と墮落」の III.1 節「ケルブ」、第 4 部「サタンへの世界システム」の III.3.b.1 節「ケルブ」、聖書の基本、第 2A 部「天使論」の II.9.3.1 節「ケルブ」も参照してください。

³⁸ 『旧約聖書神学単語集』(シカゴ、1980 年)の R.L.ハリスの記事「sub voce」、およびゲゼニウス、

は彼らの火のような外観にちなんでのことです([エゼキエル 1 章 5 節](#), [1 章 13 節](#), [8 章 2 節](#); [申命記 4 章 24 節](#); [詩篇 104 篇 4 節](#); [エゼキエル 28 章 14 節](#) 参照)。³⁹ これら四つのケルビムに置き換えられたオリジナルのケルブであるサタンの場合と同様に、ケルビムまたは「生き物」は神の王座に付き添い、運搬し、守っています。この任務は、彼らの体と翼を満たす多くの目(すなわち、絶え間ない警戒の象徴と手段として)を説明するものです。[黙示録 4 章 6 節](#), [4 章 8 節](#); [エゼキエル 1 章 18 節](#); [10 章 12 節](#))。悪魔の反乱以前は、ただ一人のケルブ(サタン)がいて、神と被造物である天使との関係を表し、対型の「主の天使」、すなわち受肉前の姿をしたイエス・キリストの型として立っていたのです。⁴⁰ 悪魔の反逆とサタンがこの特権的な位置から取り除かれた後、ケルブの象徴は変化し、悪魔の持っていた地位に置き換えられた四つの生き物は、人類の歴史の四つの時代において、神と人間の間での神の仲介者としての役割における神人イエス・キリストを表しています(『悪魔の反逆』第5部 II.4「人類史の四つの時代」を参照)。

-雄牛の顔(異邦人の時代)は、苦難のしもべであるキリストの姿です。雄牛は重荷を負うだけでなく(キリストが私たちの罪を負われたように)、最も尊重される犠牲の動物であり、旧約聖書の時代においてキリストが私たちに代わって約束された仕事を象徴的に表すものとしてその血が流されました([レビ 1 章 5 節](#)~)。

-ライオンの顔(ユダヤ時代)は、約束のメシアであるキリストの姿です。ライオンはユダ族の象徴であり([黙示録 5 章 5 節](#); [創世記 49 章 9-12 節](#) 参照)、旧約聖書全体を通してメシア的意味合いを持っています([民数記 23 章 24 節](#), [24 章 9 節](#) 参照)。メシアが来られたイスラエルの世代は、ライオン(復讐する戦士としてのメシア)を受け入れる準備ができていたが、雄牛(自己犠牲するしもべとしてのメシア)にはつまずきました。

-人の顔(教会時代)は、受肉した目に見える救い主としてのキリストの姿です。彼は人の子([マタイ 9 章 6 節](#); [ヨハネ 9 章 35 節](#))であり、罪を除いては、あらゆる点で真の人間であり、典型的な人間([ヘブル 2 章 14 節](#)と[ヘブル 4 章 15 節](#))、最後のアダム([第一コリント 15 章 45 節](#))です。教会は、すべての信じるユダヤ人と異邦人で構成され、こ

KB、BDB 辞書の項目を参照。

³⁹ ヘブル語の語源 セラフ seraph、שרף「燃える」から。「悪魔の反乱：患難の背景：第1部「サタンの反乱と墮落」III.i 項「ケルビム」参照。

⁴⁰ すなわち、クリストファニー、すなわちイエス・キリストの受肉前の顕現。聖書の基本：第1部「神学：神についての研究」の II.C.3 節「旧約聖書におけるキリストの出現」をご覧ください。

の地上における主の体であり、まだ栄光を与えられていません。

-鷲の顔(千年王国)は、復活して高められたキリストと戦いに勝利したキリストを表しています。十字架での勝利のために父から栄光を受け([エペソ 1 章 19 節後半-23 節](#))、復活と昇天の後、再臨の日まで父なる神の右に座しています(詩篇 110 篇)。その時(再臨)、聖書に記されているすべてのメシア的預言を成就し、千年の間、栄光のうちに世界を支配されます([エペソ 3 章 10-12 節](#); [コロサイ 1 章 20 節](#))。厳粛さと畏敬の念の意味合いを持つ([申命記 28 章 49 節](#); [エレミヤ 48 章 40 節](#), [49 章 22 節](#); [エゼキエル 17 章 3 節](#), [17 章 7 節](#); [ダニエル 7 章 4 節](#); [ホセア 8 章 1 節](#); [ハバクク 1 章 8 節](#))鷲は、キリストの威厳と畏敬の念を起こさせる二重の勝利の象徴であり、最初は十字架で(それに伴う復活、昇天、父の右の座につくこと)、最終的には再臨で([マタイ 24 章 28 節](#); [ルカ 17 章 37 節](#); [黙示録 1 章 12-16 節](#)の栄光のキリストの絵と比較して)、適切なものである。

人間の特徴の中で、顔は最も印象的で表現力が豊かであるため、上記のような象徴的な表現に最も効果的な手段です。ケルビムの体は人間に似ていますが([エゼキエル 1 章 5 節](#))、四つの顔はユニークで、先に述べた主の地上での働きの様々な側面を象徴しています。このように、ケルビムの顔は自分自身の栄光ではなく、神の子の栄光を映し出しています。ちょうど、キリストが命じたとおりに歩むとき、世界は神のしもべである私たちの中にキリストの顔を見られるようになるのと同じです([第二コリント 3 章 18 節](#); [マタイ 16 章 24 節](#); [ヨハネ 13 章 15 節](#); [第一コリント 11 章 1 節](#); [第二コリント 2 章 15 節](#); [ガラテヤ 4 章 19 節](#); [エペソ 5 章 1 節](#); [第一テサロニケ 1 章 6 節](#); [第一ペテロ 2 章 21 節](#)を参照)。

[黙示録 4 章 7 節](#)に示されたケルブの順序(獅子-牛-人-鷲)は次のような意味があります:

- 歴史的なイスラエルの時代の象徴が最初に置かれます。
- 来たるべきイスラエルの王国の象徴が最後に置かれます。
- この二つの象徴は、主に異邦人の時代の二つの象徴を挟んでおり、
- その中に、異邦人の時代の象徴が最初に置かれます。
- (異邦人がイスラエルに接ぎ木される)教会時代の象徴は、その隣に置かれていません。
- このようにイスラエルと王国イスラエルは、異邦人と奥義である異邦人を囲んでいます([エペソ 3 章 6 節](#))。

このようにイスラエルが異邦人を囲み、異邦人がイスラエルを満たすという象徴は、強力かつ適切です。なぜなら、これらの四つの時代とそれに対応するケルブの顔が表すキリストは、あらゆる面ですべてを満たし、完成される方だからです([エペソ 1 章 23 節](#); [エペソ 1 章 9-10 節](#)参照)⁴¹。

聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな： このくり返しは、イザヤ書 6 章 3 節に見られるものと同じです(ギリシャ語の「聖なる」ハギオス hagios[ἅγιος]は、ヘブル語の「聖なる」タドーシュ qadosh[קדוש]の正確な対応語です)。ストロペ(詩の節)の構造も両方で類似しています。

「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、
万軍の主、
その栄光は全地に満つ」。
(イザヤ 6章3後半)

「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、
全能者にして主なる神。
昔いまし、今いまし、やがてきたるべき者」。
(黙示録 4章8節後半)

「全能の神」という表現は、ヘブル語の「万軍の主」に相当するギリシャ語です(七十人訳にも頻繁に登場します)。したがって、このストロペの 3 行目だけが大きく異なっています。この 3 行目、『黙示録』からの引用では、神の永遠性が強調されているだけでなく、神の差し迫った降臨、つまり聖書の最後の書においてのみ完全に明らかにされる現実も強調されています。黙示録の最後の二つの章では、キリストの千年王国支配の後、御父も地上に戻られ、神は永遠に「すべてのものにあってすべて」となることが明らかにされているからです([第一コリント 15 章 28 節](#); [黙示録 21 章 2-8 節](#), [22 章 1-5 節](#))。このように、神の完全な勝利と万物の完全な回復が、ケルビムによって神の御前で絶えず宣言されています⁴²。

⁴¹ 「悪魔の反乱-- 艱難時代の背景」: 第 5 部「裁き、回復、代替わり」の II.4 項「人類史の 4 つの時代」を参照。

⁴² 「悪魔の反乱」: 艱難時代の背景: 第 5 部「審判、回復、置き換え」、IV.3.c 項「置き換え III: 父の到来」参照。

＜黙示録 4 章＞[8 節](#)のギリシャ語では、四つのケルブがこれらの言葉を「言っている
＜叫んでいた-口語訳＞」とされていますが、音楽形式である可能性も排除できません。
[黙示録 5 章 9](#) と [15 章 3 節](#)では、同じ形式が歌と一緒に使われており、この言葉が詩
や歌の形式であることから、私たちは「聖なる、聖なる、聖なる」を神への賛美歌として
みなすこともできます([黙示録 5 章 8 節](#), [5 章 14 節](#), [7 章 11-12 節](#), [19 章 4 節](#)を参照
してください)。例えば、最初のケルブであったサタンは、壮大な音楽装置([エゼキエル](#)
[28 章 13 節](#)の「タンバリンと笛」)を備えていました⁴³。いずれにしても、イザヤ書でケル
ブがこの歌を歌ったとき、神殿の門柱と敷居は揺れ、神殿は煙で充満したこと([イザヤ](#)
[6 章 4 節](#))からも、この「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな」の宣言が本当に印象的
なものであることは確かです。

ヨハネは、このケルビムの音楽による礼拝を、「御座にいまし、かつ、世々限りなく
生きておられるかたに、栄光とほまれとを帰し、また、感謝をささげている」と表現
しています。この句において私たちは、神を礼拝することの完璧な定義を見つけること
ができます。つまり、神の栄光を認め、神にふさわしい誉れを与え、神が誰であり、何
をしてくださったかについて感謝しているのです。また、このくり返しが音楽的な形で伝
えられているにもかかわらず、ヨハネがそのメロディーを再現するどころか、特徴づけて
さえいないことも興味深く、また重要な点です。この事実は、本当に大切なのは神の言
葉であることを、私たちにはっきりと思い起こさせるものです。私たちの持つ真理の言
葉は、私たちが所有する最も強力な重要なものであり、どんなに刺激的で崇高な伴奏
も、その比ではありません([詩篇 138 篇 2 節](#)後半[ヘブル語]と、[ヘブル 4 章 12 節](#)も参
照)。その燃えるような体、三重の翼、驚くべき表現力と象徴的な顔を持つ四つのケル
ブは、生ける神の御座の前でこれらの言葉を歌いながら、まさしく印象的な光景を醸し
出しています。

「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、
全能者にして主なる神。
昔いまし、今いまし、やがてきたるべき者」。
(黙示録 4章8節後半)

二十四人の長老とその礼拝：

(9)これらの生き物が、御座にいまし、かつ、世々限りなく生きておられる

⁴³ 「悪魔の反乱」艱難期の背景：第 1 部「サタンの反乱と墮落」III.g 項「サタンの初めの状態：タンバリンと笛」参照

かたに、栄光とほまれとを帰し、また、感謝をささげている時、(10)二十四人の長老は、御座にいますかたのみまえにひれ伏し、世々限りなく生きておられるかたを拝み、彼らの冠を御座のまえに、投げ出して言った、(黙示録 4章9-10節)

先に見たように、これらの長老は天使の一族の高位のリーダーであり、彼らの冠と王座はその地位と功績を示しています⁴⁴。これらの 24 人の長老の礼拝は、このケルビムの新しい礼拝と完全に一致しています(つまり、ヨハネがここで見た預言者的な観点から、艱難期とその始まりである終末の時代が始まろうとしている今、父の再臨が差し迫っていることを反映するために、ストロペの三行目を変更したのです)。黙示録 4 章 10 節の釈義でしばしば見落とされるのは、「みまえにひれ伏す」、「拝む」、「冠を投げ出す」ことがギリシャ語では未来時制で表現されているという事実です。⁴⁵ ヨハネがここで未来形を用いたのは、私たちが見ているものがケルビムから出る絶え間ない賛美の行動の場面に対してではなく、神の御計画の最終段階の開始を祝うために 24 人の長老が特別な礼拝をしている、これから始まろうとしているイエス・キリストの出現の場面に対してであることを明らかにするためです。ですから、この聖句は神が人類の歴史に直接、目に見える形で介入する前の、選民の「艱難期前の集会」での天使の長老たちの最初の集会を描写していると考えerべきでしょう。このことは、長老たちが表明した礼拝の内容からも明らかです。この礼拝は、(艱難期の開始を通して)地球に対する神の直接的支配の再主張と、(イエス・キリストの再臨に始まる)歴史の最終局面をもたらそうとしている創造主としての全能の主の権利を強調しているのです⁴⁶。

「われらの主なる神よ、あなたこそは、栄光とほまれと力とを**受ける**[直訳「取る」]にふさわしいかた。あなたは万物を造られました。御旨によって、万物は存在し、また造られたのであります」。(黙示録 4章11節)

⁴⁴ 上記の「長老たち」の項に加えて、「悪魔の反乱」参照：艱難の背景 第 4 部「サタンの世界システム、過去、現在、未来」の III.3.b.2 項「位の称号：長老」。

⁴⁵ もし、この時点から文字通りの未来(すなわち、艱難時代の始まりにのみ起こり始める)を意味するのでなければ、これはギリシャ語(新約聖書を含む)において、まったく他に例を見ない未来時制の用法となります。これらの未来をヘブル語の不完了体に影響されたものとして説明しようとする試み(Moulton, Grammar of the Greek New Testament [Edinburgh 1963] v.3, p.86 など)は、説得力に欠けるだけでなく、問題を解決することもできません。

⁴⁶ つまり、教会時代の終わりです。悪魔の反乱シリーズ第 5 部「審判、回復、置き換え」の II.4 項「人類史の 4 つの時代」をご覧ください。

概要：第 4 章は間違いなく、私たちに畏敬の念と印象的な天国の光景を描き出しています。サファイアの御座、ガラスの海、燃えるランプ、燃える火のケルビムと高位の長老たち、そしてその真ん中におられる栄光の虹をまとった父なる神の栄光の御姿は、(例えばヨハネのように)神から与えられた恍惚状態にある人以外のどんな人間も圧倒してしまう光景です！私たちは、この栄光ある光景が現実のものであり、私たちが住む現実の世界よりももっと現実的なものであることを、少し時間をとって、思いに描くべきです。この光景は、神と御子に信頼を置くすべての人に、来たらんとする祝福された驚異の一瞥を与えてくれるものだからです。

Ⅱ. 小羊と巻物 黙示録 5 章 1-14 節

黙示録 5 章 1～14 節

(1) わたしはまた、御座にいますかたの右の手に、巻物があるのを見た。その内側にも外側にも字が書いてあって、七つの封印で封じてあった。(2) また、ひとりの強い御使が、大声で、「その巻物を開き、封印をとくのにふさわしい者は、だれか」と呼ばわっているのを見た。(3) しかし、天にも地にも地の下にも、この巻物を開いて、それを見ることのできる者は、ひとりもいなかった。(4) 巻物を開いてそれを見るのにふさわしい者が見当らないので、わたしは激しく泣いていた。(5) すると、長老のひとりがわたしに言った、「泣くな。見よ、ユダ族のしし、ダビデの若枝であるかたが、勝利を得たので、その巻物を開き七つの封印を解くことができる」。(6) わたしはまた、御座と四つの生き物との間、長老たちの間に、ほふられたとみえる小羊が立っているのを見た。それに七つの角と七つの目とがあった。これらの目は、全世界につかわされた、神の七つの霊である。(7) 小羊は進み出て、御座にいますかたの右の手から、巻物を受けとった。(8) 巻物を受けとった時、四つの生き物と二十四人の長老とは、おのおの、立琴と、香の満ちている金の鉢とを手に持って、小羊の前にひれ伏した。この香は聖徒の祈である。(9) 彼らは新しい歌を歌って言った、「あなたこそは、その巻物を受けとり、封印を解くにふさわしいかたであります。あなたはほふられ、その血によって、神のために、あらゆる部族、国語、民族、国民の中から人々をあがない、(10) わたしたちの神のために、彼らを御国の民とし、祭司となさいました。彼らは地上を支配するに至るでしょう」。(11) さらに見ていると、御座と生き物と[二十四人の]長老たちとのまわりに、多くの御使たちの声が上がるのを聞いた。その数は万の幾万倍、千の幾千倍もあって、(12) 大声で叫

んでいた、「ほふられた小羊こそは、力と、富と、知恵と、勢いと、ほまれと、栄光と、さんびとを受けるにふさわしい」。(13)またわたしは、天と地、地の下と海の中にあるすべての造られたもの、そして、それらの中にあるすべてのものの言う声を聞いた、「御座にいますかたと小羊とに、さんびと、ほまれと、栄光と、権力とが、世々限りなくあるように」。(14)四つの生き物はアメンと唱え、[二十四人の]長老たちはひれ伏して礼拝した。

ヨハネは4章で、神の天の神殿での輝かしい光景を詳しく説明しました。第5章は、艱難期への天の前奏曲、つまり、メシアであられる方、私たちの主イエス・キリストによる、地上の神の直接の支配が艱難期を通して再び確立されるプロセスの始まりです。この黙示録はイエス・キリストについて(すなわち、世に対して主の「現れる」のを承認し、表明し、そしてもたらすもの)であることを忘れてはいけません。ですから、この天の情景の描写において、最後に主が紹介されるのは、これから起ころうとしているすべてのこと、すなわち、主の再臨に先立つ出来事を強調するため、ふさわしいことなのです。

メシアが全地上の権力を握る前段階として、「本」または巻物を開くことによって艱難期が開始されるという上記の記述は、ダニエル書7章にある同様の記述(ダニエル書の四獣の幻の後であり、最後の獣は反キリストの王国を表す)と非常によく類似しています。

(9)わたしが見ていると、もろもろのみ座が設けられて、日の老いたる者(すなわち、父)が座しておられた。その衣は雪のように白く、頭の毛は混じりもののない羊の毛のようであった。そのみ座は火の炎であり、その車輪は燃える火であった。(10)彼の前から、ひと筋の火の流れが出てきた。彼に仕える者は千々、彼の前にはべる者は万々、審判を行う者はその席に着き、かずかずの書き物が開かれた。(11)わたしは、その角[反キリスト、8節参照]の語る大いなる言葉の音がするので見ていたが、わたしが見ている間にその獣は殺され、そのからだはそこなわれて、燃える火に投げ入れられた。(12)その他の獣はその主権を奪われたが、その命は、時と季節の来るまで延ばされた。(13)わたしはまた夜の幻のうちに見ていると、見よ、人の子のような者が、天の雲に乗ってきて、日の老いたる者(すなわち、父)のもとに来ると、その前に導かれた。(14)彼に主権と光栄と国とを賜い、諸民、諸族、諸国語の者を彼に仕えさせた。その主権は永遠の主権であって、なくなることなく、その国は滅びることがない。(ダニエル書7章9-14節)

この箇所では、ダニエルが艱難時代の終わりに焦点を当てているにもかかわらず、ヨハネの黙示録の第5章(ここでは、その開始直前の場面)と多くの重要な類似点が見出されます。

1. 父なる神様の出現も同じように描写されています。どちらの箇所でも、父なる神はすべての人の支配者、審判者としての立場で、「御(み)座に着いて」おられます。このことは、両節の出来事が、司法的あるいは王権的な宣言であることを強調しています。歴史に対する神の支配と対処が明確に示されています。
2. 天使の宮廷も同じように描写され、その数え切れないほどの数がほぼ同じように表現されています。両方の箇所に複数の「王座」が言及されていますが、ダニエル書の箇所では、この特別な機会に「設置」されていることから、上で述べたように、天使の長老たちの会議は継続的な状況ではなく、艱難期とそれに続く再臨の特別な前段階であることが分かります。
3. 出来事の推移も比較できます。どちらの場合も、書かれた記録が重要な位置を占め、その書物や巻物には、付随する裁きの根拠となる神の決定が書かれています(大洪水に先立つ類似の状況:[詩篇 29 篇 10 節](#)と比較してください)。メシアが権力を握る前の裁きは、迫害された神の民の正当性を擁護するために行われるという事実も平行しています([ダニエル 7 章 22 節](#)と[黙示録 15 章 1-2 節](#)を比較してください)。
4. 御子の姿と表現が似ています(ただし、ダニエルの幻には、ヨハネの幻の時点ですでに歴史的に起こっていた昇天と、サタンに対する裁きに伴う火の池が混在しています)。
5. 最終的には、メシアに地上の支配権が与えられるという点で、両者の結末は同じです。

この二つの聖句の類似点の重要な部分は(もちろん、ダニエル書と黙示録の間に見られる類似点はそれだけではありませんが)、両書において、地上とそれを支配する悪の勢力に対する神の摂理的・司法的裁きの過程が、メシアの帰還とその普遍的支配の確立に不可欠な前段階・前提条件になっている点です。簡単に言えば、黙示録とダニエル書は、艱難期が「イエス・キリストの現れ」の一部であり、栄光の王国の不思議な誕生に先立つ裁きの「産みの痛み」であることを明確に教えています。

(4)そこでイエスは答えて言われた、「人に惑わされないように気をつけな

さい。(5)多くの者がわたしの名を名のって現れ、自分がキリストだと言って、多くの人を惑わすであろう。(6)また、戦争と戦争のうわさを聞くであろう。注意していなさい、(これらの知らせによって)あわててはいけません。それは起らねばならないが、まだ(艱難期の)終りではない。(7)民は民に、国は国に敵対して立ち上がるであろう(すなわち、南部同盟に対する北部連合)。またあちこちに、ききんが起り、また地震があるであろう。(8)しかし、すべてこれらは**産みの苦しみの初め**である。(マタイ 24 章 4-8 節)

巻物：黙示録が書かれた当時、本はまだ発明されていなかった⁴⁷、ここで「本」(ギリシャ語でビブリオン、βιβλίον、「聖書」の語源)という言葉は、実際には巻物または筒状に巻いた物です。この巻物は黙示録を表し、その内側と外側の両方に文字が書かれています。これは艱難期の出来事の激しさを示しています([エゼキエル 2 章 9-10 節](#)を参照)。この点で、艱難期が二つの部分に分けられ、そのうちの第二の部分(裏面<七年間の艱難期の最後の三年半>)がより困難であることを象徴していると考えるのは正しいかも知れません(パピルス裏面の生地の繊維の流れ目は筆記者の手の動きと直角に走るため、常に書くのが困難でした)。ここで非常に重要なのは、本や巻物が読まれないようにする七つの封印です。地上の文書では、このような蠟(ろう)の封印には、文書の著者の印章が押されており、それによって文書の真正性が確認されると同時に、不正な改ざんを防ぐことができました。もし、その文書が遺言書などの法的な遺産の贈与であれば、この封印が正当な権威ある方法で解かれないと、何もできないのです。私たちの救い主である小羊は、その死によってもたらされた勝利によって、適切な時期にこれらの封印を解く権利を獲得し([ダニエル 12 章 4 節](#), [12 章 9 節](#))、この命令の内容、すなわち、すべての敵が「御足の台」となる過程である艱難期という中継イベントを通して御国の確立を実現させるのです([詩篇 110 篇 1 節](#))。

この命令が実行される前に開かれなければならない七つの封印については、二つの象徴があり、個別的に一つひとつの封印が解かれることによって解放される個別の事象を表し、集散的にはそれを抑制している力、すなわち聖霊なる神を表しています。前者(封印が解かれることによる「効力」)については第Ⅳ項で、後者(聖霊の抑制の働き)については第Ⅲ項で考察することになります。

ヨハネの反応：ヨハネは、封印された書物が開かれなければ、永遠の救いも現世の

⁴⁷ 現在、私たちに馴染みの深い本の形の写本は、聖典の完全なコピーを一冊で提供するために、キリスト教徒によって発明された(あるいは、少なくとも注目されるようになった)可能性は十分にあります。Peter Katz, "The Early Christians' use of Codices instead of rolls", JTS 44 (1945) 63-65.

解放もないことを知り、涙を流しました。しかし、主イエスはその本を開くために必要な代価、つまり全世界のために死んで霊の命を支払われたので、泣かないようにと言われます-それが、主イエスへの信仰による私たちの赦しと永遠の命の基礎となるのです。

勝利の子羊：これらの天の驚異、人間の耐久力や自制を超えるほど強烈な栄光を目の前にしたヨハネの興奮を、私たちはほとんど想像することができません。(ダニエル 8 章 27 節, 10 章 7-11 節と黙示録 19 章 10 節, 22 章 8-9 節を比較してください)。ヨハネとすべての信者が待ち望む唯一の最終的な栄光ある光景は、神の小羊、すなわち、勝利し、復活した主イエスが御父の右に立っているのを見ることです。

私たちの主は、ここで「ユダ族の獅子」、「ダビデの根」、「殺された小羊」と表現されています。主が誰であるか、そして私たちのために何をしてくださったかを象徴する重要な称号です。最初の二つの称号は、彼がまがいもなく王族であり、例外的な血統を持つ者であることを強調し(それぞれ創世記 49 章 9-10 節とイザヤ 11 章 1 節を比較)、それによって、彼が間もなく地上に戻り、来たるべき王国を引き継がれて、神の民イスラエルに対するすべての神の約束が成就することを予見させるものです。しかし、ここで最も強調されているのは「小羊」という称号と描写です。この称号が繰り返され(この章で 4 回)、私たちの主イエス・キリストが小羊として現れ、しかも「ほふられた」ものとして描写されていることから、私たちのために犠牲の死を遂げて、疑いもなく世界を治める権利を勝ち取られたことが象徴的に表現されています。

イエスは「世の罪を取り除く小羊」(ヨハネ 1 章 29 節, 1 章 36 節; 第一ペテロ 1 章 19 節; イザヤ 53 章 7 節 参照)であるからです。旧約聖書のすべての犠牲が予表するお方ですから、「小羊」は、主について、また主の救いの業、主が私たちと全世界のために捧げた命についての完璧な描写です。実際、旧約聖書のすべての動物の犠牲は、私たちの主の十字架上の死を語っています。シミや傷のない小羊は主の完全な人柄を表し、犠牲として流された血は主の完全な業(私たちが永遠の命を持つために、不正な者のために正しい者が十字架上で死ぬことを望まれたこと)を表しています。

ですから、私たちがイエスをこの世に「現す」こと、イエスの栄光の帰還と世界の支配者としての戴冠式(とそれに先立つ激変の出来事)についてこの書を学ぶにあたり、この支配の権利が最大の犠牲を払って勝ち取られたことを覚えることが重要です。イエスは真の人間としてこの世に生まれ、誰も直面したことのないような激しい反対勢力の中で全き道を歩まれ、悪から世界を取り戻し、悪魔の死の支配から私たちを勝ち取るために、私たちの代わりに苦しみ、死ななければなりません(コロサイ 1 章 13 節; ヘブル 2 章 14-15 節; 第一ヨハネ 3 章 8 節)。キリストの復活と昇天の後、父の右の座

につかれたことは、キリストの勝利の完全性を疑いもなく示し([コロサイ 2 章 13-15 節](#); [エペソ 4 章 7-10 節](#)も参照)、その勝利に対して父が承認されたことを示します([コロサイ 1 章 19 節](#); 以下の節も参照のこと: [イザヤ 42 章 1 節](#), [49 章 6 節](#); [マタイ 3 章 17 節](#), [17 章 5 節](#)参照)。そしてその勝利の結果、世界の支配者として正当な地位を得るために、主が戻ってこられることが差し迫っているのです([詩篇 110 篇 1 節](#); [マタイ 28 章 18 節](#); [ヨハネ 17 章 2 節](#); [ローマ 16 章 20 節](#); [第一テサロニケ 4 章 16-17 節](#); [ヘブル 1 章 3-4 節](#), [2 章 8-9 節](#))。)

(11)こうして、すべての祭司は立って日ごとに儀式を行い、たびたび同じようないけにえをささげるが、それらは決して罪を除き去ることはできない。(12)しかるに、キリストは多くの罪のために一つの永遠のいけにえをささげた後、神の右に座し、(13)それから、敵をその足台とするときまで、待っておられる。(ヘブル 10 章 11-13 節)

したがって、イエスはここで「ほふられた」小羊(犠牲の象徴)として登場しますが、まだ生きているという事実は、イエスの復活の現実を証明し、同時に罪と死に対するイエスの勝利を力強くもの語っています([第一コリント 15 章 54-57 節](#); [イザヤ 25 章 7-9 節](#); [ホセア 13 章 14 節](#); [マタイ 12 章 20 節](#); [黙示録 1 章 18 節](#)を参照)。さらに、小羊に象徴される七つの角と七つの目は、小羊の来たるべき支配の強力な象徴です。角は支配のための力の完全性を意味し([申命記 33 章 17 節](#); [詩篇 18 篇 2 節](#), [112 篇 9 節](#); [ゼカリヤ 1 章 18 節](#) 参照)、七つの目は支配のための聖霊による力の完全性を意味します([イザヤ 11 章 1-3 節](#), [42 章 1-4 節](#); [ゼカリヤ 4 章 1-10 節](#); [ヨハネ 3 章 34 節](#)参照)。ですから、これはヨハネが見ている犠牲の小羊であるだけでなく、(普遍的な罪と死に基づく)サタンの世界支配の力をすでに破壊した勝利の小羊でもあります。そして、その世界支配を悪魔から永久に取り去ろうとしているのです([ヘブル 2 章 14-15 節](#); [ルカ 10 章 18 節](#); [使徒行伝 26 章 18 節](#); [ローマ 16 章 20 節](#)参照)。

彼らは小羊に戦いをいどんでくるが、小羊は、主の主、王の王であるから、彼らにうち勝つ。また、小羊と共にいる召された、選ばれた、忠実な者たちも、勝利を得る」。(黙示録 17章14節)

第七の御使が、ラッパを吹き鳴らした。すると、大きな声々が天に起って言った、「この世の国は、[今]われらの主とそのキリストとの国となった。主は世々限りなく支配なさるであろう」。(黙示録 11章15節)

この象徴としての小羊の姿が用いられていること([黙示録 1 章 12-16 節](#))に見られるキ

リストの真の姿と対照的)は、預言的な旧約聖書の箇所にも(例えば、[ダニエル 4 章 9-18 節](#), [7 章 2-14 節](#), [8 章 1-12 節](#); [ゼカリヤ 1 章 18-21 節](#), [5 章 5-11 節](#))よく使われる手法で、黙示録の中でもそうです(例えば、イスラエルを表す女:[黙示録 12 章 1-6 節](#); 反キリストを表す獣:[黙示録 13 章 1-8 節](#); バビロンを象徴する淫婦:[黙示録 17 章 1-8 節](#))。キリストを象徴する小羊の絵は、御子の犠牲、御父に受け入れられること、そしてこの犠牲と十字架上の救いの業によって、巻物を取り、世界の支配者となるにふさわしいお方であることを、いっそう効果的に印象づけるものです。

また、小羊が御座の中央に「立っている」と言われていることも重要です。主のこの姿勢は、艱難の開始が差し迫っていることを表しています。父なる神が、御国の準備のための最後の審判の期間が始まるまで「わたしの右に座すように」と言われたにもかかわらず、キリストが今立ち上がったのは、悪者とその手下すべてを制圧するプロセスが始まろうとしていることを示す決定的なしるしなのです。

ダビデの歌 主はわが主に言われる、「わたしがあなたのもろもろの敵をあなたの足台とする[とし始める]まで、わたしの右に座せよ」と。⁴⁸(詩篇 110 篇 1 節)

(19)だから、自分の罪をぬぐい去っていただくために、悔い改めて本心に立ちかえりなさい。(20)それは、主のみ前から慰めの時がきて、あなたがたのためにあらかじめ定めてあったキリスト[メシア]なるイエスを、神がつかわして下さるためである。(21)このイエスは、神が聖なる預言者たちの口をとおして、昔から預言しておられた万物更新の時まで、天にとどめておかれねばならなかった(直訳では:「天が受けなければならぬ方であった」)。(使徒行伝 3 章 19-21 節)

私たちの主の十字架での勝利は、疑問の余地のない権威を確立し、その最高の権威は父の右の座で確認されました([マタイ 28 章 18 節](#); [ヨハネ 14 章 2-3 節](#); [エペソ 1 章 20-23 節](#); [ピリピ 2 章 9-11 節](#); [コロサイ 1 章 13-20 節](#), [2 章 15 節](#); [ヘブル 2 章 14-15 節](#); [黙示録 1 章 18 節](#))。キリストは着座され([使徒行伝 2 章 32-36 節](#), [5 章 30-31 節](#); [ローマ 8 章 34 節](#); [ヘブル 1 章 3 節](#), [12 章 2 節](#))、囚人は解放され([詩篇 146 篇 7](#)

⁴⁸ ヘブル語の不完了体と前置詞 'adh, ʾw の組み合わせは、この場合、事前の完了を要求するのではなく、プロセスの開始を可能にします(すなわち、「あなたの敵があなたの足の台となるまで座っていないさい」)。メシアは、すべてが解決するまで天国で受動的に待つように言われているのではありません。ですから、キリストが艱難時代に直接参加されること(最も顕著なのは、ハルマゲドンで反キリストの軍隊を個人的に滅ぼされること)は、この箇所と何ら矛盾するものではありません。

[節; イザヤ 14 章 17 節, 42 章 7 節, 49 章 9 節, 61 章 1 節; マタイ 12 章 29 節; 第一ペテロ 3 章 22 節](#))、賜物が与えられました([詩篇 68 篇 18 節 ; ヨハネ 16 章 7 節 ; エペソ 4 章 8 節](#))。もはや小羊が巻物を取り、印を解くことだけが残されています。これによって悪魔の地球の支配の最終期間が始まり、そして、すべてのクリスチャンが待ち望んでいる祝福の出来事である栄光の王の再臨([黙示録 17 章 14 節](#))で劇的な終わりを迎えるのです([マタイ 6 章 10 節; 第一コリント 1 章 7-8 節, 16 章 22 節; 第一テサロニケ 1 章 10 節; テトス 2 章 13 節; ヤコブ 5 章 8 節](#))。

キリストが御父の右手(主が今座っておられる側)から巻物を取るのも、ヨハネに見ることが許され、私たちも祝福に与り読むことができる未来の出来事です。この出来事もまた、艱難期の始まる直前に起こります(この文章を書いている時点ではまだ未来の出来事です)。小羊がよみがえり、巻物を手にしたら、あとはこの黙示録の巻物の神勅を開くだけであり、これにより艱難期の出来事を始動させるのです。

新しい歌：

「新しい」歌とは、特別なときに作られる賛美と礼拝の歌です。([詩篇 33 篇 3 節; 40 篇 3 節; 96 篇 1 節, 98 篇 1 節, 144 篇 9 節, 149 篇 1 節; イザヤ 42 章 10 節](#)) 獣によって殉教死することになった 14 万 4 千人のユダヤ人の証人の賛歌([黙示録 14 章 3 節](#))と同様に、この歌も特別なときを記念する歌なのです。天上の聴衆が期待して見守る中、天使の最高位である四つのケルブと二十四人の長老が、メシアの王国の到来を記念して、特別な就任の賛美歌を歌い始めます。

- 1) 天使の支配者たちの合唱： <新しい歌の> 第一節はケルビムと 24 人の長老たちだけで歌われます。第一節目は、小羊が犠牲の死によって(墮天使に代わって置き換えられる)教会を贖ったので、歴史の最終局面を開始する(巻物を開く)価値があることを強調しています⁴⁹。

「あなたこそは、その巻物を受けとり、封印を解くにふさわしいかたであります。あなたはほふられ、その血によって、神のために、あらゆる部族、国語、民族、国民の中から人々をあがない、わたしたちの神のために、彼らを御国の民とし、祭司となさいました。彼らは地上を支配するに至るでしょう」。

⁴⁹ 「悪魔の反乱：艱難期の序章：第 3 部 人間の目的、創造と墮落」、第 1.2 項「サタンとその天使に取って代わるために創造された人間」を参照ください。

2) 聖天使の合唱: 第二節は、(ケルビムと長老を除く)他の選ばれた天使たちによって歌われます。第二節目では、小羊の価値と巻物が開かれた(つまり終末の時代が始まった)ことの効力、つまり主の全世界に対する権威とそれに伴うすべての栄誉が強調されています⁵⁰。

「ほふられた小羊こそは、力と、富と、知恵と、勢いと、ほまれと、栄光と、さんびとを受けるにふさわしい」。

3) 頌栄歌(しょうえいか):この「新しい歌」の最後の部分(天使の聖歌隊による演奏)は特に頌栄の形で、父と子への賛美を歌っています。

「御座にいますかたと小羊とに、さんびと、ほまれと、栄光と、権力とが、世々限りなくあるように」。

この賛美歌に続いて、四つの生き物が「アーメン！」と言いながら、これらの事実の真実と祝福を最終的に宣言します。(ヘブル語で「真に」「真実に」を意味する言葉)。そして、長老たちはひれ伏し、御父と御子を礼拝します。この天上の賛美の詩篇は、激しい艱難期に始まり、ハルマゲドンの脱穀場を火で清め、千年王国の支配が終わりを迎える歴史の終わりに、すべての敵を焼き尽くすという、歴史の最終段階を始めるのに小羊がふさわしいことを宣言しています。この裁きの全ては正しく、主の十字架の勝利に裏付けられています。主はあなたや私のために火をくぐるような試練を通過されたのです:

(49)わたしは、火を地上に投じるためにきたのだ。火がすでに燃えていたならと、わたしはどんなに願っていることか。(50)しかし、わたしには受けねばならないバプテスマがある。そして、それを受けてしまうまでは、わたしはどんなにか苦しい思いをすることであろう。(ルカ 12 章 49-50 節)

⁵⁰ ここでは、最良のギリシア語テキストの訳がなされています。ほとんどの翻訳では、(あまり権威のない写本に基づいて)天地創造を聖歌隊の役割と誤って位置づけています、しかし、実際には、被造物全体を、主が支配されようとしているものとして表現しているのです。

Ⅲ. 聖霊の抑制的な働き

七つの封印の解説を始める前に、まず聖霊の抑制の働きについて考える必要があります。なぜなら、七つの封印の象徴の中で最も重要なのはこの抑制の働きだからです。前述したように、蠟でできた封印は、遺言書や証書、公的な通信手段など、重要な封印文書の不正開封を防ぐための手段であり、また封印者の印章を押したものです。また、そのような文書を合法的に開封することは、必然的にその遺言や宣言、法令を発効させることを意味します。この巻物がイエス・キリストの黙示(この黙示は主の再臨で劇的な終わりを迎えますが、その前の艱難期のすべての出来事が記されています)であることを考えると、この巻物の封印は明らかに、神の良しとされる時が来るまで、最後の時代の開始を抑制することを象徴していることが分かります。なぜなら、封印が解かれると、その直後に終末が始まるからです(黙示録 6 章から 8 章に記述されていません)。

したがって、この七つの封印には、人類史上最も暗い時代の到来を、定められた時よりも前に起こるのを阻止する力が働いていることがわかるのです。このような抑制ができるのは神だけであり、この文脈と他の聖書箇所から、この七つの封印によって抑制の働きをするのは、まさに聖霊である神であることが明らかです。例えば、七つの霊([イザヤ 11 章 1-2 節](#); [黙示録 1 章 4 節](#), [3 章 1 節](#))、七つの燭台([ゼカリヤ 4 章 2 節](#); [黙示録 4 章 5 節](#))、七つの目([黙示録 5 章 6 節](#); [ゼカリヤ 3 章 9 節](#), [4 章 10 節](#)) など、七つの明らかに神のつながりを持つものが、聖霊を象徴的に示しているのです。これらすべての場合において、その働きは完全で、強力で、大部分は目に見えないものです。御霊の特徴と同じく、感じられますが、見えません([ヨハネ 3 章 8 節](#); [列王記上 19 章 11-12 節](#)参照)。⁵¹ 七つの霊が御霊における完全な神の力を、七つの燭台が御霊による完全な神よりの解き明かしを、七つの目が御霊による完全な神の監視を示唆しているように、七つの封印はこの場合、御霊を通して、終わりの時代の定められた時まで始まらないように抑える(また、それに関連する条件と行動を抑える)完全な神の抑制を表しています。この御霊の働きは、悪の主要な源である人間の心と悪魔の計画から生じる行き過ぎた行為に対して、神の裁きが下ることのないように、これら両方を抑制するのです。

1. これまでの抑制の働き: 聖書は、悪がすべての境界を越える(それによって自由、

⁵¹ 『聖書の基本』第 1 部の II.B.3 項「神学: 神についての研究: 神の計画における三位一体の役割」をご覧ください。

つまり神のために選択する機会を破壊する)のを阻止する聖霊の働きについて、いくつかの重要な先例を示しています。特に二つの事例が聖書に具体的に記述されており、そこから、悪を抑制する御霊の働きは、聖書に具体的に記されていない場合でも、広範囲で事実上包括的なものであると推測できます([創世記 11 章 6 節](#); [申命記 32 章 8 節](#); [ヨブ 12 章 23 節](#); [詩篇 74 篇 17 節](#); [エレミヤ 18 章 7-10 節](#); [使徒行伝 17 章 26-28 節](#)などの箇所)で暗示されている通り)。

(1)何よりも先に、神様は天と地を創造されました。(2)しかし、地は荒廃し、荒れ果て、闇が深淵の面に広がり、神の霊がその水の面を覆っていました。(英文直訳 創世記 1 章 1-2 節)

そこで主は言われた、「わたしの霊はながく人の中にとどまらない。彼は肉にすぎないのだ。しかし、彼の年は百二十年であろう」。(創世記 6 章 3 節)

上記の最初の例では、(悪魔の反逆に続いて、地球が再創造され、アダムとエバが造られる前に)荒廃した地球がさらに破壊されないように、御霊は悪魔の仕業を阻止しているのがわかります⁵²。上記の第二の引用では、その脅威が取り除かれるまで(すなわち、この悪魔の種を地表から滅ぼす大洪水が起こるまで)、聖霊の保護作用がサタンとその子分の半天使半人間の者どもを抑制して、真の人類を消滅させないようにすることが描写されています⁵³。

上記の二つのケースは、いずれも地上の問題に対する悪魔の直接的な干渉を抑止するために取り上げたものですが、同時に、人間の行動を抑制するために御霊が働いていることもわかります。この点で、聖霊の「拘束する」働きは「解き放つ」働きと硬貨の裏表のようなもので、後者では善なるものに力を与え、前者では悪なるものから力を奪うと考えられます([マタイ 16 章 19 節](#), [18 章 18 節](#); [ヨハネ 20 章 22-23 節](#); [使徒行伝 5 章 3 節](#), [5 章 9 節](#)を参照)。もし、善を強調し、悪を抑制するこの一般的で包括的な働きがなかったら、少なくとも私たちは今よりはるかに野蛮な世界に住んでいたことは明らかです(もし、御霊の「<悪の力を抑制して>不利な要素を取り除く働き」がなければ、人類が生き残ることさえできないかもしれません)。

⁵² 『サタンの反乱 艱難期の背景』第 2 部「創世記のギャップ:聖霊の抑制の働き」の II.4 項を参照。

⁵³ 『サタンの反乱 艱難期の序章』第 5 部「裁き、回復、置き換え」、第 III.1 項「洪水前の人間の純潔に対するサタンの攻撃(ネフィリム)」。

2. 不法の秘密：個人のレベルでも、聖霊は常に罪と悪を抑制するために活動してきました。それは個人の選択権を奪うということではなく、逆にその権利を維持するために働いてきたのです。このことは信者を、他者からだけでなく、自分自身への破滅的悪から守るという観点からも言えることです。前者の例としては、サウロとその部下がダビデに危害を加えるのを防いだこと([サムエル記上 19 章 20-24 節](#))、パウロとその仲間たちがアジアとビテニヤに入るのを防いで守られたこと([使徒行伝 16 章 6-7 節](#))などが挙げられます。この時代、聖霊がすべての信者に「証印<封印>を押して」おられることは、特に聖霊の働きの多くが守護的であることを示しています ([第二コリント 1 章 21-22 節](#); [エペソ 1 章 13-14 節](#); [エゼキエル 9 章 1-11 節](#); [ヨハネ 6 章 27 節](#); [第一ペテロ 1 章 1-2 節](#) 参照)。

神の聖霊を悲しませてはいけない。あなたがたは、あがないの日のために、聖霊の証印を受けたのである。(エペソ 4 章 30 節)

上記の聖句が示すように、聖霊の守護の働きは、力を与える働きと対をなしています。イエス・キリストを信じる者として、私たちは皆、聖霊を宿していることで祝福されています。この「印」は私たちを神の所有物として示し、キリストにある保護の幸いなしるしですが、同時に聖霊は私たちの中に働いて、クリスチャンの歩みとキリストの体へのすべての奉仕を強め、力づけ、支えてくださいます。私たちが神の所有物として印されていることに慰めを得ることができるように、(悪の手先が無許可で干渉しないよう警告する) 私たちもまた、御霊の導きに応答し、御霊に抵抗しないように特別な配慮をしなければなりません。この点で、聖霊の影響は、私たちが正しいことを行おうのを助けるだけでなく、間違ったことに抵抗するのも助けます(聖霊の抑制の働きの明確な例: [マタイ 12 章 31 節](#); [使徒行伝 5 章 1-11 節](#); [第一テサロニケ 5 章 19 節](#); [ヤコブ 4 章 5 節](#)を参照)。

なぜなら、肉(すなわち、人間の罪深い性質)の欲するところは御霊に反し、また御霊の欲するところは肉に反するからである。こうして、二つのものは互に相さからい、その結果、あなたがたは自分でしようと思うことを、することができないようになる。(ガラテヤ書 5 章 17 節)

これらの一般原則は、私たちが以前に学んだものです(読者は、二つ前の脚注に含まれる文献を参照してみてください)。しかし、聖霊の全般的な抑制の働きの中で、特にここで私たちに関係する二つの具体的な特徴は、無制限の「不法」を妨げることと、反キリストの到来を阻止することです。聖霊の抑制の働きは、いずれもサタンによる世

界の支配を阻止することに向けられています。前者は艱難期の前に悪魔が人間の生活を乱すのを制限し、後者はその将来の時期まで、サタンが選んだ世界支配の手段を世界の舞台に持ち込むのを阻止するものです。現在、世界が享受している御霊による抑制が取り除かれると、「不法状態」の激化と「不法の者」の到来という、この二つの恐ろしい出来事が起こることになります。小羊の啓示の書を閉じている七つの封印が解かれることは、この抑制の働きが取り除かれ、悪魔とその勢力(人間と悪魔の両方)が、預言された一連の艱難の出来事を始められることを意味します。この抑制の働きがなくなるまで、サタンは地上での最後の攻防(比類のない「無法」を特徴とする)を始めることも、究極の地上王国(「不法」の人による支配)を制定することもできません。このように、罪深い悪の行動が増加する傾向(地球がまだ経験したことのない範囲)と、世界史上最も罪深い悪の支配者が権力を握ることは、使徒パウロがこの二つを結びつけていることから分かるように、相互に密接に関連した出来事なのです。

(6)そして、あなたがたが知っているとおりに、彼が自分に定められた時になってから現れるように、いま彼[反キリストの到来]を阻止しているものがある。(7)不法(*anomia* アノミア)の秘密の力が、すでに働いているのである。ただそれは、いま阻止している者が取り除かれる時までのことである。(8)その時になると、不法の者(*anomos* アノモス)が現れる…(第二テサロニケ2章6節-8節前半)

上記の同族語(アノミア-アノモス)を使って、パウロはここで、私たちは今、すでに事実上経験している(しかし、七つの封印が解かれたときには無制限に溢れ出る)来たるべき不法の状態が、不法の反キリストの到来のための必要とされる前準備であり、必要条件であると明言しているのです。サタンがあらゆるレベル、あらゆる場所で人間社会に徐々に侵入しているのは、「すでに働いている」不法状態ですが、艱難期が始まって御霊の抑制が弱まるまでは(つまり、七つの封印が解かれるまでは)、反キリストの世界支配を実現するための熱狂的支持をもたらすことはできないのです。ヨハネは「反キリストの霊」について語るとき、艱難期において最高潮に達することになる現在の悪魔の動向について同様の説明をしています。そして、この時代において多くの「反キリスト」が活動しているという事実が、私たちが艱難期の入り口にいることを教えてくれているのです。

子供たちよ。今は終りの時である。あなたがたがかねて反キリストが来ると聞いていたように、今や多くの反キリストが現れてきた。それによって今が終りの時であることを知る。(第一ヨハネ 2章18節)

簡単に言えば、現在の「不法の秘密」の指数関数的な広がり、御霊によって設けられた障壁が直接取り除かれ、この機会を悪魔が利用することによって、艱難期に起こると預言されていた前例のない罪と悪の世界的拡大なのです。これが七つの封印が解かれることの本質的な意味です。これ<封印>はこれらの傾向が、<定められた>時がくる前に完全に実現するのを阻止する神の抑制の象徴なのです([第一テモテ 4章 1-3 節](#); [第二ペテロ 3章 3-7 節](#); [第一ヨハネ 2章 18 節](#); [ユダ 1章 17-18 節](#))。

(1)しかし、このことは知っておかねばならない。終りの時には、苦難の時代が来る。(2)その時、人々は自分を愛する者、金を愛する者、大言壮語する者、高慢な者、神をそしる者、親に逆らう者、恩を知らぬ者、神聖を汚す者、(3)無情な者、融和しない者、そしる者、無節制な者、粗暴な者、善を好まない者、(4)裏切り者、乱暴者、高言をする者、神よりも快樂を愛する者、(5)信心深い様子をしながらその実を捨てる者となるであろう。(偽り教師などについての2章も参照) こうした人々を避けなさい。(第二テモテ 3章 1-5 節)

このリストは、艱難期の人間の行動様式を知るためのもので、完全なものであると考えるべきではありません。目に見えない抑制と目に見える抑制(一方では聖霊の抑制の働き、他方では国家主義と法律の力)の両方がないとき、人間の本性の最も暗い面がかつてないほどあらわになるからです。確かに個別なケースや特別な時に([ローマ 1章 18-32 節](#) 参照)、このような性質をすべて見ることはできます。しかし、艱難時代には、これらの特徴が世界の大多数の人々の一貫した行動規範となり、世界を今よりももっと恐ろしい場所にするだけでなく、悪魔の活動にとって極めて肥沃な土地となり、主が警告されたように、信者でさえ影響を受ける恐ろしい状態になるのです。

また**不法**がはびこるので、多くの人の愛が冷えるであろう。(マタイ 24章12節)

現在行われている特別な「不法」(サタンの世界システムを拡大する努力)は、七つの封印が解かれ艱難期が始まると、それまでとは比較にならないほど増大することになります(すなわち、聖霊の拘束が解かれる)。その後、メシアの再臨によって、人類史上かつてないほど完全に不法が制限されます([黙示録 20章 1-3 節](#))。このような経過を経て、神は世界に次のことを示されます。

1) 被造物の墮落を抑制することは、世界が機能するために必要である。

2) 人間の心の不法な傾向に対する神の抑制が取り除かれた時、人類は(悪魔の助けを得て)自滅に向かってまっしぐらに走る。

3) 来たるべき時代の比類なき祝福は、前提条件として、人間の自然な「不法」(と悪魔の干渉)をこれまで以上に徹底的に抑制することが必要である。

このように考えると、艱難期に悪に対する神の抑制がなくなることは、人間が神から離れては何もできないこと、つまり自分自身の破滅に至らせること以外には何もできないことを意図的に示すこととなります。この運命的な期間において、悪魔の邪悪さと真の意図は完全に露わにされ(ローマ7章13節参照)、父なる神は、御子の栄光の支配に備えて被造物を従わせることによって、ご自分のために最高の栄光を獲得されます(詩篇110篇1節; ヘブル10章13節; 出エジプト14章4節; イザヤ63章12-14節参照)。

3. 不法の者の抑制: 被造物の[墮落した]天使である悪魔の地上の出来事に干渉し介入する能力は相当なものですが、一定の制限の下で動きます。サタンは「空中の権を持つ君」(エペソ2章2節)であり、この言葉は、被造物である天使が人間の領域で活動する際に彼らの影響力が制限されていることを端的に示唆しています⁵⁴。疑いもなく、悪魔は人類を操作し間接的に支配する世界システムの構築において大きく前進しています(悪魔の反逆シリーズの第4部「サタンの世界システム」参照)。しかし、この支配を完全かつ直接的なものにするために、サタンが艱難期において世界支配を試みるには、人間の顔、人間の代理人、すなわち「不法の人」、別称「反キリスト」が必要なのです。パウロが第二テサロニケへの手紙の2章で、これらの出来事について述べていますが、反キリストの世界への「現れ」と、私たちがこの文脈で学んでいる、七つの封印が解かれることに象徴される聖霊の抑制の解除との間には、明確な関連があることがわかります。

(3)だれがどんな事をして、それにだまされてはならない。まず背教(艱難期前半における信者の大脱落)のことが起り、不法の者、すなわち、滅びの子が**現れる**にちがいない[それらのことが起こらなければ、再臨はありえないからです]。(4)彼[アンチキリスト]は、すべて神と呼ばれたり拝まれたりするものに反抗して立ち上がり、自ら神の宮に座して、自分は神だと宣言する。(5)わたしがまだあなたがたの所にいた時、これらの事をくり返して言

⁵⁴ 「サタンの反乱: 艱難期への序章」: 第4部「サタンの世界システム」のII.5項「サタンの世界支配の限界」、および第1部「サタンの反逆と墮落」のII.4項「天使の活動領域」。

ったのを思い出さないのか。(6)そして、あなたがたが知っているとおりに、彼が自分に定められた時になってから**現れる**ように、いま彼[アンチキリスト]を阻止しているもの(すなわち、御霊)がある。(7)不法の秘密の力が、すでに働いているのである。ただそれは、いま[物事を抑制している]阻止している者が取り除かれる時までのことである。(8)その時になると、不法の者が**現れる**。この者を、主イエスは口の息をもって殺し、来臨の輝きによって滅ぼすであろう。(第二テサロニケ 2 章 3-8 節)

上記の反キリストの「現れ」は、大体にして私たちの主(真のキリスト、反キリストはそれに対するあからさまなニセモノ)の現れに対する正反対のものとして理解されるべきです。つまり、反キリストが権力を持ち、神として不信仰な世界に「現わ」され、受け入れられるのは、艱難期が始まってからであり、この七つの封印に象徴される聖霊の抑制が意図的に外された後だけなのです。

IV. 七つの封印 ヨハネの黙示録 6 章 1-17 節

この七つの封印は、まず第一に将来の艱難期とその特徴的な傾向に対する聖霊の抑制の働きを表していること、そして、第二にこれらの封印は、栄光の千年王国の始まりにあたって、主イエス・キリストが再臨されることを世界に啓示する「本」をこれまで封じ続けてきたことを思い出してください。主の再臨と統治は、艱難期と呼ばれる、預言されていた悪魔の暴走期とそれに対する神の裁きの期間の後にのみ訪れることができ、神、特に小羊が封印を解く(つまり、七つの聖霊の抑制が解かれる)までは、<最後の七年間の>艱難期が起こることはないのです。この二つの視点は、6 章の個々の封印が解かれるのを考える上で重要です。なぜなら、このプロセスはしばしば誤解され、誤って解釈されてきたからです。

封印が解かれること、それに伴う事柄について最初に注意すべきことは、後述の(「リアルタイムの<時間の経過と共に起こる>」出来事である)ラッパと鉢(これらはしばしば間違ったグループ分けや比較がされている)とは全く対照的に、これらの封印は時間の経過と共に起こる出来事としての**記述でもなく**、特定の神の裁きを表すものでもありません(但し、艱難期全体における出来事すべてを裁きとして捉えるなら別ですが)。⁵⁵ それどころか、6 章の 6 つの封印がそれぞれ開かれると、艱難期が始まると

⁵⁵ やがてわかるように、ラッパと鉢はともに、実際の神のさばきの周期を表しており、ラッパは(エジ

どのような事態が展開するかを**予告**し、そして、終末の開始を阻止していた最後の障壁である第七の封印が解かれて、ついに幕開けとなるのです。第 6 章の 6 つの封印は、7 年間を特徴づける恐ろしい苦痛と破壊の主要な動向の(反キリストの悪魔的活動とそれに対する究極の神の対応の)経過順の概観であり、第 1 から第 4 の封印の動向は艱難期前半に完全に現れ、第 5 と第 6 は後半または「大艱難期」に取っておかれます。このように、黙示録の読者は、六つの封印に注意を払い、理解することによって、第七の封印が解かれて艱難期が始まる前から、起こらんとするすべての出来事の枠組みを捉えることができるのです。

第 1 から第 4 の封印のいわゆる「四騎兵」は、(第 5 と第 6 の封印と同様に)艱難期における特定の動向を表す象徴であり、それ自体が実体として実在するわけでは**ありません**。この節は、多くの英語版で繰り返し見られる誤訳のために、特に重要なポイントです< 欽定訳では「来て、見なさい」となっています>。以下の翻訳で分かるように、四つの生き物はそれぞれの「騎兵」に対して「来なさい！」という命令は**しておらず**、実際にはヨハネに対して「**来て、見なさい!**」という二つの言葉によって命じているのです(4 度とも、命令の後に、象徴的な騎兵を、ヨハネが見て、考察し、記録するために現れます)。

聖書、特に預言書では、教訓をより理解しやすくするために、このような象徴、つまり非定形の実体や事象を絵像化することは珍しいことではありません(ダニエル書 2 章の像は来たるべき世界の王国を、ゼカリヤ書 5 章の女は邪悪を象徴しています)。さらに、ヨハネの黙示録は、まさにこのような比喻や「教えのたとえ」に満ちています(例えば、[黙示録 12 章](#)の女イスラエル)。

このように、「四騎兵」とゼカリヤ書の(1 章と 6 章それぞれの)乗り手と戦車隊はしばしば直接的な類似性が指摘されますが、両者の間には重要な違いがあります。ゼカリヤ書に登場する騎手は、いずれも実在の天使であり、神によって特定の任務に送り出された神の使者、代理人ですが、黙示録 6 章に登場する「四騎兵」は実在の者ではなく、反キリストという人物を通じて悪魔が直接支配することによって生じる、艱難期のある動向を表している象徴です。この「四騎兵」と[エゼキエル書 14 章 21 節](#)の「四つの厳しい罰」との比較からよく引用される類似点を考えてみると、同じようなものだとわかります。エゼキエル書の四つの神の裁きは、悪に対する神よりのものですが、これらの「四騎兵」の動向は、無制限の悪魔の活動から生じる地上の包括的な呪いなのです。

プトに対する十の災いのような)序幕のための一連の警報を、鉢は再臨に先立つ神の最後の警告の前奏を表しています。

確かに、騎兵はゼカリヤの天使の乗り手のように急速に広範囲を移動するので、急速かつ完全な増殖というテーマは、彼らと「四騎兵」の両方に共通しています。また、反キリストの極悪非道な台頭による混乱は、エゼキエル書 14 章に述べられている神の直接的な裁きによって引き起こされる状況と非常によく似ていることも事実です。これらの箇所は似ているように見えますが、最初のゼカリヤ書とヨハネの黙示録を対比してみると、実際の神の代理人対、悪魔的傾向の象徴、第二の例では、神の審判(エゼキエル書)対、サタンの引き起こした呪い(ヨハネの黙示録における反キリストの支配に関連する呪い)となります。

つまり、「四騎兵」は象徴として、また預言されている影響をもたらすものとしてユニークな存在なのです。なぜなら、艱難期は、(主が語られたように、またこのシリーズの最初から強調してきたように)人類の歴史の他のどの時代とも性質も程度も異なる、悪魔の独特な支配の時代となるからです⁵⁶。

その日には、神が万物を造られた創造の初めから現在に至るまで、かつてなく今後もないような**患難**が起るからである。(マルコ13章19節)

「四騎兵」とは、反キリストが権力を握り、悪魔の王国を統治するのに伴う一連の傾向であり、7年間の艱難の前半に起こる定められた活動パターンを表しています。一方、第五と第六の封印は、艱難期の後半、すなわち「大艱難」の最も重要な出来事、すなわち大迫害(第五の封印)とそれに対する神の応答(特に再臨に伴う七つの「鉢の裁き」とハルマゲドンの最後の裁き)を表しています。このように前半の動向(封印 1-4)と後半の出来事(封印 5-6)を区別することによって、なぜ「四騎兵」しか登場しないかが説明できます。つまり、騎兵はこれまでほとんど抑制されていた悪魔の支配の悪を象徴して(これは艱難期前半の焦点となる)いますが、艱難期後半の**特定の出来事**を象徴するには不適切で混乱を招きます。第七の封印(黙示録第八章)は、最後の封印として、最初の六つの封印が予告した艱難期の動向と出来事の実際の始まりを象徴しているので、全く異なる象徴性を持っています。以下、それぞれの封印を個別に扱っていきますが、この時点で概要を知っておくと便利でしょう。

艱難期の前半(4つの主要な動向):

1. 白い馬:反キリストによる**征服**:戦争と侵略の動向

⁵⁶ 第1部「はじめに」I.2.a 項「艱難」参照。

2. 赤い馬: 民衆の不和: 無法状態と政治的不安定化の動向
3. 黒い馬: 経済的制約: 経済的混乱と飢餓の動向
4. 薄緑色の馬: 加速する死亡率: 疫病と死者続出という動向

大艱難期(二つの大きな出来事):

5. 殉教: 大迫害(反キリストと彼の信奉者による)。
6. 審判: 再臨(その前兆的、付随的な審判を含む)

1. 白い馬：反キリストの征服(1-2 節)

ヨハネの黙示録 6 章 1~2 節

(1)小羊がその七つの封印の一つを解いた時[第一の封印]、わたしが見ていると、四つの生き物の一つが、雷のような声で「きたれ」<「来て見なさい」-欽定訳>と呼ぶのを聞いた。(2)そして見ていると、見よ、白い馬が出てきた。そして、それに乗っている者は、弓を手に持っており、また冠を与えられて、勝利の上にもなお勝利を得ようとして出かけた。

白馬は、反キリストとその軍勢による軍事的侵略の流れを象徴しています。ローマ帝国の勝利の色である白は、復活したローマの支配者である反キリストの征服の成功を表すのに最も適しています⁵⁷。これは艱難期の最初の大きな傾向で、反キリストの最初の領土拡大は、明白な軍事手段と欺瞞、策略、ゲリラ戦術(以下に見る弓の背後にあ

⁵⁷ 反キリストの王国は、ダニエルの第四の獣である復活したローマのことです([ダニエル 2 章 40-43 節](#)と[ダニエル 9 章 26 節](#)を参照してください)。ローマの勝利の色(特に白馬)としての白の象徴については、H.B.スウェートの『聖ヨハネの黙示録』(ケンブリッジ 1908 年)93: "cf. Verg. *Aen.* iii.537 'quattuor hic, primum omen, equos in gramine vidi | tondentes campum late *candore nivali*'; on which Servius remarks, 'hoc ad *victoriae* omen pertinet'" (太字ハイライトは追加)

<上記のラテン語の機械翻訳→93: 参照: Verg. *Aen.* iii.537「この四つの最初の前兆、私は雪のように白い馬が草原の草を広く食い尽くしているのを見た」;これについてセルウィウス(Servius)は「これは勝利の前兆である」と指摘。>

る象徴;参照:[ダニエル 11 章 21～45 節](#))によって達成されるのです。この傾向(そして、実際、反キリストの到来と出現)は、この霊の抑制の封印が解かれなければ起こり得ません([第二テサロニケ 2 章 1-8 節](#)参照)。

白馬の騎手はキリストではなく、反キリストであることを理解することが重要です。その名が示すように、反キリストは多くの点で「偽キリスト」であり、極悪非道な偽者で多くの人を欺くでしょう。したがって、艱難期の初めの反キリストの姿とその動向が、私たちの征服者である主と似ていることはよく理解できます([黙示録 19 章 11-16 節](#)参照)。反キリストは冠を被っていますが、それは運動競技の花輪(ギリシャ語のステファノス: $\sigma\tau\epsilon\phi\alpha\nu\omicron\varsigma$)で、メシアが被る複数の王冠([黙示録 19 章 12 節](#)のギリシャ語のディアデーマ: $\delta\iota\acute{\alpha}\delta\eta\mu\alpha$)に比べると量も質も劣っています。反キリストは艱難期の初めに現れて、永続することのない王国を征服する(第一の封印)のに対し、メシアはその終わりに勝利して、(再臨において)終わりのない王国を勝ち取るのです。

そして、反キリストには「弓」が与えられています。この武器は、聖書的にも歴史的にも、しばしば卑劣な意味合いを持っています。つまり、弓は古代世界ではゲリラ的な武器であり、大胆な対決の武器というよりは、むしろ忍び寄る武器です(メシアの口から直接出る印象的で鋭い大剣とは対照的です。この区別は、ヨハネと同時代の人々にも理解されたはずで、スキタイやパルティアの弓兵は実戦力があり、ギリシャ・ローマの「フェアプレー(一騎打ち)」の枠を超えており、黙示録の本来の読者には間違いなく否定的な意味合いを持つものでしょう。このような反キリストの武器は、ダニエル書の反キリストの陰湿で狡猾な権力獲得に関する記述と一致しており、明白な軍事的征服と同時にテロ、クーデター、脅迫によって達成されます(参照:[ダニエル 11 章 21 節](#))。また、ハルマゲドンに先立つ艱難期のイスラエル侵略に関するエゼキエルの記述では、反キリストは「ゴグ」という異邦人の総称で、弓を携えているように描写されています。

(1)人の子よ、ゴグに向かって預言して言え。主なる神はこう言われる、メセクとトバルの大君であるゴグ(すなわち、反キリスト)よ、見よ、わたしはあなたの敵となる。(2)わたしはあなたを引きもどし、あなたを押しやり、北の果から上らせ、イスラエルの山々に導き、(3)あなたの左の手から弓を打ち落とし、右の手から矢を落させる。(エゼキエル書 39 章 1-3 節)

最後に、私たちの主についての記述に見られる肯定的な要素-燃えるような目、印象的な白い衣、威厳のある名前などは皆無です。[\(黙示録 1 章 12-16 節, 黙示録 19 章 11-16 節を参照\)](#) 征服としての反キリストのこの最初の記述には見当たりません。このシンボルは、最初は威厳があるように見えますが、よく見ると空虚であることがわかり

ます。反キリストも同様に、畏敬の念を抱く世界から礼賛を要求し、受けませんが、かえって自分の従者をただ完全に破滅に導きます([第二テサロニケ 2 章 1-12 節](#)参照)。

2. 赤い馬 市民の不和 (3-4 節)

黙示録 6 章 3-4 節。

(3)小羊が第二の封印を解いた時、第二の生き物が「きたれ」<「来て、見なさい」—欽定訳>と言うのを、わたしは聞いた。(4)すると今度は、赤い馬が出てきた。そして、それに乗っている者は、人々が互に殺し合うようになるために、地上から平和を奪い取る(=内乱を起こす)ことを許され、また、大きなつるぎを与えられた。

赤い馬は、市民の不和、内紛、社会の激変、法と秩序の崩壊、礼節の消滅、犯罪の増加、政治的迫害、革命などの傾向を象徴しています。この第二の艱難の動向は、反キリストを先頭にした悪魔の活動の直接的、間接的結果です。サタンは、反キリストとその世界権力と支配に対抗する潜在的抵抗力を腐敗させ、弱体化させるために、法と秩序と市民的平和の破壊に積極的に関与するからです(実際、彼は常にそうしてきたのですが)。この第二の封印が開かれるという聖霊の抑制が無くなることで、艱難期における前例のない悪魔の激しい動きと相まって、社会情勢は想像を絶するような加速度的变化を、短期間で迎えることとなります⁵⁸。同時に、社会的調和と社会制度の普遍的な崩壊は連鎖的な負の効果をもたらし、それぞれの社会的衰退が世界的な社会的荒廃を深刻化させ、さらに加速させる傾向があります。これらのことに関する現時点での聖霊の抑制が、この第二の封印が開かれるとともに取り除かれることはよく知られていることです([ガラテヤ 5 章 17-26 節](#)参照)。

血の色である赤は、激しい内紛を象徴する騎手(すなわち 4 節にある、疑いなく「血まみれ」の殺戮とそれを達成するための剣)を象徴するのに適切な選択です⁵⁹。世界の

⁵⁸ 悪魔は、この最後の 7 年間の準支配期間中、「あらゆる手段を尽くす」でしょう。このシリーズの第一部、第三節「患難の一般的性格」をご覧ください。

⁵⁹ 参照:[列王記下 3 章 22 節](#)「血のように赤い」。七十人訳では、この文脈と同じ「赤い」を意味するギリシャ語、ピロス(πυρορος)が使われています。また、[黙示録 12 章 3 節](#)において、赤が竜、サタンの色であることから、悪(この文脈では、殺人や流血に現れる悪)を指していることがわかります。

歴史が十分に証明しているように、外国の征服以上に内紛による暴力のほうが、もっと血まみれ状態をもたらすことがよくあります。さらにここで強調しなければならないのは、赤い馬は二つの別々の国の間の争い(これは第一の封印で完全にカバーされている)という意味での「戦争」ではなく、内部対立の血みどろの暴力を表しているということです。第一の封印で示された軍事的征服の動向にしる、革命や内乱もまた、常のことです。しかし、ここで伝えられているのは、その傾向の**激化**は比類のないもので、この激しさも、神の抑制が取り除かれ、悪魔の執拗な努力が強まることから生じています。その結果、「不法がはびこるので、愛が冷える」([マタイ 24 章 12-13 節](#))ことによって、世界の人々が硬直化して、人間の行動が艱難期の最も不穏で恐ろしい傾向の一つになることでしょう。これは聖書の観点から見ると決して喜ばしいことではなく、預言からすると、劇的に悪い方向へ向かうこととなります([第一テモテ 4 章 1-3 節](#); [第二テモテ 3 章 1-9 節](#))。これは、社会の崩壊に向かう傾向の結果であり、またその一因でもあります。実際、反キリストの征服は、まさにそのような反乱を通して多くが達成されるでしょうし([ダニエル 11 章 21 節](#), [11 章 24 節参照](#))、他方、彼の力の大部分は、社会の「再編成」と新しい社会システムの確立から生まれることでしょう。その真の目的は、彼の王国の支配を深め、彼に従う者をより一層彼に依存させ従順にするためです([ダニエル 11 章 36-39 節参照](#))。最後に、第二の騎手が「地から平和を奪う」という事実は、艱難期の直前まで比較的平穏な時期があることを示唆しており、そのため艱難期そのものが、より一層耐え難いものになることでしょう。

3. 黒い馬：経済的制約(5-6 節)

ヨハネの黙示録 6 章 5-6 節。

(5)また、(小羊が)第三の封印を解いた時、第三の生き物が「きたれ」<「来て、見なさい」-欽定訳>と言うのを、わたしは聞いた。そこで見ていると、見よ、[そこに]黒い馬が出てきた。そして、それに乗っている者は、はかりを手に持っていた。(6)すると、わたしは四つの生き物の間から出て来ると思われる声が、こう言うのを聞いた、「小麦一ますは一デナリ。大麦三ますも一デナリ。オリーブ油とぶどう酒とを、そこなうなく英文直訳:「オリーブ油とぶどう酒のことで 気をもむな」>」。

黒い馬は、極端な経済統制、欠乏、束縛の傾向を象徴しています。第二の騎兵の場合と同様に、ここでも最初の二つの封印で表現された一連の攻撃的な戦争と内乱から、かなりの苦難がもたらされるでしょう。このように経済活動のあらゆる側面に大きく

干渉してくることは、反キリストが(商業のあらゆる分野を厳しく管理することによって)権力を握り締め、また(報酬の手段として)生産の大部分を自分の信奉者のために専用するという主要な手段の一つです。艱難期後半に、この戦略が宗教的迫害にまで拡大されることはよく知られていることです([黙示録 13 章 16-18 節](#))。

飢餓を連想させる色である黒は、第三の騎手に表される欠乏の傾向を象徴するのにとてもふさわしいものです。[\(ヨブ 30 章 30 節; 哀歌 4 章 8-9 節, 5 章 10 節; イザヤ 50 章 3 節も参照\)](#)。どのように見積もっても、ここで引用された価格は極端です。大麦の小麦との価格の比率は、私たちが知っている古代の価格設定と一致していますが、価格そのものは、当時の平均的な被雇用者がその収入のすべてを生活のために必要とすることを示しています。1 デナリは労働者の標準的な日当ですが([マタイ 20 章 2 節](#)参照)、一升(ます)、つまり 1 リットルの小麦粉(栄養価は未処理の大麦の重量の 3 倍に相当)は、個人はもちろん、家族にとってほとんど十分なものではありません。したがって、これらの預言的な言葉の中に、賃金の統制と価格の統制が行われ、反キリストの「チーム」に属さないすべての人々の消費が、根本的に(そして人為的に)制限されることを見ることができます。「油とぶどう酒をそこなわないように」(欽定訳聖書でもこうなっており、ほとんどの他の訳でも同様)という箇所はよく誤解されている箇所です。この命令は買い手に向けられたもので(騎兵にはではありません)、反キリストの少数の特権階級に属さない一般人にとっては、最も基本的で不可欠なもの以外は手の届かない値段になることを示唆しています([箴言 21 章 17 節](#)参照)。それゆえ、「良い値段<の商品>」を探す必要さえもないということです。なぜなら、それらは(反キリストの国が続く限り)決して手に入らないのですから。

また、ここで言うておかなければならないのは、黒い馬は単なる飢饉ではなく、生産、価格、流通、資本などを意図的にコントロールするものであるということです。飢饉はこの地球上に常に存在し、その激化はまさに艱難期のしるしであり特徴ですが([マタイ 24 章 7 節](#))、ここに描かれている傾向は、「人為的」なものであり、反キリストの政策によってもたらされた、とんでもない手に余る経済状況のことを言っています。共産主義者やファシスト政権が権力の座に着くと、「富の再分配」(つまり、想像を絶する規模の窃盗)を行うように、反キリストの場合も同様で、その活動は過去百年にあった恐ろしい歴史的な例をも凌ぐものになると予想されます(参照:[ダニエル 11 章 24 節, 11 章 39 節](#))。

したがって、第三の騎兵の手にある「はかり」は、第一の騎兵の(邪悪な征服を遂行するための)弓、第二の騎兵の(内乱を誘発するための)剣に相当する経済支配と苦痛を与える**武器**です。この意図的で人為的な配給と価格統制のシステムは、最初

は間違いなく多くの人にとって魅力的に見えるでしょうが、すぐに金持ちと反キリストの特権的な信奉者以外のすべての人にとって、恐ろしいほどの欠乏を促進することになります([レビ 26 章 26 節](#); [列王記下 7 章 1 節](#); [エゼキエル 4 章 16 節](#)を参照)。

4. 青白い馬：加速する死亡率(7-8 節前半)

黙示録 6 章 7 節-8 節前半:

(7) (小羊が)第四の封印を解いた時、第四の生き物が「きたれ」<「来て、見なさい」欽定訳>と言う声を、わたしは聞いた。(8)そこで見ていると、見よ、青白い馬が出てきた。そして、それに乗っている者の名は「死」と言い、それに黄泉が従っていた。

青白い馬は、死亡率が著しく増加する傾向を象徴しています。死の後に(不信仰な)死者の場所である「黄泉(ハデス)」がすぐ続くというのは、艱難期の死亡率の激化と急速な増加(すなわち、「死」の到来と「黄泉」への収容の間に全く合間がないこと)を鮮やかに象徴しています。この死亡率の拡大・加速には様々な要因がありますが、具体的には、先の三騎兵の動向である戦争、革命、飢饉に起因するものです。腐食と腐敗の色である青白さ<英語では「pale-green(薄緑色)」>は、死とその腐敗を表すのに非常に適しています。

ここで強調しなければならないのは、青白い馬は、最初の三騎兵が象徴する戦争、反乱、経済的欠乏から生じる死者の数の増加だけではなく、反キリストがその民の命を軽んじることから生じる、死亡率の拡大も表しているということです([箴言 14 章 28 節](#)を参照のこと)。このように死亡率が、大洪水以来の世界の歴史に見られなかったほど跳ね上がる要因は、やはり反キリストの側での意図的な政策のせいでしょう。最初の三騎兵の動向によってもたらされる死と健康が損なわれることに加えて、青白い馬に乗る騎兵自身は、死を象徴しています。なぜなら、反キリストは世界征服に熱中するあまり(そのような行動に必要な手段がほぼ無限であることを考えると)、医療、法と秩序(単なる武力支配を超えて)、環境保護といった生活に不可欠なすべての分野から財源を振り向けることが予想され、その結果、疫病、犯罪、環境災害が拡大し(もちろん、最初の三騎兵の動向にもよりますが)、ごく少数の人を除くすべての人の死亡リスクと死亡率が大幅に増加することになるからです。

ひどいことですが、この死亡率の上昇は、若者、老人、病弱な人々を最も苦しめ、「非生産的」な社会の構成員による消費を排除することによって、反キリストの意向を達成することにもなるのです。したがって、健康、安全、環境部門のための財源が大幅に他に回されることによって引き起こされる状況は、反キリストが予期していなかった(あるいは望んでいなかった)ものではないことは、かなり確実です。弓、剣、秤が、反キリストがその利己的な意図を達成するための「武器」を表すのと同じように、ここで言及されている「黄泉」も、彼の悪魔的目的、この場合は彼の誇大妄想的目的のための、殺戮による財源の確保達成の道具として見なければなりません⁶⁰。

4b. 四騎兵のまとめ(8節後半)

[黙示録 6 章 8 節後半](#)

＜引用されている黙示録 6 章 8 節後半の英文直訳：＞そして、**剣**(戦争と革命の最初の二騎兵＜第一の騎兵と第二の騎兵＞)と**飢饉**(第三の騎兵)と**死**(第四の騎兵)、また**地の獣**(すなわち、四つの動向のエージェントとしての反キリストとその偽預言者)の手で殺すため、**地の第四**[の部分](すなわち、反キリストの王国)を**支配する権威**が彼らに(すなわち、集合的に四「騎兵」らに)与えられた。

読者は、この 8 節の後半が(一般に考えられているように)第四の騎兵だけに適用されるのではなく、四つの騎兵すべてに集合的に適用されている要約文であることに特に注意する必要があります。すでに最初の三つの騎兵に割り当てられた(戦争と革命の暴力の)剣と(経済的混乱による)飢饉が、(疫病やその他の反キリストの政策の結果による死亡率の増加の)死と(最後の審判前の救われていない死者の行先である)黄泉に与えられるとか、＜死と黄泉が＞剣を振るえるというのは聖書的に意味がありません。死(すなわち、死亡率の急上昇という動向)に伴う黄泉の場合、単に死亡率の恐ろしい増加を示しているだけで、実際には死の「直後に続く」ことです。しかし、黄泉がエージェント＜勢力的存在＞であるという考えは、たとえ象徴的な意味であっても、古典神話からの間違った借用であり、聖書の解釈には全く関係ないものですが、この＜黙示録 6 章 8 節の＞後半の上記の拡大解釈的訳では、この要約文と四騎兵のそれぞれ

⁶⁰ これはまだ宗教迫害ではありません。この時期の信者は、死後、黄泉ではなく天国に收容されます(主の昇天以前は人々は死後、黄泉でした:前述の「聖なる場所」の項を参照)。

れの役割の間には明確な関係があり、その過程で重要な情報が追加されているのが分かります。

「剣」は第一の騎兵と第二の騎兵に関するもので、両者を一つのまとまりとしています。なぜなら、厳密には、死をもたらす手段という意味で、剣による武力の象徴は、第一と第二のそれぞれに合ったものだからです。剣に別の語彙が使われていること(4節の**大きなつるぎ**、マチャイラ machaira[両刃の剣]から8節後半の**つるぎ**、ロムファイア rhomphaia[幅広の刀])から、最初の二つの封印の武力を表す戦争と革命を表す二騎兵に与えられた武器とも厳密には異なる武力の武器が示されています。8節のトラキアのロムファイア剣は、(マチャイラを使う)ローマ軍団に敬遠された武器として、第一の封印が持つ異国の武器という概念と、第二の封印が持つ武力としての剣(マチャイラ剣と似ているが同一ではない、第一の騎兵の弓の意味をも含めて)の二つの概念を兼ね備えています。

また、「飢饉」という言葉は、第三の騎兵が死をもたらす手段を表し、8節で使われている「死」そのものは、「疫病」あるいは「ペスト」と同義語であり、聖書ではそのように使われています(病気は第四の騎兵が用いる第一の手段です)⁶¹。最後に、「地の獣の手で」という表現についてですが、これはしばしば野生動物によって死がもたらされると考えられてしまうため、少し説明が必要です。この点について、最初の四つの封印の四つの動向から生じる人口減少によって、このような問題が生じると予想することは間違いではありませんが([申命記 7 章 22 節](#)参照)、野生動物による死は、戦争、社会の衰退、経済の破局、疫病による死と比較すれば、ほとんど間違いなく微々たるものでしょう。さらに言えば、反キリストの政策の動向に関する具体的な描写のどこにも(つまり、四騎士の個々の描写の中にも)、「野獣」の存在はほのめかされてさえいません。[エゼキエル書 14 章 21 節](#)のような聖句が比較されてよく引用されますが、農耕が営まれている人口の少ない古代イスラエルと、都市化が進み、人口の多い現代ヨーロッパ(これらの傾向が最初に当てはまる反キリストの王国: [すぐ下を参照](#))を並べて見るのは、まさに「リンゴとオレンジ」とを比較しているようなものです。さらに、最初の四つの封印の四騎兵は、反キリストの悪魔的な活動から生じる傾向を象徴しており、それ自体は神の裁きではない([エゼキエル書 14 章 21 節](#)においては確かにそう<神の裁き>です)ので、この間違った比較はさらに無意味なものとなっていることも忘れてはいけません。なぜなら、今は抑制されている悪魔とその反キリストですが、巻物とその封印が開かれる日

⁶¹ ヘブル語の dheber(「災い」: דָּבַר)をギリシャ語の thanatos(「死」: θάνατος、黙示録6章8節と同じ)と訳す七十人訳の常套表現を比べてみてください: 例えば、レビ 26 章 25 節; 歴代誌上 21 章 12 節; エレミヤ 21 章 6-7 節; エゼキエル 5 章 12 節 (et passim in Ezek.)

が来れば、その破壊的な政策を解き放つことが許されるからです([第二テサロニケ 2 章 3-12 節](#)参照)。

もし、上記の 8 節の「獣」(ギリシャ語のテリオン: θηρίον)という言葉が文字通りの野生動物を指すとすれば、それは黙示録に登場する数十の例の中で唯一の例外となるでしょう。なぜなら、「獣」の他の多くの用例では、反キリストかその偽預言者を指しているからです([黙示録 13 章 1 節](#)と [13 章 11 節](#)--「来たる艱難期第5部」参照)。さらに、ギリシャ語の前置詞ヒポ(ὑπό: 上記の「**の手で**」と訳される)は、通常、道具ではなく人間のエージェント(代理/存在)にのみ使われ、物や動物ではなく、人間に適切に使われるものです。つまり、「**の手で**」は、実際の野生動物ではなく、「**獣**」として特徴づけられた個人を文法的にも表現しているのです。実際、上で見たように、反キリストとその政権(その連合の最も顕著な支持者である偽預言者もこの中にいます: [黙示録 13 章 11-18 節](#))こそ、これらの四つの致命的な動向を引き起こしているのですから、「**獣の手で**」とあるのを、それ以外の意味で捉えようとするのは間違っています⁶²。これらの獣は「地のもの」であり⁶³、サタンも艱難期に地に投げ出され([黙示録 12 章 7-9 節](#))、この書の中で「龍」(恐ろしい獣、参照: [黙示録 12 章 3 節](#))として描写されていることを考えると、「地の獣の手で」という表現に、この最初の四つの艱難の動向と艱難に続くすべての恐怖を引き起こす地獄の偽三位一体を見ることができます。獣である反キリストが、四つの封印に象徴される神の抑制が解かれることによって解放され([第二テサロニケ 2 章 3-12 節](#))、獣の龍であるサタン([黙示録 13 章 1 節](#); [第二テサロニケ 2 章 9 節](#)参照)の指揮を受け、獣のような偽預言者によって支持されます([黙示録 13 章 4 節](#))。そのため、冒頭で述べたように、封印が解かれた状態(四騎兵が現れる状態)は、一時的に世界を支配するようになる獣の王国の統治の傾向を示しています([黙示録 13 章 12 節](#), [17 章 8 節](#)を参照)。

⁶² 複数形である以上、定冠詞が一般的なものであるはずがありません。これらは特定によく知られた「獣」、すなわち反キリストとその偽預言者であるとしか考えられません。これらを、むしろ一般的な野獣とみなすことは、文法上問題を抱えることとなります。さらに、エゼキエル書 14 章では、獣は最後に出てきますが、黙示録 6 章では、第一の封印の焦点である獣、反キリストを除いて、獣はこの時点まで出てきません。

⁶³ この「地の」という表現は、黙示録 13 章 11 節(偽預言者の起源を表す前置詞 ek「から」が使われている)の表現とは異なります。反キリストもその偽預言者も「地のもの」である(すなわち、地上のものであり、これらの動向が神の命令によるものではないことを示している)のに対して、偽預言者は「地から」出て来て、[黙示録 12 章 17 節-13 章 1 節](#)の反キリストが「海から」出てくるのとは対照的です(このシリーズの第 4 部で説明します)。

また、「地の四分の一」という表現も誤解されがちです。これは世界の人口の四分の一を指しているのではなく、聖書にあるとおり、「**地**の四分の一」を指しているのです(ラッパの裁きでは、その影響を受ける地域が非常に正確に示されています:例えば、[黙示録 8 章 7 節](#)「地の三分の一」、[黙示録 8 章 8 節](#)「海の三分の一」、[黙示録 8 章 9 節](#)「船の三分の一」、[黙示録 9 章 15 節](#)「人間の三分の一」)。この「地の」という修飾語は、反キリストの活動によって引き起こされるこれら四つの動向の最初の領域が、地理的に世界の四分の一に限られることを告げています。つまり、征服戦争、社会不安、経済破綻、死亡率の上昇といった初期のトレンドは、反キリストの王国(聖書的には世界の4分の1を占める)に集中するのです。聖書の一般的な呼称では、地球は確かに東西南北の四つの象限に分かれている(しばしば四つの風によって表されますが、これは順番にこれらの四つの方向を意味します。[エレミヤ 49 章 36 節](#); [エゼキエル 37 章 9 節](#); [ダニエル 7 章 2 節](#); [マタイ 24 章 31 節](#))。黙示録 7 章 1 節の「世界の四隅に立っている」四人の天使、[黙示録 20 章 8 節](#)の「地の四隅にいる」すべての国々の終末における悪魔の欺き、[イザヤ 11 章 12 節](#)の「地の四隅からの」神のイスラエル再集結、[ゼカリヤ 6 章 7 節](#)の「全地」(すなわち、「全土」)をめぐる神の四台の戦車と比較できるのではありませんでしょうか。東西南北の四分の一ずつ)。さらに、聖書の地理学では、イスラエルは世界の中心に位置しているため、この四つの象限は、イスラエル自身の中心位置と相対的に識別されることとなります。神に選ばれた民の故郷であり、「肉によるキリストはどこから来るのか」、また神の視点から世界の出来事の地理的な焦点として、イスラエルがそのように表現されても、信者にとっては全く不思議ではないはず([ローマ 9 章 5 節](#))。

主なる神はこう言われる、わたしはこのエルサレムを万国の中<真ん中-新改訳Ⅲ>に置き、<わたしは>国々をそのまわりに置いた。(エゼキエル書 5 章 5 節)

ここで、反キリストの王国の四つの封印による動向において、地球の特定の「第四の部分」は、確かにそれゆえ、そこにある王国を指します。さらに、ダニエル書 11 章は、反キリストを「北の王」として、艱難期の前半の大部分が費やされる「南の王」との戦争を描写しています(参照:[ダニエル 11 章 40-45 節](#))。また、ダニエル書と黙示録から、この「北の王国」はヨハネの時代のローマ帝国とほぼ同じで、その<ローマ>古代王国の「復活」であることが分かります(それぞれ、[ダニエル 9 章 26 節](#)と[黙示録 17 章 9-11 節](#)参照、[ダニエル 2 章 40-44 節](#), [7 章 7-25 節](#); [黙示録 13 章 1-4 節](#), [17 章 1-15 節](#)も参照のこと)。この図式に加えて、「東方の王たち」はハルマゲドンに召集されるまで、艱難期の主要な出来事には比較的関わりを持ちません([黙示録 16 章 12-14 節](#))。さらに、黙示録 17 章と 18 章の「バビロン」は獣の王国の一部でありながら、それとは区

別されるという事実があります(したがって、今のところ名前のない地球の四分の一、すなわち西を表していなければなりません:[イザヤ 14 章 3-20 節](#)と[黙示録 17 章 16-18 節](#)を比較)。したがって、私たちは、艱難期の世界を次のように大まかに分割することになります。

北:ヨーロッパ(反キリストの最初の同盟国および征服国]

南:アフリカ・中東

東:アジア・太平洋

西:西半球[バビロン、反キリストの故郷]。

＜上記の＞これらすべては、このシリーズの第 3 部から第 5 部にわたる説明と釈義のいくつかの重要な箇所と広範な教えを、合成して簡略化したものです。この概要によって、最初の四つの封印の初期の動向は、反キリストが勝利し征服した領域において、何よりもまず明らかになることを理解するのに役立つことでしょう。獣の最初の征服領域は、ヨーロッパ、地中海、近東、つまりローマの権力の中枢です。この領域に対して反キリストは、同盟、策略、威嚇、公然の敵対行為を通じて、本来の権力の拠点である象徴的バビロン(彼はこの地＜バビロン＞の王です:[イザヤ 14 章 4 節](#); ＜この地の＞別名ツロ:[エゼキエル 28 章 1-19 節](#); [イザヤ 23 章 1-17 節](#); [エゼキエル 27 章 1-36 節](#)を参照)から進撃することになります。これらの事実は、西のバビロンが艱難期の初期にこれら四つの致命的な動向のうち、最悪のものを免れることを明らかに示唆していますが、反キリストの他の臣下にとって嫉妬と嫌悪の対象であるバビロンが、艱難期の終わり近くには事実上滅ぼされてしまうことを心に留めておくべきでしょう([黙示録 17 章 16 節～19 章 3 節](#))。

ここで、四騎兵と四つのケルブ(すなわち、「＜四つの＞生き物」)の関係にも言及する必要があります。黙示録第 6 章のテキスト(すなわち、1 節、3 節、5 節、7 節のそれぞれ「第一」⁶⁴、第二、第三、第四の組)は、騎兵が黙示録第 4 章に現れるこれらの天使の生き物と同じ順序でケルビムによって紹介されていることを明らかにし、次の一連の

⁶⁴ 確かに、「第一の」は文字どおり「生き物の一人」と訳されるべきですが、「一」という基数が次の序数列を導くというのは、聖書の用法として前例がないことではありません。[創世記 1 章 5 節](#)の＜まだ他の日が存在していない造られた最初の＞「一日」の後に「二日目」、「三日目」などが続くため、通常は「初め＜て＞の日」と訳されますが「一日目」と訳されています(NASB は「一日」と訳されていますが、KJV、NIV はそう＜一日目と＞訳されています)。

結合を与えています。

1. 獅子の顔 白い馬
2. 雄牛の顔 赤い馬
3. 人間の顔 黒い馬
4. 鷲の顔 薄緑の<青白い>馬

ケルブの顔は、神と人間の間を取り持つ神-人イエス・キリストを表し、騎兵はサタンの代理人、偽キリストの王国の動向を表していることから、両者の並置は重要であると言えます。メシアとその王国の素晴らしい側面と、反キリストの悪魔の王国の恐ろしい傾向との明確な対比が、この組み合わせの中にあるからです。

1. 獅子の顔をしたケルブが白馬の騎手を紹介することで、正義のユダの獅子と悪の獣である反キリストを対比しています。
2. 牛の顔をしたケルブが赤い馬の乗り手を紹介するのは、世のために自分を犠牲にする苦難のしもべと、争いと戦いの祭壇で自分のために世を犠牲にしようとする自己中心的な反キリストを対照的に表しています。
3. 人間の顔を持つケルブが黒い馬の乗り手を紹介するのは、永遠の糧を与えるために自らの命を捧げることと、人類の物質的な糧を奪う貪欲な反キリストを対比しています。
4. 鷲の顔をしたケルブが薄緑の馬に乗る者を紹介するのは、キリストが与える復活と永遠の命と、反キリストが与える死と腐敗を対比しているのです。

4つの騎兵によって表される4つの動向は、いずれも地球の歴史上、決して特異なものではありません。むしろ、この四つの致命的な傾向の激しさ、速さ、広さが特徴なのです。そして、4という数字が地球上の完全な範囲を象徴するように、騎兵の数が4であるという事実は、反キリストの支配下の人々に運命づけられた苦痛と艱難の包括的な性質を象徴しています。この四つの致命的な傾向は、悪魔の支配下にある世界がどのようなものかを明確に示しており(これらの傾向はすべて反キリストの意図的な政策の直接的な結果です)、神と直接関係のないこの世のものは、その核心は虚無にす

ぎないという事実を理解するために役立つはずです。信者である私たちは、この世の永続性、安心、安全、安定が実は幻想に過ぎないことを知っています。サタンに選ばれた人間の攻撃的で、扇動的で、欲深い、悪意のある政策の矢面に立つ人々にとって、これはどれほど明白な真理であることでしょうか！？反キリストは、平和、調和、繁栄、正義を与えることを約束しますが、彼の最も熱心な信奉者以外は、その反対のものを受けることになるからです。神の子に従うことを選んだすべての人にとって、この四騎兵が象徴する来たるべき体制の予告は、その日が来る前に、私たちが行うべき賢明な霊的準備のための目を覚まさせる警告なのです。

5. 殺された者たち 大迫害(9-11 節)

黙示録 6 章 9-11 節

(9)小羊が第五の封印を解いた時、神の言のゆえに、また、そのあかしを立てたために、殺された人々の靈魂が、祭壇の下⁶⁵にいるのを、わたしは見た。(10)彼らは大声で叫んで言った、「聖なる、まことなる主よ。いつまであなたは、さばくことをなさらず、また地に住む者に対して、わたしたちの血の報復をなさらないのですか」。(11)すると、彼らのひとりびとりに白い衣が与えられ、それから、「彼らと同じく殺されようとする僕仲間や兄弟たちの数が満ちるまで、もうしばらくの間、休んでいるように」と言い渡された。

最初の四つの封印と同様に、第五の封印もまた、神の抑制が解かれることを表しています。特に、信仰のために信者を故意に殺害することに対する神の制限が解かれること(すなわち「殉教」)です。⁶⁶ 最初の四つの封印の場合と同様に、視野に入っているのは<社会の>動向の事実ではなく(それらが表す征服、社会的紛争、飢饉、疫病は常に存在しているので)、この迫害が(ここで述べられている聖霊の緩和作用が取り除かれる結果として)どの程度に達するかということです。アベル以来、悪魔の世界に

⁶⁵ 祭壇の「下<英語では under>」にいるのではなく、祭壇の「低いところ<英語では below>」にいるのです。祭壇は先にあつたようにキリストの型であり、キリストのために死んだ者が皆、キリストとの祝福された交わりを味わうことを強調しています。やがて、過去の殉教者たちと同じように、「御座の前」(=「祭壇の低い所」)の栄誉ある場所に加わるのが、艱難期の殉教者たちです([黙示録 7 章 9 節](#))。

⁶⁶ このキリストのための苦しみの最も極端な例については、ペテロの手紙シリーズ#25「個人的な苦難」を参照。

は神のための殉教者がいましたし、このシリーズの前回の 7 つの教会の学びで見たように、スミルナの時代は信者が耐えなければならない迫害で注目されました。宗教改革の時代にも殉教者はいましたし、(西洋では一般に認められていない事実ですが)現代でもキリスト教に激しく反対している国では殉教者が出ています。しかし、艱難期、特にその後半の「大艱難期」では、イエス・キリストへの信仰と忠実さのために信者が殉教することは、これまでの迫害を何倍も上回るものとなるでしょう。このように、第五の封印は、大艱難期の後半の始まりとなる「大迫害」を表しています。艱難期の前半の大規模な信仰からの離脱(「大背教」)に続いて、14万4千人のユダヤ人伝道者の殉教(下記 V 章参照)に始まる、人類史上かつてない規模の信者への世界規模の迫害です(参照:[イザヤ 24 章 16 節](#); [エレミヤ 9 章 4 節](#), [12 章 5-6 節](#), [31 章 2 節](#), [45 章 1-4 節](#); [ダニエル 7 章 21 節](#), [7 章 25 節](#), [8 章 10 節](#), [11 章 33-35 節](#), [12 章 1 節](#), [12 章 7 節](#); [ミカ 7 章 1-7 節](#); [ゼパニヤ 2 章 3 節](#); [マタイ 13 章 21 節](#), [24 章 9 節](#), [24 章 21 節](#); [マルコ 13 章 19 節](#); [ルカ 21 章 12-19 節](#); [ヨハネ 15 章 20 節](#), [16 章 1-3 節](#); [第一ペテロ 4 章 12-19 節](#); [黙示録 7 章 9-17 節](#), [12 章 17 節](#), [13 章 7-18 節](#), [14 章 1-20 節](#), [15 章 2-4 節](#))。この迫害の詳細については、このシリーズの第 4 部「大艱難期」で詳しく説明しますが、この第 5 の封印が解かれることは、艱難期後半に限定された最初の傾向であることに注目しましょう(封印は時系列を反映していることが確認されます)。

過去、現在、そしてこれからの大迫害の殉教者たちに共通しているのは、真理に忠実であるがゆえに殺されたことです。イエス・キリストを信じる真の信者であり、神の言葉であるイエス・キリストの真の証人であるからこそ、これまでも、これからも、世の敵意を買い、その結果、悪の子分たちによって命を奪われることになるのです。すべての信者は、イエス・キリストへの真の献身と忠実な決意には、(現在の状況下では、それがどんなにあり得ないと思われようとも)そのような死の可能性が伴うという事実をはっきりさせておくべきです。殉教の危機をもたらす生ぬるい信者や似非信者ではなく、世の恨みを買って悪魔の注意を引くひねくれ者でもなく、結果に関係なく、本当にイエス・キリストを第一に考えた人だけが、この危険に直面する可能性があるのですから。しかし、このような運命をたどったすべての人は、神の慈悲深い意志から離れてそうなのではなく、またそのような終わりは恥ずべきことではなく、実際、イエス・キリストを信じる者にとっては、この世から来世への最も輝かしい移行という特権であると安心していいのです。殉教はまさに主の「苦しみを共有」して、その信仰と忠実を通して神と御言葉の力を示すことだからです(参照:[マタイ 5 章 10-12 節](#); [マルコ 10 章 38-39 節](#); [ヨハネ 21 章 19 節](#); [使徒行伝 5 章 41 節](#), [7 章 54-60 節](#), [22 章 20 節](#); [第二コリント 1 章 5-7 節](#); [ピロピ 1 章 20-30 節](#); [コロサイ 1 章 24 節](#); [第一ペテロ 4 章 13-14 節](#); [黙示録 2 章 10 節](#), [2 章 13 節](#), [14 章 13 節](#), [17 章 6 節](#))。

…ほかの者(過去のこれらの偉大な信者たち)は、更にまさったいのちによみがえる(つまり、彼らにとって命よりも価値のあるもの: [詩篇63篇3節](#)参照)ために、拷問の苦しみに甘んじ、放免されることを願わなかった。(36)なおほかの者たちは、あざけられ、むち打たれ、しばり上げられ、投獄されるほどのめに会った。(37)あるいは、石で打たれ、さいなまれ、のこぎりで引かれ、つるぎで切り殺され、羊の皮や、やぎの皮を着て歩きまわり、無一物になり、悩まされ、苦しめられ、(38)(この世は彼らの住む所ではなかった)、荒野と山の中と岩の穴と土の穴とを、さまよい続けた。(39)さて、これらの人々はみな、信仰によって[世に対して]あかしされた(字義的には「殉教した」)…(ヘブル11章35節後半～39節前半)

黙示録 6 章に登場する殉教者は、「殺された人たちの生きている姿[「魂」]」として描かれているので、特別な解説をする必要があります。この記述で重要なのは、「生きている人」(ギリシャ語のプシュケ psyche, ψυχή)という言葉が使われていることです。よく「魂」と表現されますが、(参照: [黙示録 18 章 13 節](#)と [20 章 4 節](#)の同様の表現)⁶⁷、聖書の本当の使い方では、「プシュケ-魂」は、身体と霊、そして内的自己に重点を置いた全体の「人」であり、定義上、その「人」は皆、生きています。つまり、神がご自分の栄光のためにお望みなら、悪魔とその手下が私たちをこの世から追い出すことはできても、私たちの命を奪うことは決してできない、というメッセージなのです。

また、死人の復活については、神があなたがたに言われた言葉を読んだことがないのか。『わたしはアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である』と書いてある。神は死んだ者の神ではなく、**生きている者の神である**」。(マタイ 22 章 31～32 節)

また、からだを殺しても、魂(真の命)を殺すことのできない者どもを恐れるな。むしろ、からだも魂も地獄で滅ぼす力のあるかたを恐れなさい。(マタイ10章28節)

ヨハネがここで見ている「生きている者たち」は、この世の目に映る有様とは裏腹に、皆、健在で、自分を殺したこの世に対する神の復讐の日が来るのを待ちわびているの

⁶⁷ 人間の非物質的な部分は、正しくは[人間の]霊です。この非物質的な部分は、肉体と結びついて、内面的な生命、すなわち、「心」の思考と意図を享受しています。「魂」、「心」、「霊」の聖書的用法についての詳しい説明は、「悪魔の反逆」をご覧ください: 第 3 部「人間の目的、創造と墮落」、第 II.3 節「人間の霊」、第 II.4 節「人間の二分法」を参照。

です。また彼らは「裸のまま」でいるわけではなく、彼らを与えられた「白い衣」は、私たちが熱心に待ち望んでいる復活の日まで、私たちの霊を宿し、命を保つために受ける中間期の体を象徴しています([第二コリント 5 章 1-3 節](#))⁶⁸。

第 5 の封印の開封は、相対的に、これまでの殉教の抑制の終わりを表しています。なぜなら、9 節から 11 節までの「祭壇の下」にいる信者は、「<祭壇の下にいる殉教者らと>同じように殺される運命にある兄弟たち」と表現されているので、反キリストとその信奉者の手によって殺される者たちではないからです。むしろ、この信者たちは、その将来の<第五の封印の開封>時までには殉教したすべての人たちです。彼らはまだ、地とその住民に下される主の正しい報いを待っており、また、将来の報いの場合と同様に、復活の全段階の成就を待たねばなりません([第一コリント 15 章 23 節](#); [ヘブル 11 章 39-40 節](#)参照)。この殉教者たち(アベルから艱難期の中間点まで主のために死んだすべての人々を代表していますが、数が多いように描写されているようには見えません)と、「数えきれないほどの大ぜいの群衆」と言われている「大きな患難を通して来た」人たちを比較すると、来たる迫害の強さと大きさが明らかになります([黙示録 7 章 9 節](#))。

6. 地震： 神の裁きと再臨(12-17 節)

黙示録 6 章 12～17 節

(12)小羊が第六の封印を解いた時、わたしが見ていると、大地震が起って、太陽は毛織の荒布のように黒くなり、月は全面、血のようになり、(13)天の星は、いちじくのまだ青い実が大風に揺られて振り落されるように、地に落ちた。(14)天は巻物が巻かれるように消えていき、すべての山と島とはその場所から移されてしまった。(15)地の王たち、高官、千卒長、富める者、勇者、奴隷、自由人らはみな、ほら穴や山の岩かげに、身をかくした。(16)そして、山と岩とにむかって言った、「さあ、われわれをおおって、御座にいますかたの御顔と小羊の怒りとから、かくまってくれ。(17)御怒りの大いなる日が、すでにきたのだ。だれが、その前に立つことができようか」。

7 つの封印がありますが、第六の封印は、それ自体が艱難期の動向を表す最後の

⁶⁸ 復活の身体と死後の信者の中間状態については、ペテロの手紙シリーズ # 20「復活」も参照。

封印です。つまり、実際の艱難の開始は、黙示録 8 章の第七の封印が開かれることと同義ということです。小羊の手にある封印された巻物は、封印の一つ一つが解かれな
いと読むことができないように、御霊の抑制の働きが完全に「除かれぬ限り」、艱難と
それに続く栄光(この巻物が表している)は始まることができません([第二テサロニケ 2
章 6-8 節](#)を参照)。

第六の封印は、私たちの主イエス・キリストの再臨とその栄光の日に伴うすべての出
来事(特にハルマゲドンの戦い)を表しています。明らかにこの第六の封印は、多くの
出来事と詳細を非常に簡潔でありながら力強いスケッチに凝縮しています(そして、よ
り波乱に満ちた大艱難期を取り扱う上で四つの封印から二つの封印に減らすことで
艱難期後半の大艱難期の封印は第五、第六の二つ)、私たちがこの研究の始めから
注意を促してきた、これから起こるこれらの劇的出来事の前例のない激しさと素早い成
り行きを表しています:特に黙示録 1 章 1 節<「すぐにも起こること」の説明…>につい
て記した第一部を参照してください)。

主はすべての国にむかって怒り、そのすべての軍勢にむかって憤り、彼
らをことごとく滅ぼし、彼らをわたして、ほふらせられた。彼らは殺されて
投げすてられ、その死体の悪臭は立ちのぼり、山々はその血で溶けて流れ
る。天の万象は衰え、もろもろの天は巻物のように巻かれ、その万象はぶ
どうの木から葉の落ちるように、いちじくの木から葉の落ちるように落ち
る。(イザヤ書 34章2-4節)

ここで出てくる再臨の特徴で、旧約聖書の預言でもよく知られているのは、大地震
([イザヤ 29 章 6 節](#); [エゼキエル 38 章 19 節](#); [ハバクク 3 章 6 節](#); 次も参照:[ゼカリヤ 14
章 3-5 節](#); [黙示録 6 章 12 節](#))、超自然な暗闇([イザヤ 13 章 10 節](#), [60 章 2 節](#); [エゼキ
エル 32 章 7 節](#); [ヨエル 2 章 31 節](#), [3 章 15 節](#); [ゼカリヤ 14 章 6-7 節](#))が挙げられま
す。天の溶解と星の落下([イザヤ 13 章 10 節](#), [34 章 4 節](#); [マタイ 24 章 29 節](#))、これら
はすべて、差し迫った神の怒りに直面して、地球の住民に恐怖をもたらします([イザヤ
2 章 10 節](#), [2 章 19-21 節](#), [34 章 2-3 節](#); [ホセア 10 章 8 節](#); [マラキ 3 章 2 節](#); [ルカ 21
章 25-26 節](#), [23 章 30 節](#))。「星が落ちる」ことについては、聖書は現代の科学用語で
表現されていないことを指摘しなければなりません。つまり、私たちの現代的な表現に
おける「星」とは、非常に学術的なものであり、主の再臨に先立つ流星雨とは規模がま
ったく異なるものなのです([マタイ 24 章 29 節](#); [マルコ 13 章 25 節](#))。<今のところ現代
では、流星(落ちる星)が表れても天体が揺り起こされるほどのものを見ないが、その時
には>すべての山や丘を揺るがす世界規模の大地震と主の降臨直前の超自然的な
暗闇の期間に加えて、これらの集中的な流星雨は、主に反対するすべての人々の勇

気を失わせます(そして、上記の 17 節で説明した反応を引き起こすのです)。

(9)見よ、主の日が来る。残忍で、憤りと激しい怒りとをもってこの地を荒し、その中から罪びとを断ち滅ぼすために来る。(10)天の星とその星座とはその光を放たず、太陽は出ても暗く、月はその光を輝かさない。(11)わたしはその悪のために世を罰し、その不義のために悪い者を罰し、高ぶる者の誇をとどめ、あらがる者の高慢を低くする。(12)わたしは人を精金よりも、オフルのこがねよりも少なくする。(13)それゆえ、万軍の主の憤りにより、その激しい怒りの日に、天は震い、地は揺り動いて、その所をはなれる。(イザヤ書 13 章 9-13 節)

ここに書かれている天が「巻き上げ」られること(詩篇 102 篇 25-27 節; [イザヤ 51 章 6 節](#); [マタイ 24 章 35 節](#); [ヘブル 1 章 11-12 節](#), [12 章 27 節](#); [第二ペテロ 3 章 10-11 節](#); [黙示録 21 章 1 節](#) 参照)は、さらに、サタンとその追随者の天からの退去を象徴しています(他の場所で星として描写されている天使は、しばしば墮落した／落ちたものとなっていることを確認: [士師記 5 章 20 節](#); [ヨブ 25 章 5 節](#), [38 章 7 節](#); [イザヤ 14 章 12-13 節](#), [40 章 26 節](#) [c. [ルカ 2 章 13 節](#)]; [ルカ 10 章 18 節](#); [ユダ 1 章 13 節](#); [黙示録 1 章 16 節](#), [1 章 20 節](#), [2 章 1 節](#), [3 章 1 節](#), [8 章 10-11 節](#), [9 章 1 節](#), [12 章 1-4 節](#))また、父の永遠の王国を構成する新しい天と地のための現在の天と地が過ぎ去ってしまうことの予告です([イザヤ 65 章 17 節](#), [66 章 22 節](#); [マタイ 13 章 43 節](#); [第一コリント 15 章 24-28 節](#); [第二ペテロ 3 章 13 節](#); [黙示録 21 章 1-2 節](#))。

V. 144,000 人の封印 ヨハネの黙示録 7 章 1-8 節

黙示録 7 章 1~8 節

(1)この後、わたしは四人の御使が地の四すみに立っているのを見た。彼らは地の四方の風をひき止めて、地にも海にもすべての木にも、吹きつけないようにしていた。(2)また、もうひとりの御使が、生ける神の印を持って、日の出る方から上って来るのを見た。彼は地と海とをそこなう権威を授かっている四人の御使にむかって、大声で叫んで言った、(3)「わたしたちの神の僕らの額に、わたしたちが印をおしてしまうまでは、地と海と木とをそこなってはならない」。(4)わたしは印をおされた者の数を聞いたが、イスラエルの子らのすべての部族のうち、印をおされた者は十四万四千人であった。

(5)ユダの部族のうち、一万二千人が印をおされ、ルベンの部族のうち、一万二千人、ガドの部族のうち、一万二千人、(6)アセルの部族のうち、一万二千人、ナフタリの部族のうち、一万二千人、マナセの部族のうち、一万二千人、(7)シメオンの部族のうち、一万二千人、レビの部族のうち、一万二千人、イサカルの部族のうち、一万二千人、(8)ゼブルンの部族のうち、一万二千人、ヨセフの部族のうち、一万二千人、ベニヤミンの部族のうち、一万二千人が印をおされた。

四つの風の天使たち：

ここで言及されている四つの風は神の裁きの道具であり([エレミヤ 49 章 36-37 節](#);[列王記上 19 章 11 節](#);[ヨブ 1 章 19 節](#)参照)、それを制御する四人の選ばれた天使は、神に代わってその裁きを執行する代理人となります。

(1)わたしがまた目をあげて見ていると、四両の戦車が二つの山の間から出てきた。その山は青銅の山であった。(2)第一の戦車には赤馬を着け、第二の戦車には黒馬を着け、(3)第三の戦車には白馬を着け、第四の戦車には、まだらのねずみ色の馬を着けていた。(4)わたしは、わたしと語るみ使に尋ねた、「わが主よ、これらはなんですか」。(5)天の使は答えて、わたしに言った、「これらは全地の主の前に現れて後、**天の四方に出て行くもの**〈風-新共同訳〉です。(6)黒馬を着けた戦車は、北の国をさして出て行き、白馬は西の国をさして出て行き、まだらの馬は南の国をさして出て行くのです」。(7)馬が出てくると、彼らは、地をあまねくめぐるために、しきりに出たがるのであった。それで彼(=主)が「行って、地をあまねくめぐれ」と言うと、彼らは地を歩きめぐった。(8)すると彼はわたしを呼んで、「北の国をさして行く者どもは、北の国でわたしの心(怒り)を静まらせてくれた〈英直訳:わたしの怒りを北の地に定めさせた〉」と言った。(ゼカリヤ6章1-8節)

ゼカリヤでは、主の御前から吹き出す風を制御する天使によって、その全過程を見ることができましたが、黙示録第7章では、4つの風がすでに配置され、地上に放たれるよう備えられています⁶⁹。どちらの場合も、これらの破壊的な風は天使によって指揮さ

⁶⁹ 最初の4つの封印(その馬は艱難期の動向を象徴している)の文脈を考えると、ゼカリヤ6章の

れていますが、ゼカリヤ書 6 章では風に＜破壊を＞指揮し、ヨハネの黙示録 7 章では風を引き止めているのです。ゼカリヤの記述されている状況では、神の裁きのプロセスがすでに始まった段階であり、神の怒りの主な受け手は「北の国」(上記の 8 節の訳に注意、誤訳されている場合がよくあります)です。黙示録第 7 章に登場する四つの風は、特定の地域や国を破壊するために吹いているのではなく、神の警告の裁き(「ラッパの裁き」)を行うために、全世界に放たれる寸前の段階まで来ています(ゼカリヤ 6 章では、歴史上のバビロンを破壊するために二種類の風が吹いた)。

上で見たように、「地の四すみ」([黙示録 7 章 1 節](#))という表現は、地球全体を指す聖書の一般的な表現であり、ここでは、この四人の天使とその風による警告の裁きの範囲と世界規模の影響の完全性を強調しています([エゼキエル 37 章 9 節](#); [ダニエル 7 章 2 節](#), [8 章 8 節](#); [マタイ 24 章 31 節](#))。ゼカリヤ 6 章が明らかにしているように、「四つの風」とその天使は地球の「四隅」に常駐しているのではなく、主の裁きの命令を待ち望んで、主の前に立っていることを理解することが重要です。しかし、ここでは、最後の封印が解かれるのを見越して、あらかじめ配置されています。その時点で、7 回にわたる「ラッパの裁き」(艱難期の前半に行われる人類への悔い改めのための神の定められた順に一連の警告)が滞りなく開始されるのです。具体的には、四つの風の天使が最初の四つのラッパの裁きを指揮する責任を持っています。これらの裁きはすべて空から起こるものです(それぞれ、雹と火が地に投げつけられ、燃える山が海に投げ込まれ、にがよもぎ星が世界の水に投げ込まれ、太陽、月、星の光が打ち落とされます)。黙示録の第 7 章では、天使たちは神のしもべの封印が完了するまで風を抑えるように言われています。これは、艱難期の嵐が起こる前の平穏な期間を示唆しています(第 7 の封印が解かれた後の天国の「半時」=半年間の静寂と静けさを参照。[黙示録 8 章 1 節](#))。

144,000 人

この箇所は、144,000 人について、部族ごとに選ばれたことと封印の事実以外、ほとんど教えてくれません。しかし、[黙示録 14 章 1-5 節](#)の記述と、主によって派遣された 12 人([マタイ 10 章 1-42 節](#); [マルコ 6 章 7-12 節](#); [ルカ 9 章 1-6 節](#))と 72 人([ルカ 10 章 1-20 節](#))の働きと対応して預言的に予示されているので、彼らの働きは基本的に再現されることが可能です。その詳しい説明は艱難期の前半(つまり、144,000 人の働きの期間)を扱うこのシリーズの次回＜第三部＞に掲載しますが、(特に、第 7 章の解釈

馬は(天国的なものですが)実在するものであることに注意すべきです。[黙示録 19 章 11-14 節](#)のキリストと復活した信者の軍隊の馬と馬を参照してください([列王記下 2 章 11 節](#), [6 章 17 節](#); [詩篇 68 章 17 節](#); [イザヤ 66 章 15 節](#); [ハバクク 3 章 8 節](#), [3 章 15 節](#); [ゼカリヤ 1 章 8-11 節](#)参照)。

を誤るだけでなく、神の言葉の実際の教えにもかかわらず、自分自身の目的を推進するためにそれを利用する多くの異端やカルトのことを考慮すると)ここで最初に聖書によって確認できる 144,000 人についての主要ポイントを述べておくことは有益です。

福音書に書かれている 12 人と 72 人が、靈的に言えば、御国の到来が近いことに備えて同胞の心を整えるために主の代表として送り出されたように([マタイ 10 章 7 節](#); [マルコ 6 章 12 節](#); [ルカ 9 章 2 節](#), [9 章 6 節](#), [10 章 1 節](#), [10 章 9 節](#); [ルカ 9 章 52 節](#)も参照)、144,000 人も同様に主の代表として、御国の到来を具体的に実現するために同胞の心を備えるために送り出されていることを最初に記しておくことができます。このように、初臨と再臨の使者は、いずれもイエス・キリストの特別な代理人として、同じような役割と機能を担っているのです。そして、主の特別な代表として、144,000 人の場合は、主が 12 人と 72 人のために定めた同じ任務を遵守するだけでなく、(肉を持って生まれた者ができる限り)主の生活と歩みに似せることがふさわしいのです⁷⁰。

144,000 人の特徴とその働き：

1. 彼らはユダヤ人です：主は人間的に明らかにユダヤ人であり([ルカ 3 章 23-38 節](#); [ローマ 9 章 5 節](#))、この 144,000 人はイスラエルの 12 部族に属すると明確に記されています(各部族から 12,000 人が指名されています)。このギリシャ語本文には(あるいは、著者が見たどの英訳にも)、144,000 人は文字通りユダヤ人の子孫であるという以外の見解に信憑性を与える正当な理由はありません。また、彼らはクリスチャンであり、ユダヤ人信者であり、イエス・キリストに従う者であり、「わたしたちの神の僕ら」([黙示録 7 章 3 節](#))であることも明らかです。

この聖句を象徴的であるとか、描写が正確でないとか、他の方法で読もうとする試みが何千年にもわたって行われてきましたが、このような試みは聖書には何の根拠も基礎も正当性もないことを強調することは重要です。確かに 144,000 人は「聖書の有名人」であり、この箇所を読んだクリスチャンが彼らのユニークで素晴らしい働きの一部になりたいと思うのは当然です(それが殉教で終わるとしても、あるいはその事実のためかもしれません)。しかし、ヨハネやヤコブのような偉大な使徒でさえも、自分たちにはできないこと(例えば、イエスの右側に座り、左側に座ることを望んだかもしれないように：[マタイ 20 章 20-23 節](#))、そのような榮譽においては神の御心に従わなければなり

⁷⁰ 靈的に言えば、これはもちろん、すべての信者に与えられた命令です([第一コリント 11 章 1 節](#); [第一テサロニケ 1 章 6 節](#)参照)。ペテロの手紙シリーズ#17「キリストに倣う」参照。

ませんでした。ですから、144,000 人の場合、このエリート集団のメンバーは神の御心に従って、神の選びによってのみ与えられるのであって、すべての信者は、神の恵みの中で自分が任命された役割、務め、場所を謙遜に、辛抱強く、熱意をもって受け入れ、騙されて神のみ心でない地位を自分のものにしようとすべきではありません(参照：[ルカ 14 章 7-11 節](#))。144,000 人はユダヤ人の先祖を持ち、上記の翻訳に書かれている部族の出身です。また、「ユダヤ人の先祖」が何を意味するかも明確であり、解釈上の飛躍に左右されてはなりません。確かに今日、ユダヤ人の先祖を持つ者が自分の部族を知ることは期待できませんが、異邦人の先祖を持つ者が自分がユダヤ人でないことを自覚しているのと同様に、ユダヤ人の先祖を持つ者は概して自分がユダヤ人であることを自覚しているものです。144,000 人の働きにおいて、彼らがユダヤの伝統と文化に精通していることが**重要である**ことを考えると、彼らの人数のかなりの部分が「ユダヤ人であることを知らない」人々で構成されるとはとても思えません。確かに理論的な可能性はありますが、144,000 人の働きの中心は「イスラエルの失われた羊」であり、適切な文化的視点がなければ、この働きの遂行は難しいでしょう。144,000 人は名目上ユダヤ人であるだけでなく、文化的にもユダヤ人であり、民族の伝統に精通して、彼らに証するのに適していることがすべての点で示されているのです。

ここで、多くの「失われた十部族」説に全面的に反論することは時間的にも空間的にも余裕がありません。アッシリアによって追放された人々が数世代以内に滅びたとしても(あるいは完全に世俗化したとしても)、「失われた十部族」の現在の位置や構成に関する奇妙な理論に**頼らずとも**、征服されなかったユダヤ民族の一部には、彼らの血統を永続させてこの預言を実現させるために、この十部族の血を引く人々が十分に存在し得ることを結論づけるほどの証拠は、聖書に示されているだけでも十分です([歴代誌上 9 章 2 節](#); [歴代誌下 10 章 17 節](#), [11 章 13-17 節](#), [15 章 9 節](#), [30 章 6 節](#); また [34 章](#) 各箇所参照)。いずれにせよ、仮にこのような奇想天外な説にいくらかの注目に値するものがあっても、それは「ユダヤ教を知らないユダヤ人」のケースであり、このような人たちは上記の理由でここで論じられる聖職の対象から除外されます。また、ヨハネが黙示録で言っている 144,000 人のリストが、選ばれた異邦人の「霊化」であるとも言えません。聖書のどこにも、異邦人をユダヤ人として個別に描写したものはなく、特にユダヤ人の特定の部族に割り当てたものはないのです。ですから、この世では異邦人もユダヤ人も霊的にキリストの中で一つであり([ガラテヤ 3 章 28 節](#); [エペソ 2 章 12-18 節](#))、永遠には、キリストに従った異邦人の私たちが現実にイスラエルと一つになることは事実ですが([エペソ 3 章 6 節](#); [ローマ 8 章 16-17 節](#), [8 章 32 節](#); [第一コリント 12 章 2 節](#); [ガラテヤ 3 章 29 節](#); [ピリピ 3 章 3 節](#); [第二ペテロ 1 章 4 節](#))、⁷¹ しかした

⁷¹ 『サタンの反乱-艱難期の序章』第 5 部 「裁き、回復、置き換え」II.8.c「4 つのギャップとその 12

がら、私たちがこの世にいる間は、肉体的に区別があり、ユダヤ人の祖先を持つ者は地位と身分の高さと誇りがあります(ローマ 3 章 1-2 節, 9 章 4-5 節, 11 章 11-24 節; ガラテヤ 2 章 15 節; ピリピ 3 章 4-6 節)。

この 144,000 人のすべて、あるいはほとんどが現在のイスラエル出身である必要はありません。実際、現在ユダヤ人は広く拡散し、144,000 人の集団がそれぞれの言語で、また独自の文化的観点から福音のメッセージを受け取る必要があることを考えると、そのような事態<彼らが皆イスラエル出身でなければならないということ>はあり得ないでしょう。さらに、144,000 人に印をおす天使がそのメッセージを地球の四隅にいる四人の天使に伝えていることは、144,000 人に印がおさされている間、地球全体が保護されなければならない地域であることを示しています(したがって、彼らは世界中にいるのです)。(彼らが独身男性で童貞であるからといって、女性や既婚者の役割を軽んじているわけではないと同じく)144,000 人がすべてユダヤ人で異邦人が含まれていないからといって、神の計画における異邦人の役割を軽んじていると考えるべきではありません。むしろ、これは特別な目的を持った特別なミニストリーであり、それに応じて特別な要件、特にユダヤ人の視点を理解し、つまずかせないようにする必要のあることを理解しなければなりません(マタイ 27 章 18 節; 使徒行伝 13 章 43-45 節, 17 章 5 節, 22 章 21-22 節; ローマ 10 章 2 節; ルカ 15 章 25-32 節)⁷²。

ユダヤ人の心の奥底には、神に対する情熱、「熱意」があるのです。例えば詩篇を読み返すと、これらの歌から滲み出る神への深く生き生きとした愛と感謝に深い感動を禁じ得ず、しばしば完全に模倣することは不可能と思われるほどの神への情熱の度合いが表されています。彼らの全能の神に対する特別な思い、特に、不信仰の固まりに陥っているときでも、その思いが持続していることは、異邦人にとって理解しがたいことが多いのです。この「熱心さ」は今のところキリストに対して抵抗があるからです(ローマ 10 章 2 節; 箴言 19 章 2 節)。この 144,000 人のミニストリーで驚くべき栄光の一つは、イスラエルがこのユダヤ人の証人によってなされた否定できない神の証しに直面した時、彼らの同胞の多くが実際にイエスに立ち返り、最も情熱的で熱心な方法でそうするという事です。このように、否定的な熱心さが肯定的な熱心さに一変することは、教会を破壊しようとしていた使徒パウロが、主の奇跡的な介入によってその心が変わられ、

日間のグループ分けの象徴」ポイント 5「イスラエルは究極の組織である」を参照してください。

⁷² 多くの異邦人クリスチャンは、教会におけるユダヤ人の歴史的な重要性や神のご計画におけるユダヤ人の優位性を十分に理解していません。私たちは皆、私たちの主を証しする責任がありますが、常に繊細さをもってそうしなければなりません(1 コリ.9:19-23 参照)。

最も強固な柱の一つになったことも、その一例として挙げられます([使徒行伝 9 章 1-22 節](#), 22 章 3-21 節, 26 章 9-23 節)。144,000 人は、確かに奇跡的な働きによって本物であることが明らかになります(下記参照)、完璧なタイミングで、彼らの完璧な働きに応じて、神に選ばれた人々が世界中で大勢キリストに立ち返り、それまで頑なだった多くの人々が心から変わり、熱心な者となるのが、より大きな奇跡となることでしょう。

2. 彼らは男性です： 私たちの主は男性です。そして、イスラエルの失われた羊に主が間もなく戻られるという良い知らせを広めるために選ばれたこの 144,000 人も男性なのです。この箇所と黙示録 14 章では、144,000 人について書かれていますが、ギリシャ語の形容詞と分詞は男性格です。十二人の弟子たち(全員男性)と七十二人(同様に男性修飾語のみで記述)の例も、144,000 人の全員が男性であることを示しています。また、144,000 人が「女と」関係を持ったことがないという記述も、それ以外の方法で理解するのは難しいということもできます。144,000 人が男性であるという事実は、神の計画における女性の役割を軽んじるものではありません(異邦人や既婚者の役割を軽んじるものでもありません)。むしろ、これは特別な目的を持った特別なミニストリーであり、それに応じて特別な必要条件があることを理解しなければなりません。この 144,000 人の特殊性は、ユダヤ教の伝統、特にモーセの律法以前から聖職の役割が男性に限定されていたことに照らして理解することができます。この任務ができるだけ効果的に遂行されるための最優先事項の一つは、前のポイントで見たように、特定の文化的背景を抱えたユダヤ人につまづきを与えないため、男性だけの幹部だけが用いられることは必然であったと思われます。この原則については、使徒パウロの言葉が当てはまるでしょう。彼はできる限り、自分自身を「すべての人に対して、すべての人のようになった」とし、キリストのためにできるだけ多くの命を勝ち取るために、聴衆の背景がどんなものであれ、自分をその背景に適応させました([第一コリント 9 章 19-23 節](#))。

3. 彼ら<144,000 人>は童貞です： 主は地上の生涯を通じて童貞でしたが、これはイスラエルの心を主に立ち返らせる 144,000 人の先駆者の特徴でもあります。[黙示録 14 章 4 節](#)で 144,000 人を童貞と表現しているのは、決して象徴的なことではありません。文脈上、そのような解釈を可能にするものは何もないことに加え、「彼らは童貞だから」という記述は、結局のところ、これらの若者が「女性と一緒に罪を犯していない(つまり、女性に誘惑されていない)」という記述をさらに説明するものなのです。ここで重要なのは、女性を一律に非難しているのではない、ということです。むしろ、これは 144,000 人のグループ全体が独身で未婚の男性であるだけでなく、独身であるために不当な性的関係を持ったことがないということを述べているに過ぎません。私たちの主がそうであったように、144,000 人もそうでしょう。この方程式の未婚の部分は、彼らが貞節を保っているという点と同じくらい重要です。なぜなら、未婚であることによって、

144,000 人が完成させるために召された、この類の働きへ主要な障害となるようなものを避けることができるからです。後で詳しく説明しますが、これらの証人は、最大の犠牲を払って旅し、窮乏と迫害に耐え、殉教に至る人生を送るよう求められます。そのような試練に参加するために家計を支える者がいなくなることは、配偶者にとっても家族にとっても公平とは言えません。また、証人の妻や家族が家にいて、証人の交わりや支えを奪われ、迫害を受けることを余儀なくされることは、証人の務めに支障をきたすことになりかねません。明らかに、神は私たち一人ひとりが、私たちに依存している人々に対して正しい行いをすることを期待しておられます([第一テモテ 5 章 8 節](#)参照)。ですから、144,000 人がそのユニークな働きによって要求される犠牲を払うことができる唯一の方法は、まず独身と禁欲の生活に身を投じるという犠牲を払うことなのです。この点において、彼らは主や偉大な使徒たち(パウロ、そしておそらくヨハネ、[第一コリント 7 章 7-8 節](#); [9 章 5-6 節](#)を参照)に従っています。

また、この 144,000 人の特別な犠牲と献身は、神の計画における既婚者、寡婦、離婚者の役割を軽んじるものと考えるべきでもありません(異邦人や女性の役割を卑下するようなものではありません)。モーセもダビデもペテロも結婚していましたし、イエスの母親も洗礼者ヨハネも結婚していました(傑出した信者を挙げればきりがありません)。むしろ、これは特別な目的を持った特別なミニストリーであり、それに応じて特別な要求があることを理解しなければなりません。童貞であるという事実は、その時の世界の性的不道徳の高まりとの重要な対照をなすでしょう。この傾向は、艱難期に爆発する偶像崇拜とその不道徳な儀式にますます溶け込み、最後には反キリストがあからさまな崇拜の対象となる、完全に退廃した宗教に至ります。

4. 彼ら<144,000 人>は、イスラエルに伝道するために遣わされます: 主は「割礼のある者の僕となられた者」となり([ローマ 15 章 8 節](#); [使徒行伝 3 章 26 節](#)参照)、「イスラエルの失われた羊に」([マタイ 15 章 24 節](#); 十二使徒:[マタイ 10 章 6 節](#))遣わされましたが、144,000 人の使命も本質的に同じ目的を持っているのです。だからといって、異邦人や教会の異邦人による伝道が続かないわけではありませんし、神から来る特別な警告の裁きと同時に、真理を広めるための特別な恵みが与えられないということでもありません([黙示録 14 章 6-7 節](#)の天使による「永遠の福音」の全世界への宣言を参照ください)。しかし、神の特別な民がその特別な働きを受けることは全く適切なことです([使徒行伝 3 章 25-26 節](#), [13 章 46 節](#); [ローマ 1 章 16 節](#), [3 章 1 節](#)参照)。異邦人のところへ「行くな」という命令は、十二使徒([マタイ 10 章 5 節](#); [10 章 23 節](#))と同様に 144,000 人にも適用され、明らかに七十二人([ルカ 10 章 1 節](#)参照)にも適用され、それはキリストの初臨時の働きにおける原則でもありました([マタイ 15 章 21-28 節](#); [マルコ 7 章 24-30 節](#); [ヤコブ 1 章 11 節](#); [使徒行伝 3 章 26 節](#); [ローマ 15 章 8 節](#)を参照)。

このようなアプローチは、これらすべての宣教の基本的な目的がメシアのためにイスラエルを備えることであることを考えると、納得いくものです。「悔い改めよ、まことをもって神に立ち返れ、御国が近づいたのだ」という言葉は、十二人や七十二人の場合と同じように、144,000 人の呼びかけになります ([マタイ 10 章 7 節](#); [マルコ 6 章 12 節](#); [ルカ 9 章 2 節](#), [9 章 6 節](#), [10 章 9 節](#); [ルカ 9 章 52 節](#)を参照)。

このことは、144,000 人が異邦人との接触が全くないことを意味してはいません。主がスロ・フェニキアの女 ([マタイ 15 章 21-28 節](#); [マルコ 7 章 24-30 節](#))、サマリヤの女 ([ヨハネ 4 章 1-42 節](#))、ローマの百卒長 ([マタイ 8 章 5-13 節](#); [ルカ 7 章 1-10 節](#)) に恵み深く応えられたことを参照してみるとよいでしょう。しかし、イスラエルに遣わされた私たちの主が、最後までこの卓越した焦点をご自分のミニストリーに維持されたように、144,000 人もそうであるべきです。そして、この印象的で世界的な働きは、艱難期の最初の殉教の大波で終わるので、それ自体が神の福音の力と真理の全世界への証となるという重要な意味があります ([マタイ 10 章 18 節](#))。パウロは異邦人への宣教は同胞を「奮起」させる目的もあり、競争心からでもキリストを信じてくれるようにと願っていました ([ローマ 11 章 13-14 節](#); [ピリピ 1 章 15-18 節](#)を参照)。ある意味で、この現象は艱難期には逆転し、144,000 人の働きとそれに応答するユダヤ人の行動は、少なくとも異邦人の「奮起」を誘発する機運となります。この点で私たちは、使徒の時代以来見たことのない、教会におけるユダヤ人のリーダーシップと卓越性の再出現の別の面を見ることができるのです⁷³。

5. 奇跡を起こす権威が与えられている: イエスの奇跡は、苦しみを和らげ、預言を成就すると共に、彼を真の神の子、メシアとして明確に印すことになる権限の徽章(きしょう)として、父から彼に与えられました ([ヨハネ 5 章 36 節](#), [10 章 25 節](#), [10 章 38 節](#), [14 章 11 節](#); [マタイ 11 章 1-6 節](#)と[ルカ 7 章 18-23 節](#)も参照)。主が同様の奇跡を行う能力を十二使徒と七十二人に、そして現れることになっている 144,000 人に委ねられるのも、同様に重要な目的を持っています。人は神の権威をもって話していると主張することができますが(そして、艱難期には、そうした主張はいまだかつてなかったほど偽りに満ちたものになるでしょう)、神がその人に力を与えない限り、誰が神の力をもって行動できるでしょうか。神の力と権威を示すことは、常に奇跡の主要な目的であり、私たちは紅海でのモーセとカルメル山でのエリヤを、神の油注がれた者の手を通して神から与えられた明確な「しるし」にイスラエルが反応した優れた例としてみることができます(それぞれ[出エジプト 14-15 章](#)と[列王記上 18 章 20-40 節](#)参照、[マタイ 12 章 38-42 節](#)と[第一コリント 1 章 22 節](#)を参照)。同じように、144,000 人に与えられる奇跡的な業は、

⁷³ 以前にも取り上げた現象:「[サタンの反乱](#)」の第五部-[艱難時代の背景](#)」第 5 部:「[裁き、回復、置き換え](#)」、セクション II.8.b.i「[イスラエルの独自性](#)」を参照。

心が特別に硬くなっていないすべての人に、彼らのメッセージが真実であることを示すのに役立ちます。このメッセージの検証は、神の民のための神の恵み深い行為であり、彼らの宣教の効果を高め、そうでなければ立ち返ることのなかった多くの人々が、唯一の真の道、すなわち、唯一のメシアである主、救い主イエス・キリストによって神のもとに帰るように導かれることは間違いないでしょう。特に、彼らに与えられた奇跡は、私たちの主(と初期の教会の使徒たち)の奇跡を思い起こさせるものとなります。

・病人を癒す([マタイ 10 章 1 節](#), [10 章 8 節](#); [マルコ 6 章 7 節](#); [ルカ 9 章 1-2 節](#); [ルカ 10 章 9 節](#); [マタイ 4 章 24 節](#) および福音書の至る箇所。また[使徒行伝 5 章 15-16 節](#), [8 章 5-7 節](#), [28 章 8-9 節](#))。この癒しの迅速かつ劇的な性質は、神によるものであることを疑わせないでしょう。さらに、病気が取り除かれることは、いつものようにイエス・キリストへの信仰による罪の赦しの痛切な象徴です(参照:[イザヤ 53 章 4-5 節](#); [ルカ 5 章 17-26 節](#))。

・悪霊を追い出す([マタイ 10 章 1 節](#), [10 章 8 節](#), [マルコ 6 章 7 節](#), [6 章 12 節](#); [ルカ 9 章 1 節](#), [10 章 17 節](#), [10 章 20 節](#); [ルカ 8 章 26-37 節](#) 福音書のいたるところに記されています。そして[使徒行伝 5 章 16 節](#), [8 章 7 節](#), [16 章 16-18 節](#), [19 章 11-13 節](#))。私たちが思っている以上に、現代は悪魔憑きが多く、来たる艱難期には、このような悪魔の支配に対する現在の< 阻止する力による >抑制が著しく減少し、真のエクソシズムの奇跡が明らかになり、歓迎されることは間違いないでしょう。さらに、悪霊を追い払うことは、いつものようにイエス・キリストへの信仰によって、闇の王国から光の王国へと解放されることの強烈な象徴となります([ルカ 10 章 17-18 節](#); [コロサイ 1 章 13-14 節](#) を参照のこと)。

・死者の蘇生([マタイ 10 章 8 節](#); [マルコ 5 章 37-43 節](#); [ルカ 7 章 11-17 節](#), [7 章 22 節](#); [ヨハネ 11 章 1-44 節](#); および[使徒行伝 9 章 36-42 節](#); [20 章 12 節](#)) 死者の生命回復ほど劇的で、否定し難い奇跡はあまりないでしょう。例えば私たちの主の場合、ラザロをよみがえらせたことは多くの関心呼び集め([ヨハネ 12 章 9 節](#))、多くの反対を招きました([ヨハネ 11 章 45-47 節](#), [12 章 10 節](#))。さらに死者のよみがえりは、いつものようにイエス・キリストへの信仰によって、墓から永遠の命に解放されることの強烈な象徴となります([ヨハネ 11 章 23-25 節](#); [エペソ 2 章 6 節](#); [第一ヨハネ 3 章 14 節](#) を参照してください)。

・危険からの奇跡的な保護([ルカ 10 章 19 節](#); [ルカ 4 章 28-30 節](#); [ヨハネ 7 章 30 節](#); [8 章 59 節](#); [10 章 39 節](#); [使徒行伝 12 章 1-10 節](#), [28 章 3-6 節](#) を参照してください)。彼らは人間の目に見えない方法で保護されるだけでなく(すな

わち、彼らの印; 下記参照)、その真実性の証しとして、またさらなる確証として、あからさまな死の危険からの目に見える奇跡的な救出の恩恵を受けるでしょう。

すべてのそのような活動と同様に、過去にそうであったように、144,000 人の奇跡的な活動は、過度に大規模ではなく、彼らが現在活動しているどのコミュニティにおいても、イスラエルの失われた羊から心ある聴衆を獲得するように設計されると考えてよいでしょう(すなわち、癒し、悪魔払いなどは彼らの働きの目的ではなく、手段になるでしょう)。

6. 彼らは特別な行動規範に従います: イエスのしもべとしての生き方、それはイエスの初降臨の間中、真の人間性を身につけ、人間の制約の中で活動するという意図的な自己制限に最も顕著に現れています([ピリピ 2 章 5-10 節](#); 以下も参照: [イザヤ 42 章, 49 章, 52-53 章](#); [マタイ 20 章 28 節](#); [ルカ 22 章 27 節](#); [ヨハネ 1 章 1 節](#) および [1 章 14 節, 5 章 18 節, 10 章 30 節, 14 章 9 節, 17 章 5 節](#); [ローマ 8 章 3 節, 9 章 5 節](#); [第二コリント 8 章 9 節](#); [第一テモテ 2 章 5-6 節, 3 章 16](#); [ヘブル 2 章 9-18 節, 10 章 5-10 節](#))⁷⁴ 独身を維持することに加えて(上記第 3 項目目参照; [イザヤ 53 章 8 節](#)参照)、144,000 人が従う特別な「奉仕者の行動規範」は、他の多くの重要な点でも主が採用したものと類似しています。このような極端な献身と完全な犠牲(死に至るまで)の生活は、私たちの主の場合と同様に、神への忠誠心、神からの承認、メッセージの真実性などに関するあらゆる疑いを(客観的に観察するすべての人にとって)取り除く役割を果たすでしょう。この寄留者のライフスタイルでは、本当に「利害の衝突」が一切なく、144,000 人が利己的な動機でこのような難しい務めを引き受けているのではないかと、公正な心を持つ人であれば、疑う理由は少しもないでしょう。要するに、私たちの主がそうであったように、彼らの性格とそのメッセージの特徴は、細部にわたって、いつでも正しいものなのです。[黙示録 14 章 5 節](#)でヨハネが彼らの人生と働きを要約しているように、「彼らの口には偽りがなく、彼らは傷のない者」です。その結果、彼らはその完璧な行動によって、ありとあらゆる批判を黙らせるのです(この原則は、すべての信者が留意して心に刻むべきものです: [第一ペテロ 2 章 15 節](#)を参照)。

・彼らの助け(癒しなど)とメッセージは恵みに基づいて、無償で提供されます([マタイ 10 章 8 節](#))。

⁷⁴ 使徒パウロの宣教生活も、この点で驚くほどよく似ています([第一コリント 4 章 8-13 節](#); [第二コリント 4 章 7-12 節, 6 章 3-10 節, 11 章 16-33 節](#); [ピリピ 3 章 7-11 節](#)、その他使徒行伝とパウロ書簡集の各所)。「キリストに倣う」([第一コリント 11 章 1 節](#))ことを考えれば、驚くことではありません。

- ・彼らは完全に神の日ごとの供給に依存します([マタイ 10 章 9-10 節](#); [ルカ 9 章 3 節](#), [10 章 4 節](#))。
- ・彼らのミニストリーは、真剣に、目的を持って行われます([ルカ 10 章 4 節](#))。
- ・巡回生活をします([ルカ 9 章 6 節](#); [マタイ 10 章 11 節](#), [10 章 23 節](#))。
- ・彼らは奉仕する人々の施しに、全面的に依存しますが([マタイ 10 章 11-15 節](#); [ルカ 9 章 4 節](#), [10 章 5-7 節](#))、お金を蓄える機会がありません(すなわち、[マタイ 10 章 10 節](#)では報酬として「部屋と食事」だけ)。
- ・彼らは、「ふさわしい」家を熱心に探しながら、支援を求め、受け入れるという公然、公明な方針を維持します(この方針は、「ふさわしい」家を見つける前は、移動中に野外で多くの夜を過ごすことを伴うでしょう。[マタイ 10 章 11-15 節](#); [ルカ 9 章 4 節](#), [10 章 5-7 節](#))。
- ・特定の現場から離れる場合は 1) 任務が完了した時([マタイ 10 章 11 節](#); [ルカ 9 章 4 節](#), [10 章 7 節](#)) 2) その町がふさわしくないことが分かった時([ルカ 9 章 5 節](#); [10 章 10-12 節](#) 参照) 3) 迫害によって離れざるを得ない時([マタイ 10 章 23 節](#)) のみという公然かつ厳格な方針を維持します。
- ・彼らは生き方のあらゆる面で注意深く、慎重であり、それによってどんな場合でも不快感を与えず、福音のメッセージに焦点を合わせます([マタイ 10 章 16-17 節](#))。
- ・彼らは、困難な時に神の保護に全面的に信頼することで、神への完全な信仰をすべての人に明らかにする([マタイ 10 章 16-20 節](#))。
- ・どんな結果になっても、福音を公然と宣べ伝え、勇気をもって宣教します([マタイ 10 章 26-31 節](#))。
- ・様々な危機的状況の中でも、断固として並外れた忍耐力を発揮します([マタイ 10 章 32-39 節](#))。
- ・脅威と反対にもかかわらず、勇気を持って宣教を続け、迫害によってそれ以上の働きが不可能になった時点で初めてその場所を立ち去ります([マタイ 10](#)

[章 23 節](#))。

7. 彼らは厳しい反対を受ける: これらの箇所では主が大胆に、勇敢に、恐れず、十字架を負うようにと命じられたのは、この宣教が様々な厳しい反対に直面し、それにもかかわらず成し遂げられるという事実が暗示されています。明らかに、悪魔の最も望まないことの一つは、イスラエルの失われた羊に宣教されることです。144,000 人はこのような巡回伝道で当然受ける苦難に直面するだけでなく([マタイ 10 章 17-23 節](#))、3 年半の期間の終わりには殉教が待っています([黙示録 13 章](#)と [14 章 1-5 節](#)を参照)。宣教期間中にも([マタイ 10 章](#); [ルカ 9 章, 10 章](#); [黙示録 7 章, 14 章](#)のすべての関連箇所を読んでも結論づけられるように)、宣教期間中にも、144,000 人は異邦人の不信仰者だけでなく、彼らの証を受け入れず、イエス・キリストを通して神のもとに戻らないと心を固めてしまっているユダヤ人仲間からも激しく非難されます([マタイ 10 章 17 節, 10 章 21 節](#); 参照:[イザヤ 6 章 9-10 節, 53 章 1 節](#); [ヨハネ 1 章 11 節, 12 章 37-41 節](#))。彼らは自分の家族に裏切られ([マタイ 10 章 21 節, 10 章 35-37 節](#))、すべての人に憎まれ([マタイ 10 章 22 節](#))、中傷され([マタイ 10 章 24-25 節](#))、投獄、拷問、不当な告発([マタイ 10 章 17-20 節](#))、また迫害([マタイ 10 章 23 節](#))を受け、安穩ではない([マタイ 10 章 34 節](#))でしょう。彼らは主や使徒たちのように、飢え狂う「狼たち」の中で([マタイ 10 章 16 節](#); [ルカ 10 章 3 節](#)) 終わりまで忠実で神の福音のために命を捧げます([マタイ 10 章 39 節](#); [黙示録 14 章 1-5 節](#))。

8. 彼らは宣教の間、奇跡的な保護を受けます: 前項で明らかのように、144,000 人が直面する目に見えるもの、見えないものの反対勢力を考えると、これらの忠実な証人がその任務を遂行するための十分な機会を与える神の特別な保護なしには、効果的な宣教はありえません。確かにこの神の特別な印は、144,000 人の宣教に確かな有効性を与えています([ヨハネ 6 章 27 節](#)参照)。しかし、私たちが[黙示録 7 章 1-8 節](#)の文脈で学んでいる封印の本質的な意味と効果として、明らかなのは神の特別な保護です。⁷⁵ エゼキエル書によく見られるように、144,000 人の額に押された超自然的な印や「証印」は、これらの特別な証人を定められた時期までに滅ぼすことをしてはならないという神の特別な警告を表しています([エゼキエル 9 章 1-8 節](#))。⁷⁶ エゼキエル書にあるように、

⁷⁵ 参照: 過ぎ越しの印([出エジプト 12 章 7 節](#))。その他、目に見えない神の保護の例としては、教会時代の信者に対する聖霊の証印([第二コリント 1 章 21-22 節](#); [エペソ 1 章 13-14 節, 4 章 30 節](#))、エリシャの火の戦車([列王記下 6 章 17 節](#))、イスラエルを守る主の天使([イザヤ書 37 章 36 節, 63 章 9 節](#))、個々の信者の「守護天使」([マタイ 18 章 10 節](#); [詩篇 91 篇](#)参照)などがありますが、これらに限定されるものではありません。

⁷⁶ また、イエス・キリストを信じる者としての復活を保証する、すべての信者が現在享受している御霊の「証印」(上記 [III.2 節](#)参照; [第二コリント 1 章 21-22 節](#); [エペソ 1 章 13-14 節, 4 章 30 節](#)参照)

この印は人間の目には見えませんが、すべての被造物である墮落天使と選ばれた天使は、その意味をはっきりと見て理解することでしょう。古代における封印の多くは、紛れもない所有を示すもの(印章リングで認証された文書のように)であり、これにおいても同じ意味で例えられています。この証人にご自分の印を押すことによって、神はご自分の権威に基づいて証人の安全を保証されるのです。この印証を見る者は皆、この144,000人が神独自の財産として、神の特別な保護下にあることを理解するのです。

この封印のタイミングは重要です。第六の封印と第七の封印(この<第七の>封印が解かれると艱難期が始まる)の間にあるこの時、2節の天使は「日の昇る方から」(つまり東から、メシアの帰還の方角から:[イザヤ 41 章 25 節](#), [63 章 1 節](#); [エゼキエル 43 章 4 節](#); [ゼカリヤ 14 章 4 節](#); [マラキ 4 章 2 節](#); [ルカ 1 章 78 節](#); [第二ペテロ 1 章 19 節](#); [黙示録 19 章 17 節](#))やってきます。144,000人に印が押し終わるまで、艱難期の最初の四つのラッパの裁きを司る四天使にまだ開始しないよう命じているのです。このことは、神の計画におけるこの働きの重要性を強調するものであり、その計画においてイスラエルの大部分の人々が改宗することも同様に重要なのです。この改宗は、やがて分かるように、普遍的なものではなく([ゼカリヤ 13 章 8-9 節](#)参照)、二段階で行われます。第一段階は144,000人の証人への応答として行われ(これらの人々は後に反キリストから逃亡します:[黙示録 12 章 1-16 節](#)参照)、第二段階は主の帰還の時に行われます([ヨエル 2 章 30-32 節](#); [ゼカリヤ 12 章 10 節](#); [ローマ 11 章 25-27 節](#); [黙示録 1 章 7 節](#)参照)。

最初の六つの封印が解かれ、艱難期が間もなく始めると、それまで全世界的に受けていた(無法と悪の)抑制が、今度は個々人に与えられなければなりません(つまり、この封印が示す144,000人に対する個々の保護印)。御霊がいつも私たちと共におられるという主の約束([ヨハネ 14 章 16 節](#): [エペソ 1 章 13-14 節](#)も参照)を考えると、この144,000人の証人に押される印は、彼らの復活を保証するだけでなく(御霊の証印の主要な結果: [エペソ 4 章 30 節](#))、必要な伝道の機会も与え、さらなる保護の印になると理解できます。この目に見えない額の印は、神の特別な僕であることを示すので、神を拒絶した人々の額と手にある目に見える「獣の印」と非常に対照的です([黙示録 13 章 16-18 節](#), [14 章 9-11 節](#), [15 章 2 節](#), [16 章 2 節](#), [19 章 20 節](#), [20 章 4 節](#))。さらに、この印は、144,000人の人生と働きを神が特別に監督しているという保証でもあるのです。イエスは、上記のようなすべての反対にもかかわらず、恐れるなど言われましたが([マタイ 10 章 26-42 節](#))、この特別な証印は、神が言われたように本当に守ってくださるという励ましを与えるものなのです。

と、適切な時が来るまで(神の権威による)阻止する、黙示録の「巻物」を封している七つの封印(上記 [IV 節](#)参照)も参照してみてください。

9. 彼らは宣教が終わると殉教します： 獣と偽預言者、そして人類をできるだけ、多く悪魔的偶像崇拜のシステムに押し込もうとする彼らのやり方に関する 13 章の記述の直後に、天のシオン山(すなわち、天の神殿: 上記 I 節参照)で主とともに 144,000 人が現れることは、非常に明確な絵像です。144,000 人は、もはや地上にはおらず天にいるのです。実際彼らは、「神と小羊のために」([黙示録 14 章 4 節](#))殉教する最初の者として「地上から贖われた」([黙示録 14 章 3 節](#))のです。13 章の出来事は艱難の中間点、つまり 7 年間の前半と後半の「大艱難期」の間の移行に焦点を当てているので、144,000 人は大迫害の最初の殉教者として、獣を拝まないために獣の手によって最初に倒れると結論せざるを得ません。⁷⁷ 彼らの命は伝道の務めが完了するまで守られま
す([ルカ 21 章 12-19 節](#)参照)。144,000 人は、殉教という最高の犠牲のもとに、<主がされたように>同じく命を主に捧げるとい偉大な栄誉を得ます。最後に、[マタイ 10 章 23 節](#)の記述は、これらの証人(すなわち、[マタイ 10 章 23 節](#)の記述によると、(十二使徒に対するメッセージを 144,000 人に預言的に適用すると)これらの証人は「人の子が来る前にイスラエルの町々を伝道し終えることはない」とあり、これはユダヤ人への伝道を目的とした世界規模の働き(「イスラエルの町々」とは 144,000 人にとってユダヤ人社会のあるすべての町)であることを確証するだけでなく、彼らが(後述のメシアの帰還のかなり前に)殉教するまでこの働きに忙しく従事することを明らかにしています⁷⁸。

144,000 人の宣教の行程：

1. 彼らの働きのいくつかの特徴： 聖書は彼らの宣教活動の詳細、すなわち、彼らの召命、時期、性質、この大きな宣教者部隊の管理と配置についてあまり教えてくれませんが、彼らの宣教活動は、黙示録 11 章の二人の証人の宣教活動と密接に関連していると思われます。十二弟子、七十二人の弟子、ヨハネの弟子たちが孤立して活動したのではなく、それぞれイエスとヨハネによって選ばれ、委任され、送り出されたように([マタイ 10 章 7 節](#); [マルコ 6 章 7 節](#); [ルカ 9 章 1-2 節](#)参照)、144,000 人も特定の地上的指導の下に活動しなければならないということは確かであると思われます。黙示録でも、

⁷⁷ [黙示録 17 章 6 節](#)のバビロンという女が「聖徒の血、すなわちイエスの証人(殉教者)の血に酔っている」([ルカ 21 章 13 節](#)参照)ところから、少なくとも部分的には 144,000 人の働きと犠牲が、間違いなく見えてきます。

⁷⁸ この箇所と「終末」のしるしとしての世界的伝道との関連については、以下の[第 VII 節](#)「来たる艱難期のしるし」を参照。

また他の聖書の箇所を見ても、この監督者の役割を果たす可能性が高いのは、この「二人の証人」(つまり、モーセとエリヤ、それぞれイエスとくバプテスマのヨハネの預言的に対応する者)だけでしょう。

この研究の第三部まで、その「二人の証人としての働き」の詳細は取り上げませんが、予告としてお伝えするなら、この二人はモーセとエリヤに他ならないこと、同様に特異な方法でこの地上を去った二人の神のしもべであること([列王記下 2 章 11-18 節](#); [ユダ 1 章 9 節](#))、また二人ともメシアの再臨を告げる重要人物として予言されていることは強調しておかなければなりません(特にイエスの変容において彼らがそこにいたことも参照してください([マタイ 17 章 3-13 節](#); [マラキ 4 章 4-6 節](#)も参照)。この点で重要なのは、この二人の証人がイスラエルの「回復」、つまり、イスラエルの多くの人々の心をイエス・キリストへの信仰によって神に立ち返らせるリバイバルを担うという事実です([マタイ 17 章 11 節](#); [マルコ 9 章 12 節](#); [使徒行伝 3 章 21 節](#))。今まで見てきたように、144,000 人もその働きに献身しています(初降臨の際のバプテスマのヨハネの働きも、エリヤの将来の働きに酷似しています:[マタイ 17 章 13 節](#))。

後の日になって、あなたがなやみにあい、これらのすべての事が、あなたに臨むとき、もしあなたの神、主に立ち帰ってその声に聞きしたがうならば、(申命記 4章30節)

ちょうど二人の証人がエルサレムを中心にして世界中の注目を集める働きをするように([ゼカリヤ 4 章 11-14 節](#); [黙示録 11 章 1-13 節](#))、この有名な二人一組の働きは、世界中で働く他の何千もの組(正確には 72000 組)の働きによって、投影、増強、並列されることとなります。したがって、神がこれらの将来の小羊の殉教者を証印され、御霊によってエルサレムに引き寄せられた後に、モーセとエリヤが、144,000 人を目に見える形で選び、委託し、送り出す任務を負うと推測できます([マタイ 23 章 34 節](#); [ルカ 11 章 49 節](#)を参照)。そして、彼らはエルサレムからそれぞれの宣教地に送り出されるのです。144,000 人の構成について、世の人々やこのエリート集団の人たちの思いの中にさえも疑問があったとしても、それは取り除かれることでしょう。御霊に促されてエルサレムへ旅立つ彼らは、その後、モーセとエリヤという史上最高の預言者によって選ばれ委ねられるからです。

144,000 人は、世界のユダヤ人社会の証人として採用され、送り出されるこのプロセスの最初から、邪悪な者とその配下の者たちから厳しい監視を受ける運命にあることは間違いないでしょう。このため、彼らは第七の封印が解かれる前に、世界中のどこにいても公式に選ばれる前から証印という特別な保護を受けることとなります。このプロ

セスには多数の選ばれた天使が必要です(3 節「わたしたちの神の僕らの額に、わたしたちが印をおしてしまうまでは」参照)。

その具体的な配置と働きの展開については、推測するほかはありません。一つ言えることは、送り出された 72 人<の弟子>は 144,000 人(彼らは 72,000 組で活動する)の意図的な伏線であるということです。異邦人国家の象徴的な数(創世記 10 章に記載されている「70 人」と関係があると理解する人もいます。ルカの福音書にある数<七十二--ルカ 10 章 1 節, 17 節>から「国ごとに 1000 チーム」の象徴的な対応であると考えて、イスラエルのためには二倍の数(つまり 2000「チーム」)<神の民に対する「二倍」の応報--イザヤ 61 章 7 節;黙示録 18 章 6 節など参照>を差し引くと七万<70×1000>となるということです。しかし、そうであっても、分配と配置を明確に示すものが残っているかどうかは疑問です。ディアスポラ(ユダヤ人の離散)は全世界に広がっていますが、ある国のユダヤ人居住者の数は他の国のユダヤ人コミュニティの規模をはるかに超えているからです(言うまでもなく、創世記の 10 章のリストを現在の世界の入り混じった国に適用することは現実的に不可能です)。また、アクセス、集中、応答性など、神の助けによってのみ知り得る多くの事柄があります。ユダヤ人社会の規模が大きくなれば、より多くの「助け手<遣わされる者たち>」が与えられ、文化的、地理的、言語的な能力が考慮されると思われませんが、これは推測に過ぎません。しかし、聖書から明らかなことは、チームの数が多いように見えますが、宣教者たちには十分な仕事があるということです。なぜなら、彼らは時間がなくなる前に「イスラエルの町々を回り終わる」ことはできないからです(マタイ 10 章 23 節)。

2. メッセージの内容: 私たちの主イエス・キリスト、ヨハネ、モーセ、エリヤ、十二弟子、七十二弟子、144,000 人のメッセージの内容はすべて同じで、王国の福音、すなわち御子イエス・キリストへの信仰によって悔い改めて神に立ち返るよにという呼びかけです。また、これらのメッセージには、事態が切迫しているため、緊急性があるものです。

a. イエス (マルコ 1 章 14 節):

この時からイエスは教を宣べはじめて言われた、「悔い改めよ、天国は近づいた」。(マタイ 4 章 17 節)

b. ヨハネ (使徒行伝 13 章 24 節):

そのころ、バプテスマのヨハネが現れ、ユダヤの荒野で教を宣べて言った、「悔い改めよ、天国は近づいた」。(マタイ 3 章 1-2 節)

c. モーセとエリヤ ([黙示録 11 章 3 節](#), [11 章 6 節](#), [11 章 7 節](#)):

あなたがたは、わがしもべモーセの律法、すなわちわたしがホレブで、イスラエル全体のために、彼に命じた定めとおきてとを覚えよ。見よ、主の大いなる恐るべき日に来る前に、わたしは預言者エリヤをあなたがたにつかわす。彼は父の心をその子供たちに向けさせ、子供たちの心をその父に向けさせる。これはわたしが来て、のろいをもってこの国を撃つことのないようにするためである」。([マラキ 4 章 4-6 節](#))

d. 144,000 人 (上記の 12 弟子と 72 弟子の類似性に基づいて)。

「行って、『天国が近づいた』と宣べ伝えよ」([マタイ 10 章 7 節](#))

そこで、彼らは出て行って、悔改めを宣べ伝え、([マルコ 6 章 12 節](#))

また神の国を宣べ伝え、かつ病気をなおすためにつかわして ([ルカ 9 章 2 節](#))

弟子たちは出て行って、村々を巡り歩き、いたる所で福音を宣べ伝え、また病気をいやした。([ルカ 9 章 6 節](#))

その後、主は別に七十二人を選び、行こうとしておられたすべての町や村へ、ふたりずつ先におつかわしになった。([ルカ 10 章 1 節](#))

そして、その町にいる病人をいやしてやり、『神の国はあなたがたに近づいた』と言いなさい。([ルカ 10 章 9 節](#))

『わたしたちの足についているこの町のちりも、ぬぐい捨てて行く。しかし、神の国が近づいたことは、承知しているがよい』。([ルカ 10 章 11 節](#))

[黙示録 17 章 6 節](#)で、彼らは「イエスの証人殉教者」と呼ばれ、144,000 人は、艱難期に主のために死ぬ他の人々よりも特別な配慮が与えられています。この称号は、144,000 人が主と特別な関係を持つこと([黙示録 14 章 1-6 節](#)参照)と、彼らが宣べ伝える御国の福音メッセージの内容は、証人であり殉教者である彼らは、イエス・キリストの人と業にはほかならないという事実を強調しているのです。

3. 宣教の成果: ここでも、144,000 人がイエス・キリストにある神に立ち返るのを助ける同胞の数について、正確な情報は与えられていません。しかし、いくつかの点を覚えておく必要があります。第一に、困難な宣教地でよくあることですが、神の国では、(悔い改める一人は悔い改める必要のない九十九人よりも喜ばれるのですから) 結果は必ずしも数で測れるものではありません(「イスラエルの町」の一部が他よりも実り多いことは間違いありませんが、それは宣教チームにすべての責任があるわけではありません)。この世界的な証しは、それ自体、大きな成果であり、驚異的な結果です。第二に、144,000 人の働きの周辺では、異邦人社会で多くの関心を引き起こし、ユダヤ人以外の人々への宣教の機会が与えられると考えることができます。第三に、この働きの結果を考慮すべきなのは、この時に悔い改めて神のもとに回復した人たちだけではないということです。144,000 人の働きと、それと密接に関連するモーセとエリヤの働きは、間違いなく、この時期(つまり、艱難期の前半)にイエス・キリストを通して神のもとに戻らなかったユダヤ人の心に多くの疑問を残すことでしょう。しかし、再臨の時には、イエス・キリストに立ち返り、「自分たちが突き刺した者を見」、帰ってくるメシアを直視することになるのです([黙示録 1 章 7 節](#))。艱難期の終わりにユダヤ人が改宗するための土台を、モーセとエリヤが 144,000 人の宣教者と共に築くべきものであることは確かです。なぜなら、その日まで眠っているユダヤ人に、ユダヤ人がユダヤ人のわかる形で福音のメッセージを伝えるこの活動こそが、キリストの目に見える臨在とともに、キリストの再臨のときに預言された悔い改めを生み出すからです。

わたしはまた、天と地とにしるしを示す。すなわち血と、火と、煙の柱とがあるであろう。主の大いなる恐るべき日が来る前に、日は暗く、月は血に変る。すべて主の名を呼ぶ者は救われる。それは主が言われたように、シオンの山とエルサレムとに、のがれる者があるからである。その残った者のうちに、主のお召しになる者がある。(ヨエル書 2 章 30-32 節)

わたしはダビデの家およびエルサレムの住民に、恵みと祈の霊とを注ぐ。彼らはその刺した者を見る時、ひとり子のために嘆くように彼のために嘆き、ういごのために悲しむように、彼のためにいたく悲しむ。(ゼカリヤ 12 章 10 節)

しかし、その時に起る患難の後、たちまち日は暗くなり、月はその光を放つことをやめ、星は空から落ち、天体は揺り動かされるであろう。そのとき、人の子のしるしが天に現れるであろう。またそのとき、地のすべての民族は嘆き、そして力と大いなる栄光とをもって、人の子が天の雲に乗って来るのを、人々は見るとであろう。(マタイ 24 章 29-30 節)

兄弟たちよ。あなたがたが知者だと自負することのないために、この奥義を知らないでいてもらいたくない。一部のイスラエル人がかたくなになったのは、異邦人が全部救われるに至る時までのことであって、こうして、イスラエル人は、すべて救われるであろう。すなわち、次のように書いてある、「救う者がシオンからきて、ヤコブから不信心を追い払うであろう。そして、これが、彼らの罪を除き去る時に、彼らに対して立てるわたしの契約である」。(ローマ11章25-27節)

とはいえ、144,000 人のメッセージに直接反応する人は、かなりの数(不特定多数)存在します([ゼカリヤ 10 章 9 節](#)参照。「私が彼らを民の間に散らしても、遠い国では私を思い出すだろう。NIV 訳)。黙示録の 12 章([マタイ 24 章 15-22 節](#); [マルコ 13 章 14-23 節](#); [ルカ 21 章 20-24 節](#))には、イスラエルに残っているユダヤ人信者が、艱難期中期に反キリストに迫害されて荒野に避難する場面が出てきます。この残党はどう見ても現存していないので、二人の証人と 144,000 人の働き(どちらもこの迫害の直前に終了する)の結果として生じるものと結論づけざるを得ません。この新しいユダヤ人残党を排除しようとする試みが失敗した後、反キリストは世界中のユダヤ人信者に対して(そして一般の信者に対しても:[黙示録 12 章 17 節](#))その活動を拡大することになるのです。聖書には書かれていませんが、144,000 人の宣教に応じて、イスラエルにいる新しいレムナント<残りの者たち>の一部が世界の他の地域から集まってくる可能性があります(ちょうど、彼らがエルサレムとモーセとエリヤの宣教に引き寄せられたように)。

4. キリスト、ヨハネ、モーセ、エリヤ、使徒たちの働きと類似している: 144,000 人の働きは、彼らに先立つ最も印象的な神の働きに多くの類似点をもっています。これらの類似点は、この章の初めから強調してきた 144,000 人の働きの重要性と性質の両方を強調しているので、注目すべき重要な点です。144,000 人はすべ次のとおりです。

ユダヤ人の男性です:キリスト、ヨハネ、モーセ、エリヤ、そして使徒たちと同様です。

未婚です:キリスト、ヨハネ、エリヤ、パウロのように。

奇跡的に守られます:キリスト([ルカ 4 章 28-30 節](#); [ヨハネ 7 章 30 節](#), [8 章 59 節](#), [10 章 39 節](#))、モーセ([民数記 16-17 章](#))、エリヤ([列王記下 1 章](#))、使徒たち([使徒行伝 12 章 1-10 節](#), [28 章 3-6 節](#))と同じです。

イスラエルへの宣教者です:キリスト([マタイ 15 章 24 節](#); [ルカ 2 章 34 節](#))、ヨハネ([マタイ 3 章 7-10 節](#); [ルカ 1 章 67-80 節](#))、モーセ、エリヤ、ペテロ([ガラ](#)

[テヤ 2 章 7 節](#))がそうです。

神への回復の宣教者です: キリスト([ルカ 4 章 14-21 節](#))、ヨハネ([ルカ 1 章 17 節](#); [ヨハネ 1 章 7 節](#))、エリヤ([マラキ 4 章 4-6 節](#))、使徒たち([使徒行伝 3 章 17-21 節](#))と同様です。

際立つ奇跡を行います: キリスト([マルコ 5 章 37-43 節](#); [ルカ 7 章 11-17 節](#); [ヨハネ 11 章 1-44 節](#))、モーセ([出エジプト 4 章 1-17 節](#); [使徒行伝 7 章 36 節](#))、エリヤ([列王記上 17 章 17-24 節](#))、使徒たち([使徒行伝 9 章 36-42 節](#), [20 章 7-12 節](#))などがそうでした。

厳しい「行動規範」に従います: キリスト([マタイ 4 章 1-11 節](#))、ヨハネ([マタイ 3 章 4 節](#); [ルカ 1 章 80 節](#))、エリヤ([列王記上 17 章 1-16 節](#))、パウロ([第一コリント 4 章 8-13 節](#); [第二コリント 4 章 7-12 節](#), [6 章 3-10 節](#), [11 章 16-33 節](#); [ピリピ 3 章 7-11 節](#))など。

激しい反対勢力に直面します: キリスト([ルカ 4 章 29 節](#); [ヨハネ 7 章 1 節](#); [8 章 40 節](#))、ヨハネ([マタイ 14 章 1-5 節](#))、モーセ([使徒行伝 7 章 39 節](#))、エリヤ([列王記上 18 章 16-17 節](#), [19 章 1-2 節](#))、使徒たち([使徒行伝 5 章 17-42 節](#))などがそうです。

完璧な行動で一貫しています([黙示録 14 章 4-5 節](#)): キリストのように([ヨハネ 8 章 46 節](#); [使徒行伝 8 章 32-35 節](#); [ヘブル 4 章 15 節](#); [第一ペテロ 1 章 19 節](#))。

三年半の奉仕: キリスト、エリヤ([ヤコブ 5 章 17 節](#))、<バプテスマの>ヨハネと同じです⁷⁹。

宣教の終了時に殉教します([黙示録 14 章 3 節](#)):ヨハネ([マタイ 14 章 6-12 節](#))、使徒たち([ヨハネ 21 章 18-19 節](#)参照)のように、私たちの主イエス・キリストの足跡をたどっています。

大迫害で殉教する最初の者([黙示録 14 章 4 節](#))です: キリストの足跡に従っています([マタイ 10 章 38 節](#), [16 章 24 節](#), [20 章 23 節](#); [マルコ 8 章 34 節](#); [ルカ 9 章 23 節](#), [14 章 27 節](#); [ヨハネ 21 章 18-19 節](#); [レビ記 23 章 9 節](#)〜と[第一コリント 15 章 23 節](#)も参照)。

5. ダン部族の排除: よく知られているように、イスラエルには十二部族がありますが、その中のヨセフの部族は、ヤコブが孫たち<ヨセフの子エフライムとマナセ>を養子にしたこと([創世記 48 章 1-22 節](#))、その時にヨセフに割り当てた二倍の分け前(ヘブル語では[創世記 48 章 22 節](#))から、一般的には二部族(エフライムとマナセ)として紹介されています。したがって、エフライムとマナセを一つとして数えていない十二部族のリスト

⁷⁹ イエスとヨハネの働きの年代については、『悪魔の反乱』のパート5: 艱難時代の背景「裁き、回復、代替わり」、セクション II.9.a.3、「キリストの十字架刑」を参照してください。

からは、必然的に他の部族を排除することになり、この文脈では、144,000 人のリストに入れない部族はダンです(マナセと、「ヨセフ」つまりエフライムはそれぞれリストに数えられています)。⁸⁰ ダン部族の欠陥は数多くあり、このリストに入れなかった理由はたくさんありますが、ダンが 144,000 人の仲間に入れなかった最も大きな理由は、反キリストがこの部族の子孫であることです([創世記 49 章 16-18 節](#); 参照:[創世記 3 章 15 節](#))。裏切りや悪魔的な背信のために十二部族の一人が排除されることは、十二使徒の中からユダが排除されたこと(パウロに取って代わられた)と類似しているのです。反キリストの出自(しゅつじ)(ダン人の出自を含む)の詳細は、このシリーズのパート 3B で考察されています。

6. 彼らの報酬: 私たちの主が、私たちの思いをはるかに超えた恵み深い方法でご自身を捧げられたので、父なる神は「彼を最も高い所に上げ」、「すべての名にまさる名」を与えられ、「イエスの名によって、天と地と地の下のすべてのひざがひざまづくように」([ピリピ 2 章 9-10 節](#))されたのです。ここで見られる、最大の犠牲には最大の報酬が与えられるという原則は、144,000 人の場合にも当てはまります。彼らは大迫害の間、独特で卓越した殉教を最初に受け([黙示録 14 章 4 節](#))、特別に記念すべき賛歌を受けます([黙示録 14 章 5 節](#))。⁸¹ 彼らの働きは非常に重要なので、一見些細なことでも彼らを支援する人々は同様に報われます([マタイ 10 章 13 節](#), [10 章 40-42 節](#))。

VI. 天国の群衆 ヨハネの黙示録 7 章 9-17 節

黙示録 7 章 9~17 節

(9)その後、わたしが見ていると、見よ、あらゆる国民、部族、民族、国語のうちから、数えきれないほどの大ぜいの群衆が、白い衣を身にまとい、しゅろの枝を手に持って、御座と小羊との前に立ち、(10)大声で叫んで言った、「救は、御座にいますわれらの神と小羊からきたる」。(11)御使たちはみな、御座と長老たちと四つの生き物とのまわりに立っていたが、御座の前にひれ伏し、神を拝して言った、(12)「アアメン、さんび、栄光、知恵、感謝、

⁸⁰ エフライムは年下く次男(長男はマナセ)でありながら「より偉大な」息子であり、それゆえ、ここでは父親の名前によって識別されています(参照:[創世記 48 章 19 節](#); [民数記 13 章 11 節](#)には「ヨセフの部族」が「マナセの部族」と説明されています)。

⁸¹ たとえば、十二使徒に与えられた特別な栄誉([ルカ 22 章 30 節](#)の「十二の位に座す」、[黙示録 21 章 14 節](#)の「十二の門」)を参照してください。

ほまれ、力、勢いが、世々限りなく、われらの神にあるように、アアメン」。

(13)長老たちのひとりが、わたしにむかって言った、「この白い衣を身にまとっている人々は、だれか。また、どこからきたのか」。(14)わたしは彼に答えた、「わたしの主よ、それはあなたがご存じです」。すると、彼はわたしに言った、「彼らは大きな患難をとおってきた人たちであって、その衣を小羊の血で洗い、それを白くしたのである。(15)それだから彼らは、神の御座の前におり、昼も夜もその聖所で神に仕えているのである。御座にいますかたは、彼らの上に幕屋を張って共に住まわれるであろう。(16)彼らは、もはや飢えることがなく、かわくこともない。太陽も炎暑も、彼らを侵すことはない。(17)御座の正面にいます小羊は彼らの牧者となって、いのちの水の泉に導いて下さるであろう。また神は、彼らの目から涙をことごとくぬぐい下さるであろう」。

144,000 人の働きによって、艱難期の前半には、失われたイスラエルのすべての羊が地上のどこに散らばっていても、福音のメッセージに与るようになることには疑いの余地はありません。この特別な福音の提示は、艱難期の後半に獣とその偽預言者が偽りの反キリスト教的宗教のために行う世界規模の「悪の伝道」とは、はっきりとした対照をなすこととなります。世界から真理を取り除き、真の神への礼拝をあらゆるサタン崇拝に置き換えるこのキャンペーンの重要な部分は、地表から信者を絶滅させようとする意図的で攻撃的な試みであるでしょう。これが、[黙示録 6 章 9-11 節](#)の第 5 の封印の主題であった「大迫害」です。黙示録 4-7 章の(この主題:パート 2B)「天の前奏曲」が終わると、この大迫害の反面が伺えます。それはまず 144,000 人、それから「あらゆる国民、部族、民族、国語からだれも数え切れないほどの」大勢に及んでいます。殉教の時に倒れた人々は、ここでは憐れまれるべき人たちではなく、勝利者として、自分自身の勝利と小羊の勝利の再来を示すしゅろの枝を持っているのがわかります。ローマの闘技場では、勝利者にしゅろの枝が与えられたことは事実です(Martial 29.9 の「勝利のしゅろ(パーム) **the "palm of victory"**」を参照)。しかし、ここで重要なのは、「パーム・サンデー(しゅろの日曜日)」のしゅろの枝は、メシアである王の到来と王国の始まりを宣言する祭りである「仮庵の祭り」の期間に正しく使われるものです(そのため「パーム・サンデー」は、イエスをエルサレムに導いた人々が、その時にイエスに冠を持たせることを願い、誤って使ったもので、その真の時期だった過越しの祭りで象徴されていた十字架が先でなければならぬことは理解していませんでした:参照 [詩編 118 篇 26-27 節](#))。⁸²

⁸² 『サタンの反乱: 艱難期への序章』第 5 部「裁き、回復、置き換え」、セクション II.8.c.7、「ユダヤ教の儀式暦: 仮庵の祭り」参照

第五の封印に関する考察の中で、私たちはすでにこれらの殉教者(また、アダムとエバ以降、将来キリストの再臨で私たちが復活する日まで、主にあって死んだすべての者)が占める復活前の暫定的な状態、つまり暫定的な身体(ここでは白い衣で表現)と、祝福されて完全に意識を持った状態(上記の節における彼らの熱心な礼拝から明らかです)の両方を詳しく説明しました。艱難期の殉教者の状況が、この書のこの特定の時点、つまりヨハネの描写の中で艱難期が本格的に始まる直前に大きく、また繰り返し取り上げられていることは、極めて重要です。それは、これから起こる惨劇にもかかわらず、究極の祝福された終末をしっかりと心に刻み、歴史のプロセスを神が完全にコントロールしていることを思い起こし、(世間一般の見方では)最も恐ろしい死においても、殉教者たちには最も崇高な勝利があるという事実を焦点を合わせ続けることが、信者にとって非常に重要だからです。反キリストの「犠牲者」は私たちの主の足跡をたどることになります。主は、世の人々の目には人類史上最も屈辱的な最後を遂げましたが(詩篇 22 篇; イザヤ 52-53 章参照)、神の深淵な現実において世界史上最最大の神の勝利、私たちの持っているもののすべてである永遠のいのちを得るための十字架の勝利を本当に成し遂げられたのです(ピリピ 2 章 5-11 節参照)。

私たちは天国で神を完全に礼拝し、神と共にあり、小羊である私たちの主イエスに面と向かって仕え、痛みと労苦と涙から永遠に解放され、この世にあるどんなものよりも優れた体で勝利を享受することになる、死後の一時的な場所は素晴らしいのですが、私達が覚えておくべきことは新エルサレムで最終的に復活した体はこれよりも素晴らしいものとなることです。ですから、日ごとに近づいてくる未来の大艱難期に入る運命にある私たちが、死によって神のために証しをすることが神からの任務であろうと、大艱難期の中で生き続けることによって神への忠誠を示すことであろうと、生きるにしても、死ぬにしても、できる限り神に仕え、神がどのように証しをするように私たちを導かれたとしても、神の最高の証人になるために自分を捧げましょう(ピリピ 1 章 20-23 節)。実際、私たちが避けるべき唯一の結末は、背教の恐ろしさです。この運命は、悲しいことに、来たるべき恐ろしい時の流れの中で、多くの仲間の信者に降りかかるでしょう。

VII. 来たる艱難期の兆し

艱難期の頂点に立つ殉教者たちの光景を思い浮かべるとき、私たちは、この最大の危機が訪れる前に霊的に準備することの重要性を理解せずにはおられません。こ

のシリーズで、神学的な観点から艱難期が差し迫っていることをすでに指摘しました⁸³。私たちと終末の時代の始まりの間に未達成の預言の大きな出来事が残っていない以上、現代の信徒が霊的警戒を解き、ヒゼキヤ王のように、私たちの時代には「平和と安全」があるので心配する必要はない(イザヤ 39 章 8 節)、などの想定には正当性がないことは明らかでしょう。親愛なる読者の皆さん、あなた個人はその苦難の時代から解放されるかもしれませんが、それは確実に当てにできることではありません。

教会時代を通して、終末と一致する傾向の高まりを見ることができます(例として挙げれば、テクノロジー、国際舞台、社会、目に見える教会における不穏な動きなど)。道徳的、政治的、社会的、そして、このコスモス<宇宙世界>の現在の支配者が築き、その反キリストという人物を通して最終的に世界を支配するために拡大しようとしている「世界システム」のあらゆる側面において、次の「バベルの塔」のための土台作りが着実に行われているのです。⁸⁴しかし、これらのどの傾向も、現時点においてどんなに憂慮すべきことであっても、それ自体、私たちが現在、艱難期前のどの時期に位置しているかについて、現代のクリスチャンに明確な指針を与えることができないことを指摘しなければなりません。別の言い方をすれば、霊的に見ると、事態は確かに悪くなっていますが、それは私たちが艱難期に向かっていることを知らせているに過ぎず、その最後の火ぶたがいつ切られるかを知らせているのではないということです。この事実から導き出される明白な結論は、クリスチャンは「太陽が照っている間に」(ヨハネ 12 章 35-36 節; ヘブル 3 章 13 節)、特にこれから訪れる闇の深さを考えると、霊的成長と準備のためにあらゆる機会を利用すべきなのですが、聖書に記されている限りにおいて、艱難期が始まる寸前にあるという何らかの警告を期待して、どんな決定的なしるしに注意したらよいかを知りたいのも当然のように思われます。この質問に対する簡単な答えは、艱難期が間近に迫っていることを明確に示すものは、幾らかあるかもしれませんが、ほとんどないということです。聖書が示す「しるし」のほとんどは、艱難期(特に大艱難期と再臨)の**期間内**で起こる差し迫った出来事に対する警告です。しかし、このシリーズの最後のセクションでは、艱難期の開始について聖書が述べていることを概説することを目的としています。

艱難期の始まりに関する誤り： このテーマについては、現在、多くの誤った情報が流布されているため、まず、真実でないことについての指摘から始めなければなりません。以下は、艱難期の開始に関するよくある 4 つの誤りです。

⁸³このシリーズの第 1 部、第 5 節、黙示録 1 章 3 節の「時が近づいたから」を参照。

⁸⁴ 「サタンの反乱」シリーズ第 4 部「サタンの世界システム」を参照ください。

1. 誤りその 1: いわゆる「携挙」によって信者が地上から取り除かれるため、この問題の緊急性はない: 私たちは過去に、聖書が教会の復活の時期、すなわち主の再臨の直前の時期に関しては明確であることを示しました([第一テサロニケ 4 章 16 節](#)に述べられている「到来」[parousia, パルーシア]の新約聖書全体における明確な意味は、このことです)⁸⁵。私たちが将来復活する正確な時期は、信仰のもっと重要な問題に比べれば、取るに足らないことのように思われるかもしれませんが。しかし問題は、艱難期から前もって「脱出」できると信じることによって、艱難期に対する霊的な準備の緊急性が全くなくなってしまうことです。「携挙の希望的観測」は、聖書の間違った解釈に基づいているので、(悲惨なことになる可能性がある)霊的に危険な状態なのです。

2. 誤りその 2: 時が分からないから、この問題の緊急性がない: 確かに、聖書には、これから起こる出来事の明確なカレンダーがないので、艱難期が始まる正確な日を独断で述べることは不可能です。しかし、だからといって、信者はこの問題を考え、見守り、待ち望み、聖書から知るべきことを学び、来たる時のために霊的に準備するために、自分に与えられた能力の範囲内であらゆることを行う責任から解放されるわけではありません。この第二の誤りの否定的な側面は次の二つです。1) 知ろうとすることが誤りであり、もしかしたら神を冒瀆しているかもしれないという考えは、聖書からの導きを正しく求めることを損ないます。2) 正確な時間についての正確な知識が得られないので、霊的な準備は必要ないという考えは、霊的に準備しようとする正しい努力を弱めてしまいます。このような誤解が重なると、聖書的な探求や霊的な準備に不都合な「砂に頭を突っ込んだような」状態になり、聖書が命じていることとは正反対になってしまうのです。

私たちが注意深く観察すべきことは明らかです([マタイ 24 章 42-52 節](#), [25 章 1-13 節](#))。

イエスはまた群衆に対しても言われた、「あなたがたは、雲が西に起るのを見るとすぐ、にわか雨がやって来る、と言う。果してそのとおりになる。それから南風が吹くと、暑くなるだろう、と言う。果してそのとおりになる。偽善者よ、あなたがたは天地の模様を見分けることを知りながら、どうして今の時代を見分けることができないのか。(ルカ12章54-56節)

そして同様に、私たちができる間に慎重に準備すべきことは、明らかです(参照:[マタイ 7 章 24-27 節](#), [25 章 14-30 節](#))。

⁸⁵ 広範な議論については、ペテロの手紙シリーズ#27 : 「信仰を脅かす 3 つの教義」参照。

そこでイエスは彼らに言われた、「もうしばらくの間、光はあなたがたと一緒にここにある。光がある間に歩いて、やみに追いつかれないようにしなさい。やみの中を歩く者は、自分がどこへ行くのかわかっていない。光のある間に、光の子となるために、光を信じなさい」。イエスはこれらのことを話してから、そこを立ち去って、彼らから身をお隠しになった。(ヨハネ 12 章 35-36 節)

[マタイ 24 章 36 節](#)（「誰もその日、その時を知らない」）は、信者が無知を美德とし、故意に問題を無視するための命令でも言い訳でもありません。一つは、[マタイ 24 章 36 節](#)は再臨の正確な時期について述べているのであって、艱難期が始まる時期ではなく、終わる時のことです（[ゼカリヤ 14 章 7 節](#)参照）。そうであっても、その数節前に（[マタイ 24 章 22 節](#)）、イエスの言っておられることから、再臨の正確な時期の予測できる幅は日数の問題であって、数週間や数ヶ月のことではなく、まして数年のことではないとわかります。⁸⁶第二に、この未知の日と時間に関する記述は、いちじくの木の影響（[32-33 節](#)）の直接的な文脈の中にあり、その教訓は、人はその特定の将来の出来事に対して警戒することができ、実際に警戒すべきことであり、人は正確な時間を知ることはできませんが、忠実な信仰者は、その来たるべき時が近づいていることは知ることができるということです。

3. 誤りその 3: 世界はまだ完全に宣教されていないという事実が、この問題の緊急性をなくしている: 将来の世界伝道の達成は、艱難期が始まるための未だに成就されていない必要条件などではありません。この2千年間、地理的にも広範囲に及んで

⁸⁶ [使徒行伝 1 章 7 節](#)はしばしば「あなたがたが知ることはない」と誤訳されますが、「時と季節を決めるのはあなたがたではない」と訳すべきです。ギリシア語の動詞ギニョスコ *gignosko* は、特にここのようにアオリスト<不定過去>の場合、一般的に「決める」という意味を持ちます。主はすぐに「父の權威によって定められた」と付け加えておられるので、文脈はこの改訳を強く支持しています。つまり、イエスの言わんとするところは、これらの事柄を決定されたのは父であり、あなたがたの希望によって決定されるものではないということです。というのも、主の弟子たちは、その前の 6 節の質問を通して、主がただちに御国を建ててくださるようという願いをはっきりと表明したばかりだったからです。ですから、7 節での主の叱責は、御父の予定表について全く無知であることを称賛しているのではなく、むしろ、このような問題において重要なのは御心であって、彼らの意思ではないことを彼らに思い起こさせるものです。この声明は、ペンテコステで聖霊が授けられる前に使徒たちに与えられたという事実も考慮しなければなりません。聖霊は、イエスがすでに明らかにしていたように、彼らに「来るべきこと」（[ヨハネ 16 章 13 節](#)、[第二ペテロ 1 章 16-21 節](#)参照）を伝える、年代を含む霊感の代理人です。しかし、聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。ですから、その数年後、パウロはテサロニケの信徒たちに（一般に誤解されているような）[使徒行伝 1 章 7 節](#)とは正反対のことを言うことができるのです。（[第一テサロニケ 5 章 1-2 節](#)）。

で福音が宣べ伝えられたことはともかくとしても、[マタイ 24 章 14 節](#) ([マルコ 13 章 10 節](#)参照)は艱難期の出来事について述べているのであって、艱難期の前ではなく、普遍的に(さらに)福音が宣べ伝えられることは再臨に先立つことであって、艱難期の始まりではありません(一つの成就として、[黙示録 14 章 6-7 節](#)を参照)。

4. 誤りその 4: 艱難期の出来事が重大であるため、認識できる前兆が必要であるという事実は、この問題の緊急性をなくす: 聖霊の抑制が解かれた後、艱難期の出来事が洪水のように素速く襲うことは、世界の歴史の中で前例がありません([黙示録 1 章 1 節](#)とこのシリーズの第一部でのこの節についての解釈を参照してください)。ダニエルが言うように、「終わりは洪水のように臨む」([ダニエル 9 章 26 節](#))のです。つまり、艱難期が始まると、政治的、社会的、経済的、技術的な現状が大きく変化するので、ある特定の政治的、社会的、経済的、技術的な状況が整うまで艱難期は始まらないなどと断言することはできません。⁸⁷ ですから、信者が艱難期が始まる前に、その始まりを明白にする一連の事実に直面すると思うことは、明らかに間違いなのです。それは必ずしもそうではなく、十分な事前警告があるはずだからと、気を緩めるわけにはいかないのです。

予期している正しい態度：

明らかに、神を忘れ([サムエル記上 12 章 9 節](#)参照)、神の道ではなく自分の道を選び([イザヤ 66 章 3 節](#))、この時代の神の計画の重大な局面において、目を覚まして警戒することを怠るのは間違った生き方です([マタイ 25 章 1-13 節](#))。神がやって来られる重要な瞬間が来た時にそれを理解できないのは、墮落と背教の典型的な兆候です([ルカ 19 章 44 節](#); [第一ペテロ 2 章 12 節](#)参照)。

むしろ、私たち個人の人生と、より大きな世界規模の舞台での神の計画の観点から、私たちは神の訪問がいつでもあり得るという可能性を強く意識する必要があります。したがって、それがいつ来てもいいように、できる限り準備する必要があります([マタイ 24 章 42-43 節](#), [25 章 13 節](#); [マルコ 13 章 33-37 節](#); [ルカ 12 章 37 節](#); [使徒行伝 20 章 31 節](#); [第一コリント 16 章 13 節](#); [エペソ 6 章 18 節](#); [コロサイ 4 章 2 節](#); [第一テサロニケ 5 章 6 節](#); [第一ペテロ 5 章 8 節](#); [黙示録 16 章 15 節](#)):

しかし、人の子が来るとき、地上に信仰が見られるであろうか([ルカ 18 章 8 節後半](#))

⁸⁷ 実際、聖書に出てくる「警戒せよ」という具体的な記述はすべて、艱難期前ではなく、大艱難期前のことであり、再臨前のことです([ルカ 12 章 39-40 節](#), [17 章 26-36 節](#), [21 章 7-36 節](#)など)。

あなたがたが放縦や、泥酔や、世の煩いのために心が鈍っているうちに、思いがけないとき、その日がわなのようにあなたがたを捕えることがないように、よく注意していなさい。その日は地の全面に住むすべての人に臨むのであるから。これらの起ろうとしているすべての事からのがれて、人の子の前に立つことができるように、絶えず目をさまして祈っていなさい」。 (ルカ 21 章 34-36 節)

また、ある者たちがしたように、わたしたちは主を試みてはならない。主を試みた者は、へびに殺された。また、ある者たちがつぶやいたように、つぶやいてはならない。つぶやいた者は、「死の使」に滅ぼされた。これらの事が彼らに起ったのは、他に対する警告としてであって、それが書かれたのは、世の終りに臨んでいるわたしたちに対する訓戒のためである。だから、立っていると思う者は、倒れないように気をつけるがよい。(第一コリント 10 章 9-12 節)

(1) 兄弟たちよ。その時期と場合については、書きおくる必要はない。(2) あなたがた自身がよく知っているとおりに、主の日は盗人が夜くるように来る。(3) 人々が平和だ無事だと言っているその矢先に、ちょうど妊婦に産みの苦しみが臨むように、突如として滅びが彼らをおそって来る。そして、それからのがれることは決してできない。(4) しかし兄弟たちよ。あなたがたは暗やみの中にいないのだから、その日が、盗人のようにあなたがたを不意に襲うことはないであろう。(5) あなたがたはみな光の子であり、昼の子なのである。わたしたちは、夜の者でもやみの者でもない。(6) だから、ほかの人々のように眠っていないで、目をさまして慎んでいよう。(7) 眠る者は夜眠り、酔う者は夜酔うのである。(8) しかし、わたしたちは昼の者なのだから、信仰と愛との胸当を身につけ、救の望みのかぶとをかぶって、慎んでいよう。(9) 神は、わたしたちを怒りにあわせるように定められたのではなく、わたしたちの主イエス・キリストによって救を得るように定められたのである。(10) キリストがわたしたちのために死なれたのは、さめていても眠っていても、わたしたちが主と共に生きるためである。(第一テサロニケ 5 章 1-10 節)

艱難期が始まろうとしていることを示す可能性のあるしるし： いちじくの木の前で明らかなように、神が差し迫った裁きの警告として、どんな明確なしるしを私たちに与えようと、私たち信者は警戒し続ける責任があります ([マタイ 24 章 32-33 節](#); [マル](#)

[コ 13 章 28-29 節](#); [ルカ 21 章 29-31 節](#)を参照)。ここで問題となるのは、聖書の中に信者たちが警戒すべき、艱難期の開始が差し迫っている**具体的なしるし**が挙げられているかどうかです。先に指摘したように、動向は私たちに警戒を強める理由を与えてくれるかもしれませんが。結局のところ、神は誕生寸前まで連れてきて、出産に失敗するということは決してないのです([イザヤ 66 章 9 節](#))。しかし、この原則は具体的なことを示すものではありません。艱難期の出来事が急速に進むと預言されていることを考えると、非常に豊かで平和な時代([創世記 41 章](#)参照)がトラブルや困難が増加する時代と同じように艱難期の前兆である可能性も、トラブルや困難が増加する時代と同じように考えられます(その中間の可能性も同じように考えられます)。ですから、現代のキリスト教メディアで流布されている「艱難期に対する警戒」の多くは、即座に拒否すべきです。聖書が艱難期的前提条件として特定の出来事を明確に指摘していない場合、クリスチャンにできることは、注意し、準備を続けることです(いずれにせよ、そうすべきことです!)。ここでは、この点について最も可能性があると考えられている三つを取り上げてみます:

1. **獣の台頭**: このシリーズの第 3 部 B で反キリストの台頭、その帝国の発展、世界征服の作戦について詳しく調べる機会があります(ここで述べることは、あくまでも概略的なものであると理解してください)。艱難期において色々なことが次から次へと起こることを考慮しても、反キリスト特有の倒錯的な性格と、その出現の瞬間から持つことになる有名人としてのステータスは、(たとえ、その正体が最初から完全に確認できないとしても)少なくとも艱難期の実際の開始前に世界の舞台である程度知られていなければならないことは、当然のことであるように思われます。イザヤ書 14 章、エゼキエル書 28 章、ダニエル書 8-12 章、第二テサロニケ書 2 章、黙示録 13 章と 17 章を読めば、彼の性格、方法論、経歴が非常にはっきりわかるでしょう。ダニエル書の「卑しい者であり、王国の栄誉を与えられない」という記述は、型破りな方法で権力者になることを示唆する他の多くの箇所と明らかに一致しています(艱難期の権力者になる前は、非常に低い位置にいたことを示す状況です)。一方、第二テサロニケ 2 章と黙示録 13 章は、反キリストに奇跡的な悪魔の力が与えられることを明確に述べており、サタンの子孫([創世記 3 章 15 節](#))として、(創世記 6 章のネピリムのような)超人的存在であると予想できます⁸⁸。しかし、反キリストがその特別な力を、艱難期前に公然と行使するとは断言できません。最終的には、「獣の数字」を用いることとなりますが、この反キリストの証明によって、艱難期が始まる前から、信者がこのような(数字の)リトマス試験紙で判別することができる可能性はありますが、666 と一致する「名前」は、反キリストが権力を握った後

⁸⁸ 『サタンの反乱-艱難期の序章』第 5 部:「審判、回復、置き換え」III.1 節「サタンの洪水前期における人間の純血に対する攻撃(ネフィリム)」を参照。

に選ぶものである可能性もあります(そうなると、艱難期前に検証することはできません)。反キリストの政治的目標である一国主義を強調し、自らのメシア的なステータスを基盤とした国際主義運動は、その初期段階からも、見逃すことはできないものと思われます。しかし、歴史は多くの興味深い類似点を提供しており、それは最終的に誤りであることが証明されていることを指摘しなければなりません。ユダヤ人に敵対する全体主義的な政権が旧ローマ帝国の領地の大部分を占めるようになり、イタリアの復活したローマを名乗る国家と密接に結びついたというのは、反キリストのシナリオと完全に一致しているようにも見えました(もちろん、ヒトラーのドイツとムッソリーニのイタリアのことですが)。しかし、この類似した推測は真実ではなかったことが証明され、信者はその時代のいかなる人物も「反キリスト」と断定することには、極めて慎重でなければならないことを示唆しています。

2. エルサレム神殿の再建: 艱難期の動向において、絶対に必要だと思われるものとして、まだ歴史的に見えていないものの一つに、エルサレムに神殿が再建されるがあります。⁸⁹ 黙示録 11 章 1 節では、祭壇と 2 節で内庭を備えた「神の神殿」に言及しています⁹⁰。この章の他の部分を見れば明らかなように、ヨハネは、二人の証人が 144,000 人とともにその働きを行うエルサレムの再建神殿を視野に入れており、この出来事は、先に見たように、艱難期の前半に行われるのです。さらに、第二テサロニケ 2 章 4 節では、反キリストが「神の神殿」に座ると言われていますが、これは艱難期の最中に起こる出来事です(ダニエル 11 章 31 節; 以下も参照:ダニエル 12 章 11 節; マタイ 24 章 15 節; マルコ 13 章 14 節; 黙示録 13 章)。また、反キリストが神殿の儀式を停止するのは、艱難期中頃であることも知っています(ダニエル 9 章 27 節)。上記の三つのケースはすべて、エルサレムの神殿が艱難期の初期に建てられていることを必要とし、艱難期が始まる前にエルサレムに神殿が再建されるというシナリオです⁹¹。しかし、

⁸⁹ もちろん、現代のイスラエル国家内にも、すぐにでも再建を始めようとする動きがあります(ゲルシオン・ソロモンの「神殿信仰」Gershon Solomon's "Temple Faithful"運動が最も有名でしょう)が、これに対する政治的障害は手ごわいものです。

⁹⁰ シナイ写本の「内側」(ギリシア語では *esother: ἔσωθεν*)という読みが正しいのです。というのも、ナオス(神殿)には、祭壇を含む一番奥の「祭司の」中庭が含まれているからです。つまり、異邦人はこの神聖な場所に入るべきではないのです。エクソテンという読みは正しくなく、ここにはヘロデヤ人の「異邦人の中庭」への言及はありません。

⁹¹ ゼカリヤ 6 章 12-13 節は、メシアが神殿を再建することを暗示しているように見えますが、この文脈でのイブネは「建て上げる」(詩篇 147 篇 2 節他参照)を意味し、最初の再建というよりも、神殿全体の清め、修理、拡張を指している可能性が高いのです(ゼカリヤ 6 章 12 節; 列王記上 6 章 1 節参照)。エゼキエル書 40 章から 44 章を比較すると、千年王国時代の神殿群は、艱難時代の神殿について私たちが想定しているものよりもはるかに広範囲に及んでいます。ヘロデが小さな第二

モーセとエリヤという二人の証人がこの再建に責任を負っているという可能性も同様にあります。それは間違いなく悔い改めと霊的回復に焦点を当てていますが([マラキ 4 章 4-6 節](#)参照)、(第二神殿の再建を意味するゼカリヤ第四章の文脈では:[ゼカリヤ 4 章 14 節](#)参照)神殿儀式の復活を含む可能性が高いのです。最後に、エゼキエル書 40-44 章に記述されているように、神殿の構造と境内の大規模な改修は、メシアの再臨によって行われることが確かであるとすると(前掲脚注参照)、艱難期では、現在の政治的障害を考慮に入れると、その<神殿の>構造が精巧でなかったり、慌ただしい再建となる可能性があります。ですから、反キリストの台頭による予告的警告と同じように、エルサレム神殿の再建は艱難期の到来を明確に予告するものであるとは言えません。

3. 二千年紀の結論: 悪魔の反乱シリーズの第 5 部では、聖書に示されている神の時代計画の年代構成を、広範囲にわたって研究したことを思い出してください。ここでの議論に重要なのは、教会の時代は紀元 33 年に始まり、2 千年間続き、その中に艱難の 7 年間(ユダヤ時代の最後の「週」と重なる)が含まれているということです。このような状況を正しく評価すれば、艱難期の開始日は西暦 2026 年(その年の秋である可能性が高い)となるのです。もし、この計算が正しければ、信者に来たるべきその時についての非常に正確な指針を与えることとなります(もちろん、事前の準備の動機付けとなることは言うまでもありません)。筆者はこの予測に異論があることを十分承知しており、読者には提供された日付が以下の解釈の前提での計算であることを考慮するのをおすすめします(詳細は「サタン」シリーズの第 5 部を参照)。

1. 千年王国時代の 7 日間の解釈は聖書で教えられており、理解され適用されることを意味している。

2. 教会時代は二千年の日、つまり 2000 年続く。

3. 教会時代は、キリストの十字架と復活の後に開始されます。

4. これらの出来事は、紀元 33 年に起こりました。

5. 艱難時代は、教会時代とユダヤ時代の両方に属するので、艱難時代の開始を計算するときには、2000 年の合計から差し引かなければなりません。

6. 第七の封印が解かれた時の天の沈黙の半時間([黙示録 8 章 1 節](#))は、半年間の

神殿を巨大な建造物に変えたことは、緩やかな並行関係を示しています。

猶予期間を意味し、スタート地点が春から秋になります。

7. 聖書はこの時間軸を短くすることも長くすることも示していないので、このようなスケジュールの変更は予想されません。

上記の仮定はすべて正しく、受け入れるべきものであると筆者は確信していますが、読者は、艱難期がいつ起こってもおかしくないように準備することが再度求められます(なぜなら、我々が繰り返し主張してきたように、聖書によれば、艱難期は「差し迫った」ものだからです)。明らかに、上記の前提を一つでも崩すと、この予測は無効になります。また、全能者がこの聖書の年表を長くしたり、短くしたり、いつでも好きなように変更することができるということを指摘しないのは、不注意であると言わざるを得ません。しかし、私たちが聖書の中で与えられたものは、ある目的のために与えられたものであり、このような重要な点について聖書から学び得ることを報告しないのは、同様に不注意と言えるでしょう([使徒行伝 20 章 20 節](#), [20 章 27 節](#)を参照)。また、艱難期がいつ来てもいいように霊的に準備するのが賢明な道であることは、改めて強調しなければなりません。

最後に、反キリストの出現を事前に認識できず、艱難期前に再建された神殿を見ることができず、「七つの千年王国」の歴史体系が提供する年代予測に頼れないかもしれませんが、少なくとも艱難期が始まったことの事後的なしるしは認識することができるかと確信すべきです。二人の証人と 144,000 人の奇跡的な働き、イスラエルの多くの人々のイエス・キリストへの改宗、目に見える教会の多くの人々の背教への転落、反キリストの権力の獲得、恐ろしいラッパの裁きなど、聖書のページにある来たる艱難期の詳細は、少なくとも聖書に答えを求めるすべての信者に、主の帰還前の最後の 7 年間の始まりをはっきりと明確に証明するはずでです。ですから、私たちは、その日に知らないで遭遇するような人々の数に数えられることがないように、事前にこれらの試練に備えるように気をつけましょう([第一テサロニケ 5 章 4 節](#))。

- (1)小羊が第七の封印を解いた時、半時間ばかり天に静けさがあった。
- (2)それからわたしは、神のみまえに立っている七人の御使を見た。そして、七つのラッパが彼らに与えられた。(3)また、別の御使が出てきて、金の香炉を手に持って祭壇の前に立った。たくさんの香が彼に与えられていたが、これは、すべての聖徒の祈に加えて、御座の前の金の祭壇の上にささげるためのものであった。(4)香の煙は、御使の手から、聖徒たちの祈と共に神のみまえに立ちのぼった。(5)御使はその香炉をとり、これに祭壇の火を満たして、地に投げつけた。すると、多くの雷鳴と、もろもろの声と、いなず

まと、地震とが起った。(すなわち、これらは艱難の始まりに伴うしるしです)
(黙示録 8 章 1-5 節)

(続き) 来たる艱難期 第 3 部 A: 艱難期がはじまる

脚注

1. 悪魔の反乱」を参照。艱難辛苦の背景を参照。第 1 部「サタンの反乱と墮落」、II.3 節「三天」を参照。
2. 2. ラオディキアに先立つ最後から二番目の教会時代であるフィラデルフィアは、艱難に突入する現在の教会時代であるラオディキアの介入によって、年代的に「大きな試練の時から守られる」ことも思い起こされます。
3. 3. 黙示録 1:19 の「今起きていること」を教会時代全体の概観として理解する以外に、教会時代全体が何らかの理由で主の将来の出来事の概要から外されていると考える必要があります(当時でも教会のごく一部である七地方教会の現代の状況を例外として)。
4. 4.この将来のプロセスの概要については、「悪魔の反逆」の第 5 部を参照。艱難の背景 裁き、回復、入れ替え」、第 IV 部「来るべきもの」を参照。裁き、回復、入れ替えの第二段階と第三段階」を参照。
5. この原則は救いにも当てはまり、告白による罪の清めにも当てはまり、海苔は確かに象徴的な清めのために使われました(出エジプト 30:19-21 とヨハネ 13:1-20 を比べてください、どちらの場合も手と足だけが洗われます。)
6. 6. 色の象徴は、M.F. Unger, Commentary on the Old Testament (Chicago 1981) v.1, p.135 による。これらの特徴は、内側のベールにも当てはまります(出エジプト記 26:31)。
7. サタンの反乱」を参照。艱難の背景を参照。第 1 部「サタンの反乱と墮落」、II.6 節「七つのエデン」参照。

8. 8. 『悪魔の反乱』参照。艱難の背景。第 1 部「サタンの反乱と墮落」、II.5.b「幕屋の図解」。

9. 文字どおり、「新しく殺された」。

10. 10. 12 のパンは、主がすべての人に十分であることを示しています。イスラエルの各部族のために一つのパンがあり、イスラエル自体が将来のキリストの体全体を表しています（『悪魔の反逆』の第 5 部参照）。艱難の背景」第 5 部参照。「審判、回復と代替わり」、II.8.b.i 項、「イスラエルの独自性」参照）。

11. 11. みことばがあらゆる点で非物質的で神であるように、キリストという人格における福音の光を表す灯台は、地上の要素を含んでいません（すなわち、すべて金で、アカシアの木はありません）。同じ理由で、祭壇と食卓が持っている金の「冠」(zer)もランプスタンドにはありません。この「冠」は「肉なる」メシアの支配を示すものだからです。

12. これは、ヨハネから見て、信者たちが祭壇よりもヨハネに近いところにいるのと同じことです（黙示録 6:9 の「下」の意味）。

13. 13. ゼルバベルの第二神殿（エズラ 6:3 参照）もそうですが、後にヘロデによって「再建」された神殿もそうです。この神殿については、再建される前のキュロスの手紙の記述（上記引用）しかありませんが、その中の重要なフレーズは「土台（すなわち第一神殿）を修復するように」（NASB、ケーラー・バウムガルトナーの辞書、C.F. Keil の注解、omn. in loc.）です。これによって、幅と高さが保たれ、同じ立方体の形となったのであろう。ソロモンの神殿は全体的に「高さ 30 キュビト」でしたが、聖所の高さは 20 キュビトしかなく、この事実は幕屋の聖所の立方体形状の保存が意図的であったと解釈するしかありません：1 キ 6:2 と 1 キ 6:20 を比較してください）。ヨセフスを信じるなら、ヘロデの改造は内陣の「屋根を 30 キュビトに上げる」ことになり、立方体を汚しました（真理と真の象徴を意味のない、汚れた装飾に置き換えることは、神を信じない「崇拜」の典型です）。

14. このイメージの中で、モーセと地上のキリストとの関係は、イエスと天の父との関係と類似しています。．．出エジプト記 25:22「そこで私（父を表すイエス）はあなたがたに会う」（モーセはキリストの型；申命記 18:18；ヘブライ 3:1-6 参照）；聖書の中でモーセとキリストの間の型象徴の多くのポイントがあります。

15. 15. もちろん、イエスは命を捧げたのであって、文字通り血を捧げたものではありません。

ん。ヘブル書では、この誤解を招く印象を与えないように細心の注意が払われています(ヘブライ 8:3 参照:「捧げるもの」)。キリストの血 “は” “神の子羊” がイエスの犠牲を象徴する称号であるように、イエスの犠牲を象徴するものだからです。犠牲の動物はイエスのタイプであり、動物の血はイエスの十字架上の死のタイプであるという類推である。私たちはイエスを文字通りの “子羊” と考えるのと同様に、この図におけるイエスの “血” を文字通りと考えてはいけません(すなわち、動物はキリストを表し、動物の血は私たちのためのキリストの霊的死を表しています。) このような異端を避けるために、ヨハネはイエスが血を流して死んだのではなく、血がまだ彼の体にある間に “彼の霊を捧げた” ことを示すのに非常に苦労しています(Jn.19:33-35; Matt.27:50; Mk.15:37; Lk.23:46; Jn.19:30; 1Jn.5:6-8 参照)。そして、この異端のために、ヨハネが “霊を捧げる” ことを示したのです。ペテロの書簡 #9「信仰による救いと、キリストの血」も参照。

16. 箱そのものは、後に黙示録 11:19 で天の神殿に現れますが、真の神殿と神の礼拝の象徴として、また獣が地上の神殿(箱の正当な場所; loc. 参照)を中心に行っている反神教に対する差し迫った裁きとして登場するのです。

17. 悪魔の反乱』の II.5.b 節の「幕屋の図解」を参照。艱難の背景 第 1 部「サタン」の謀反と墮落」。ケルビムについては、『悪魔の反逆』シリーズの第一部(第三部.i)、第四部(第三部.3.b.1)、第五部(第二部.4)にも詳しい論考が掲載されています。

18. メシアが父と物理的に王座を共有するというこの密接な関係は、ソロモンの例外的な王座の建設にも表されていた可能性がある。第二歴代誌 9:17-19 には、この王座に黄金の「足台」またはチェベシュが(階段と一緒に)取り付けられたとありますが、この言葉の意味は明確ではなく、足台というより、王座の中の副座に相当するチェベシュである可能性があります。この可能性は、1)「チェベシュ」はヘブライ語では「足台」を表す通常の単語ではない、2)「チェベシュ」という単語はヘブライ語ではこの節にしか出てこない(つまり、この文脈だけがその意味を明確に示すことができる)、3)少なくとも一つの写本と版では「チェベシュ」の代わりに「チェブヘス」と書かれていることを考えると、より強くなるのが分かります。このような読み方は、王座に「子羊」と呼ばれる副座があったことを意味するかもしれません(スペルの変更で示された単語)。この名称は、間違いなく座の形状に由来するものです(王座の背が「エゲル」、すなわち子牛の頭の丸い形状から「子牛」であることを考えてみてください。1Ki.10:19)。天の御座の真ん中に「小羊」が間もなく現れることを考えると(啓示 5:6)、第二歴代誌 9:17-19 のこの読みは少なくとも考慮に値すると思います。

19. 19.特に第一部、「サタンの反乱と墮落」、セクション III.i「サタンの本来の地位」をご

覧ください。第 4 部「サタンの世界システム、過去、現在、未来」の第 III.3.b.1 項「地位の称号」を参照してください。第 5 部「審判、修復、交替」第 2.4 節「人類史の四つの時代(ケルビムで表現)」である。

20. 聖なる神と墮落した地球との不適合というこの「問題」は、明らかに悪魔によって予期され、神がその反逆に反応するためには、すべての被造物を破壊しなければならないことを仲間に納得させるためのプロパガンダとして使われました。しかし、サタンは「問題」を予期していたとはいえ、イエス・キリストという人物の中にある神の祝福された比類なき解決策には完全に驚かされたのである。『サタンの反乱』第 1 部の III.3.1 項「サタンのクーデター」を参照。艱難の背景「サタンの謀反と墮落」。

21. 「二つの天」は、旧約聖書のほとんどの版で「天」と訳されている一般的な単語のヘブライ語の二重形の文字通りの意味である。『悪魔の反逆』の第一部の II.3 節「三つの天」を参照。艱難の背景「サタンの謀反と墮落」。

22. 『悪魔の叛乱』参照。艱難辛苦の背景。第 1 部「サタンの反乱と墮落」の II.6 節「七つのエデン」。

23. 『聖書の基本』第 1 部の II.C.3.a 節「神示とキリスト教義の定義」を参照。「神学：神の研究」参照。

24. ですから、上記の出現のほとんどは、私たちの主イエス・キリストが御父の代わりに行動している姿です(Is.6:1-6 と Jn.12:41 を比較してください)。キリストが御父のために、また御父として行動していることを考えると、これらの聖句が提供する記述は、御父の神示にも適用できると考えられます(この点は、上述の両者の外観が酷似していることにも示されています;『聖書の基本』第 1 部の「旧約聖書におけるキリストの出現」、セクション II.C.3 参照。「神学：神の研究」の II.C.3 項参照)。

25. ヘブライ語の宝石とギリシャ語の宝石との対応関係は、ヨハネの黙示録 21:18-21 の新しいエルサレムの門の記述でも維持されています。出エジプト記 28:17-20; 39:10-13; エゼキエル 28:13 を比較し、「悪魔の反逆」シリーズ、パート 4、セクション III.3.b.2、パート 5、セクション II.8.b.i.7 と「来るべき患難」パート 6、セクション VII.7 も参照してください。

26. 同様に、黙示録 10:1 に登場する虹を持つ強い天使はキリストの型であり、戻ってくるメシアの人格における神の地球の再征服と回復を象徴しているのである。

27. サタンの反乱』第 4 部「サタンの世界システム、過去、現在、未来」の III.3.b.2 項「長老たち」を参照せよ。
28. ペテロの書簡を参照。レッスン 18:「永遠の報酬」、来るべき患難その 6、セクション I.7「教会の審判と報酬」を参照。
29. 「聖書の基本」第 1 部の II.B.3.b.3「聖霊(三位一体の第三位格)」参照。「神学:神についての研究」。
30. 詳しくは、「悪魔の反乱」を参照してください。艱難の背景」を参照。第 2 部「創世記のギャップ」。
31. しかし、空間的には地球とこの宇宙の反対側にある「上の水」との間の距離は計り知れないが(おそらく知ることもできない)、神学的にはこの最後の障壁の背後にある第三の天との間の「距離」は、見えないとしても限りなく小さいことを忘れてはいけない。神は遍在しているが、信仰の目には、神が提供する明証によってのみ見えるからである。上の図 2 を参照。
32. この真に二重の形態(ほとんどの世俗的な学問のペース)についての議論は、『悪魔の反逆』の第一部の II.3 節「三つの天」を参照せよ。艱難の背景、「サタンの謀反と墮落」、特に脚注#12 を参照。
33. 前置詞ディアの同様の用法については、第一ペテロ 3:20 を参照。この前置詞も「間に入る」(「によって」ではなく)を意味する。
34. バウアー・リアンダーの文法書とケーラー・バウムガルトナーの辞書の両方で可能性として言及されている。Jenni and Westermann's Theologisches Handwoerterbuch zum Alten Testament v.2 (Munich 1979) s.v. אַבְּסוּם の文献を参照。
35. "Abyss" は正しくは海の名前である:『悪魔の反乱』参照。艱難の背景。第二部「創世記のギャップ」、II.3.b 項「神の裁きのしるしとしての海」。
36. 悪魔の叛乱』参照。艱難の背景。第 2 部「創世記のギャップ」、II.3 節「海」。
37. 特に『悪魔の叛乱』(The Satanic Rebellion: ここでは、イザヤ書、エゼキエル書、黙

示録のケルブの間の表現の違いについて説明されています。同じシリーズで、第一部「サタンの反乱と墮落」のⅢ.i 節「ケルブ」、第四部「サタンの世界システム」のⅢ.3.b.1 節「ケルブ」、『聖書の基本』第二部 A「天使学」のⅡ.9.3.1 節「ケルブ」も参照ください。

38. R.L. Harris's article sub voce in the Theological Wordbook of the Old Testament (Chicago 1980), および Gesenius, KB, BDB lexicon entries を参照。

39. 39. ヘブライ語の語源 seraph , שרף 「焼く」に由来する。「サタンの反乱」を参照。艱難の背景を参照。第一部「サタンの反乱と墮落」Ⅲ.i 節「ケルブ」。

40. すなわち、クリストファニー、またはイエス・キリストの受肉前の顕現。聖書の基礎知識参照。第 1 部「神学: 神の研究」、Ⅱ.C.3 節「旧約聖書におけるキリストの出現」参照。

41. 「サタンの反乱」を参照。艱難の背景。第 5 部「裁き、回復、交替」、Ⅱ.4 節「人類史の四つの時代」。

42. 『悪魔の反乱』参照。艱難の背景。第 5 部「審判、回復、交替」、Ⅳ.3.c 項「交替Ⅲ: 父の降臨」を参照。

43. 『悪魔の叛乱』参照。艱難の背景。第 1 部「サタンの叛乱と墮落」、第Ⅲ.g 項「サタンの原状」。タブレとパイプ”

44. 上記「長老」の項に加え、『悪魔の叛乱』参照。艱難の背景 第 4 部「サタンの世界システム、過去・現在・未来」、第Ⅲ.3.b.2 項「位階の称号。長老」。

45. もし、この時点から文字通りの未来になるという意味でなければ(つまり、艱難の始まりにのみ起こり始める)、これはギリシャ語(新約聖書を含む)では全く例のない未来時制の用法であろう。これらの未来をヘブライ語の不完了体の影響を受けて説明しようとする試み(Moulton, Grammar of the Greek New Testament [Edinburgh 1963] v.3, p.86, et al.)は説得力がないばかりか、この問題を解決できない:完全に並行する構文のヘブライ語の不完了体も一応の未来となるのである。

46. つまり、教会時代の終わりです。「悪魔の反逆」シリーズ第 5 部「裁き、回復、交換」のⅡ.4 節「人類史の四つの時代」を参照してください。

47. 私たちが現在親しんでいる製本された写本は、聖典の完全なコピーを一度に提供

するためにキリスト教徒によって発明された(あるいは少なくとも脚光を浴びた)可能性は十分にある。Peter Katz 氏の論文「The Early Christians' use of Codices instead of rolls」、JTS 44 (1945) 63-65 を参照。

48. ヘブライ語の不完了形と前置詞'adh, אַחַר'の組み合わせは、この例では、事前の完成を要求するのではなく、プロセスの開始を可能にする(すなわち、「あなたの敵を足台とするまで座っていなさい」。メシアは、すべてが解決されるまで天国で受動的に待つように言われているのではなく、物事が解決され始める定めの時を待つように言われているのである。ですから、キリストが艱難に直接参加すること(最も顕著なのは、ハルマゲドンで反キリストの軍隊を個人的に破壊すること)は、この箇所と何ら矛盾するものではありません。

49. サタンの反乱」を参照。艱難の背景を参照。第 3 部「人間の目的、創造、墮落」の I.2 節「サタンとその天使に取って代わるために創造された人間」を参照。

50. ここでは、最も良いギリシャ語テキストの読みが与えられています。ほとんどの翻訳では、被造物を聖歌隊の役割に誤って位置づけていますが(権威のない写本の読みに基づく)、実際にはここでは被造物全体が、主が支配しようとしている実体的な要素として表されているのです。

51. 51. 『聖書の基本』第 1 部の「神の計画における三位一体の役割」、II.B.3 節を参照してください。「神学: 神を研究すること」。

52. 悪魔の反乱」の第 2 部を参照。艱難の背景」を参照。「創世記のギャップ」、セクション II.4「聖霊の抑制の働き」を参照。

53. 悪魔の反乱」の第 5 章を参照。艱難の背景」の第 5 部参照。「審判、回復と交換」、セクション III.1:「人間の血統の純潔に対するサタンの先天性攻撃(ネフィリム)」。

54. サタンの反乱」を参照。艱難の背景: 第 4 部「サタンの世界システム」II.5 項「サタンの世界支配の限界」、第 1 部「サタンの反逆と墮落」II.4 項「天使の活動領域」。

55. やがてわかるように、ラッパと鉢はともに実際の神の裁きのサイクルを表し、ラッパは(エジプトに対する十の災いに似た)最初の連続を表し、鉢は再臨に先立つ神の最後の警告の前奏曲を表しているのである。

56. 第1部「はじめに」の1.2.a節「患難」参照。

57. 57. 反キリストの王国は、ダニエルの第四の獣、復活したローマと同じです(ダン2:40-43とダン9:26を比較してください)、このシリーズの第3部Bで取り上げたテーマです。ローマの勝利の色としての白(特に白馬)の象徴については、H.B. SweteがThe Apocalypse of Saint John (Cambridge 1908) 93に記している「cf. Verg. Aen. iii.537 'quattuor hic, primum omen, equos in gramine vidi | tondentes campum late candore nivali'; on which Servius remarks, 'hoc ad victoriae omen pertinet'". (『勝利の予兆』)。(強調)。

58. 悪魔は、この最後の7年間の半統治の間に「あらゆる手段を講じる」だろう。このシリーズの第一部、第三節、「艱難の一般的性格」を参照してください。

59. 2キ:3:22「血のように赤い」を参照。セプトゥアギンタ版では、この文脈と同じ「赤い」を意味するギリシャ語、ピロス(πυρρός)が用いられているのです。また『ヨハネの黙示録』12:3において、赤は龍、サタンの色であることから、悪(この文脈では殺人と流血に現れる悪)を明確に指していることがわかります。

60. これはまだ宗教的迫害ではありません。この時、信者は死後、ハデスではなく、天国に收容されます(主の昇天前のように:上記の「聖所」の議論を参照してください)。

61. 61. セプトゥアギンタがヘブライ語の dheber(「疫病」:דבר)をギリシャ語の thanatos(「死」:θάνατος、ここでは黙示録6:8と同様)と習慣的に翻訳しているのを比較してください:例えば、Lev.26:25; 1Chron.21:12; Jer.21:6-7; Ezek.5:12 (et passim in Ezek.)など。

62. 62. 複数形なので、定冠詞は一般的なものではありません。したがって、これらを特定によく知られた「獣」、すなわち反キリストとその偽預言者であるとしか考えられない「獣」ではなく、一般的な野獣とみなすための文法的な障害がさらに生じているのです。さらに、エゼキエル書14章では、獣は最後に登場しますが、黙示録6章では、最初の封印の焦点である獣、反キリストを除いて、獣はこの時点まで言及されていません。

63. 地上の」という表現(ここでは単純な主格が使われている)は、黙示録13:11の表現(ここでは前置詞エク「から」があり、偽預言者の起源を述べている)とは異なっている。反キリストもその偽預言者も「地のもの」(すなわち、地上のものであり、これらの動向は神の計画によるものではないことを示す)であるのに対し、偽預言者は「地から」出たも

のであり、黙示録 12:17-13:1 では反キリストが「海から」出たものです(このシリーズの第 4 部で論じる予定です)。

64. しかし、基数「一」がそれに続く序数を導くことは、聖書の用法に前例がありません。創世記 1:5 の「一日」が「二日」「三日」などに続いているので、普通は「第一の日」と訳します。

65. 祭壇の下にいないのではなく、祭壇より低い位置にいます。祭壇はキリストの型であり、キリストのために死んだ者は皆、キリストとの祝福された交わりを楽しむことができることを強調しています。まもなく、過去の殉教者たちと一緒に、「御座の前」(=「祭壇の下」)の同じ場所に、艱難時代の殉教者が来るでしょう(啓示 7:9)。

66. このキリストのための苦しみの最も極端な例については、ペテロの書簡#25「個人的な患難」、および

67. 人間の非物質的な部分は、正しく言えば、[人間の]霊です。肉体との組み合わせで、人間のこの非物質的な部分は内面的な生活、すなわち心の考えと意図を享受しており、この言葉は聖書では「魂」の事実上の同義語です。魂、「心」、「霊」の聖書的用法についての詳しい説明は、「悪魔の反乱」をご覧ください。艱難の背景: 第 3 部「人間の目的、創造と墮落」、II.3 項「人間の精神」、II.4 項「人間の二律背反」。

68. 復活の体と死後の信者の中間状態については、ペテロの手紙第 20 章「復活」も参照してください。

69. ここで、最初の四つの封印(その馬は艱難の動向を象徴している)の文脈を考えると、ゼカリヤ 6 章のこれらの馬は(天上のものではあるが)実在することに注意すべきです。黙示録 19:11-14 のキリストと復活した信者の軍隊の馬と馬を比較してください(そして、2Ki.2:11; 6:17; Ps.68:17; Is.66:15; Hab.3:8; 3:15; Zech.1:8-11 を参照してください)。

70. 70. 霊的な意味で、これはもちろん、すべての信者に与えられた命令です(1Cor.11:1; 1Thes.1:6 を参照)。ペテロの書簡 17 番「キリストに倣う」参照。

71. サタンの反乱のパート 5 を参照。艱難の背景」の第 5 部を参照。“審判、回復、入れ替え”、セクション II.8.c、“四つの隙間の象徴とその十二日のグループ分け”ポイント #5、“イスラエルは究極の組織”を参照してください。

72. 異邦人クリスチャンの多くは、教会におけるユダヤ人の歴史的な重要性や神の計画における彼らの優位性を十分に理解していないため、まだイエス・キリストに信仰を置いていないユダヤ人の背景を持つ人々に福音を伝える際には、注意と周到さが必要であるということが明確に示唆されている。私たちは皆、私たちの主を証する責任がありますが、常に繊細さをもってそうしなければなりません(1Cor.9:19-23 参照)。

73. 以前にも説明した現象です:「悪魔の反乱」のパート 5 を参照してください。艱難の背景の第 5 部参照。「審判、回復と代替わり」、II.8.b.i 項、「イスラエルの独自性」参照。

74. 使徒パウロの宣教生活もこの点で驚くほど似ている(1Cor.4:8-13; 2Cor.4:7-12; 6:3-10; 11:16-33; Phil.3:7-11; et passim in Acts and the Pauline Epistles)、この事実は彼の密接な“キリストの模倣”から驚かないはずである(1Cor.11:1)。

75. 過越の印(出.12:7)を参照。他の例としては、教会時代の信者に対する聖霊の普遍的な封印(2Cor.1:21-22; Eph.1:13-14; 4:30)、エリシャの火の車(2Ki.6:17)、主の天使によるイスラエルの保護(IS.37:36; 63:9)、個々の信者の「守り神」(マタイ 18:10、詩編 91 参照)などがありますが、確かにこれだけには限られないのです。

76. また、すべての信者が現在享受している御霊の“封印”は、イエス・キリストの信者としての復活を保証しています(上記 III.2 節参照、2Cor.1:21-22; Eph.1:13-14; 4:30)、また黙示録の巻物にある 7 つの封印は適切な時期にその実施ができないようにしています(上記のセクション IV 参照)。

77. 黙示録 17:6 で、女バビロンが「聖徒の血、イエスの証人(すなわち殉教者)の血に酔っている」(ルカ 21:13 参照)のは、疑いなく 144000 人の働きと犠牲が少なくとも部分的に視野に入っているのです。

78. この箇所と“終わり”のしるしとしての世界的な伝道との関連については、以下の第七節、“来る患難のしるし”を参照してください。

79. イエスとヨハネの働きの年表は、「悪魔の反乱」の第 5 部を参照してください。艱難の背景をご覧ください。「裁き、回復、交換」、セクション II.9.a.3、「キリストの十字架刑」を参照してください。

80. エフライムは若いけれども「より偉大な」息子なので、ここでは父親の名前で識別さ

れています(創.48:19、民.13:11 では「ヨセフ族」が「マナセ族」で説明されていることを参照)。

81. 81. 例えば、十二使徒に与えられた特別な榮譽(ルカ 22:30 の「十二の王座」、黙示録 21:14 の「十二の門」と比べてみてください)。

82. 悪魔の反乱」の第 5 部を参照。艱難の背景」の第 5 部を参照。審判、回復、交換」の第 II.8.c.7 節「ユダヤの儀式暦」を参照。タベルナクル(ブース)。

83. このシリーズの第一部、第五節、黙示録 1 章 3 節「時が近づいたから」を参照。

84. 悪魔の反乱シリーズ第 4 部「サタンの世界システム」参照。

85. 広範な議論については、ペテロの書簡#27 を参照してください。「信仰を脅かす三つの教義」を参照してください。

86. 使徒言行録 1:7 はしばしば「あなたがたが知るべきことではない」と誤訳されていますが、「あなたがたに時代や季節を決めることはできない」と表現されるべきです。ギリシャ語の動詞ギニョスコは一般的に「決定する」という意味を持ち、特にこの箇所のようにアオリストの場合はそうです。主はすぐに「父がその権威によって定めたもの」と付け加えられたので、文脈はこの修正訳を強く支持しています。つまり、イエスが言いたいのは、これらの事柄を決定したのは父であり、あなたがたの希望で決定されるものではないということです。なぜなら、主の弟子たちは、その前の 6 節での質問を通して、主がすぐに王国を樹立されることをはっきりと望んでいたからである。ですから、7 節での主の叱責は、御父の予定について全く知らないことを称賛しているのではなく、この問題で重要なのは御父の意志であって、彼らの意志ではないこと、彼らの目にはメシアの王国が始まる時が熟しているように見えても、我慢しなければならないことを彼らに戒めるものなのです。また、この言葉はペンテコステで聖霊が授けられる前に使徒たちに与えられたものであることも考慮しなければならない。御霊は年代を含めた靈感の主であり、イエスがすでに明らかにしていたように、彼らに「来るべきこと」を伝える方です(Jn.16:13; cf. 2Pet.1:16-21)。彼らは後に“来るべきもの”を理解するようになるので、7 節は 8 節と関連して理解されなければなりません: “しかし、聖霊があなたがたの上に臨まれると、あなたがたは力を受けます.... この文には、先に約束された聖霊のさらなる啓示(終末に関する情報を除く)が含まれていることは明らかである。ですから、数年後、パウロはテサロニケの人々に使徒言行録 1:7 と正反対のことを言うことができます(つまり、一般に誤解されていることです)。”時と季節については、あなたがたはよ

く知っているので、だれかがあなたがたに書き送る必要はありません。(1Thes.5:1-2)です。

87. 87. 実際、聖書にある見張りのための具体的な言及はすべて、艱難前ではなく、大艱難前と第二再臨前です(例えば、ルカ 12:39-40; 17:26-36; 21:7-36)。

88. サタン「の反乱」の第 5 部を参照。艱難「の背景」の第 5 部を参照。「審判、回復、交換」の第 III.1 節、「人間の血統の純潔に対するサタンの先天性攻撃(ネフィリム)」を参照してください。

89. もちろん、現代のイスラエル国家の中にも、すぐにでも再建を始めようとする要素がありますが(ゲルシオン・ソロモンの「神殿信仰」運動が最も有名でしょう)、これに対する政治的障害は手ごわいものがあります。

90. シナイニクス写本の読みは、「内側」(ギリシャ語ではエソテン:ἐσωθεν)が正解である。なぜなら、ナオス(神殿)には、祭壇を含む一番奥の中庭が含まれており、この中庭は、この町を踏みにじる異邦人に「与えられた」、つまり、異邦人はこの神聖な場所にはいけないということだからである。エクソテンという読み方は正しくなく、ヘロディア人の「異邦人の宮」への言及はここにはない。

91. ゼカリヤ 6:12-13 は、メシアが神殿を再建することを示唆しているように見えますが、この文脈でのイブネーは「建て上げる」(詩編 147:2 他参照)を意味し、最初の再建よりも神殿群全体の浄化、修理、拡張を指していると思われます(同様に、ゼカレ:12;1キ.6:1 参照)。エゼキエル書 40-44 章では、千年王国時代の神殿が、艱難時代の神殿よりもはるかに大規模であることが示されています。ヘロデが小さな第二神殿を巨大な建造物に作り替えたことは、これと類似しています。

イクシスホーム